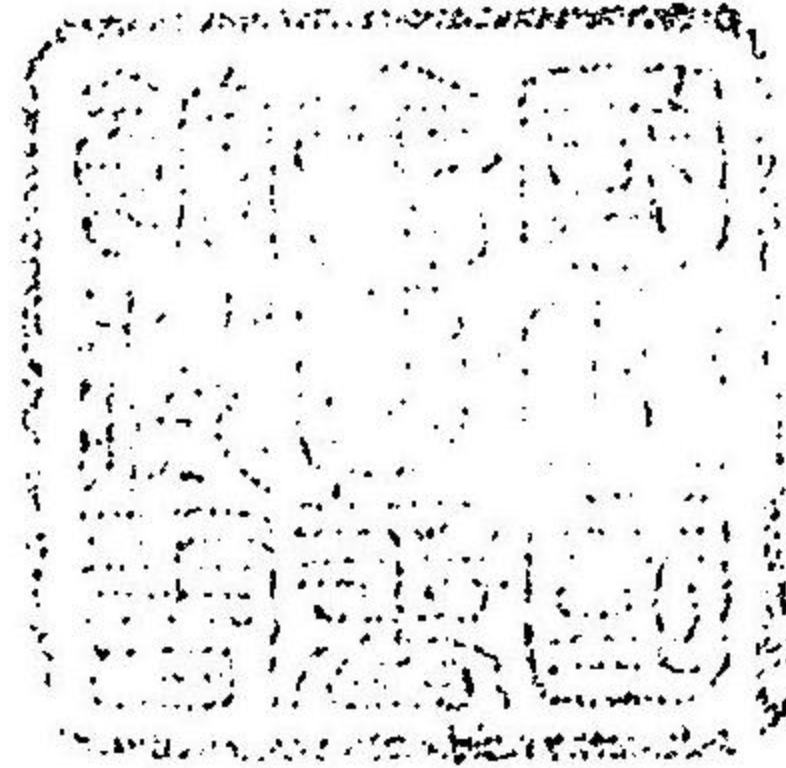


耳 G-36

國學三遷史

121.2
N483k



221891

國學三遷史序文

我國の中世、武道いと盛にして、文道いたく衰へたりしが、
徳川將軍大政を預れるより、文武の道併び行はれてこそ、
國道全けれと政ち給ひけり。かくて兩道大に行はれて、諸
藩も皆之に則り、文を學び、武を講ぜぬはなきに至りぬ。茲
に水戸中納言の國史を修め、國文を輯められし以來、皇政
維新の後、明治昌代の二十年前後に至るまで、凡二百數十
年間における、わが國文學上の歴史はも、如何なるさまな
りしかと云ふに、まづその大方は、この三遷史の如くなり
しなるべし。この書は、その三遷の事態を論述して、次にそ
の期間に係る文學者の傳記著書等を擧げ、以て論旨の事
實を徹したるは、事新らしく珍らかにして、いさめてなき

わざにかかれ又文學者系傳とも題せりとなり。嘗て予
に閱を乞へりければ、こゝかしこ心しらひして返したる
に、このほどまた印刷せむとて、序文をこゝひ來りぬ。そも
そもこの書よ、一名の方を旨として見むには、學者の系傳
なほ足らずて、あかぬふし、くもあなるめれど、こはもと
國學の三遷を要としたれば、それに重く大なる功蹟あり
し人の系傳のみにて、もはら事足りぬべきわざなるから
に、こゝに拘はる事、軽く少き末のすゑなる人々までのほ
とて、省略せしめたりき。かゝれば今しも、そのよしこそわ
りがてら、いさゝかかくなむ。

明治三十年八月

井上 頼 圀

國學三遷史

凡 例

一本書は、わが國の文運開發の如何を一覽のもとに知らしめ、且國學家の系統、傳記、著書等を擧げて、斯學を研究せむとする者の、便宜にも供せむとて編せり。

一國學家の傳を擧げたる書、世に其の數少からざれども、多くは筆のまにまに物したるなれば、や、この學術上におきて、廣大の功績を顯はし、數多の著書を殘し、以て今日の隆盛を極めたりし、その原動力たるものなるを、或は省きて其の域に洩し、或は一地方にのみ其名あるをも、これと相混載し、區々にしてわかたず、又或は國學上にさしたる事蹟なきものをも加へたり。本書は、是等の上に大に注意を要し、博識の諸士にも質して編述したり。

一本書は、靜幽堂叢書、本朝傳記、池底叢書、雜書解題、雜書撰者小傳、古學小傳、群書一覽、近代名家著述目錄等を本據として、近世畸人傳、三哲小傳、契沖阿闍梨行實、柳園詠草、其の他現時出版の諸書、及び誌類所載の傳記逸事等に参照して成文せり。

一國學を研究せむとする者は、先輩諸學者の傳を知るのみにては、尙闕くる所ありて飽

かぬふし多かるべし。そは畢竟學統及著書と學派の區別とを知る能はざればなり。單に國學とこそいへ。其の區域甚廣く、其の專修する所各異りて、千枝一幹ならず。假令、その根幹たる所一なりとするも、四大人の學統を繼ぎて、その系譜内に屬するあり。或は他に獨立して、同道を行く者あり。又は更にこれに關せざるあり。故に本書は、此等の差異を區分して、研究上の便宜ならむ事を務め、且別に一表を製して、まづ大體を一括して記憶せしめむとせり。

一 學統系譜には、其の關係を示さむが爲に、現時も存生なる人々を加へ、又小傳を掲げざる人をも附加したり。見む人これを諒せよ。

一 姓名控見の下に、數字を以て記したる者は、右は生れし紀元にして、左は歿せし年度なり。而して其の最下に記せるは、明治三十年代より溯りて、その歿年の數を知らせたるなり。是等をも別に附表して明ならしむ。

一 在來の學者傳記等には、その著述書目を闕くもの多し。故に其の學者たる事は知るべきも、如何なる著書あるかを知る事能はず。故に又如何に世上を裨益せしかをも知るに苦む所あり。本書は、其著述書目を加へて、其の條をも明知せしめぬ。

一 吾が國學上を裨益せし事少からぬ人にして、其の著書も亦大に世に行はれつゝある

も、其の傳記委しく傳らざる者あり。或は編者の眼識狭くして、これを發見せざるもあり。そは高橋殘夢の如き、若狹の義門の如き、皆その詳傳を逸し、また中村尙助の如き、幻裡庵主人の如きは、編者いまだ小傳逸事をも眼にせざるなり。故にそれらの人々をば、今暫くこれを闕き、他日發見するに従ひて増訂せむとす。

明治三十年七月三十日

編 述 者 識

目次

緒言

第一章 國學勃興の時期

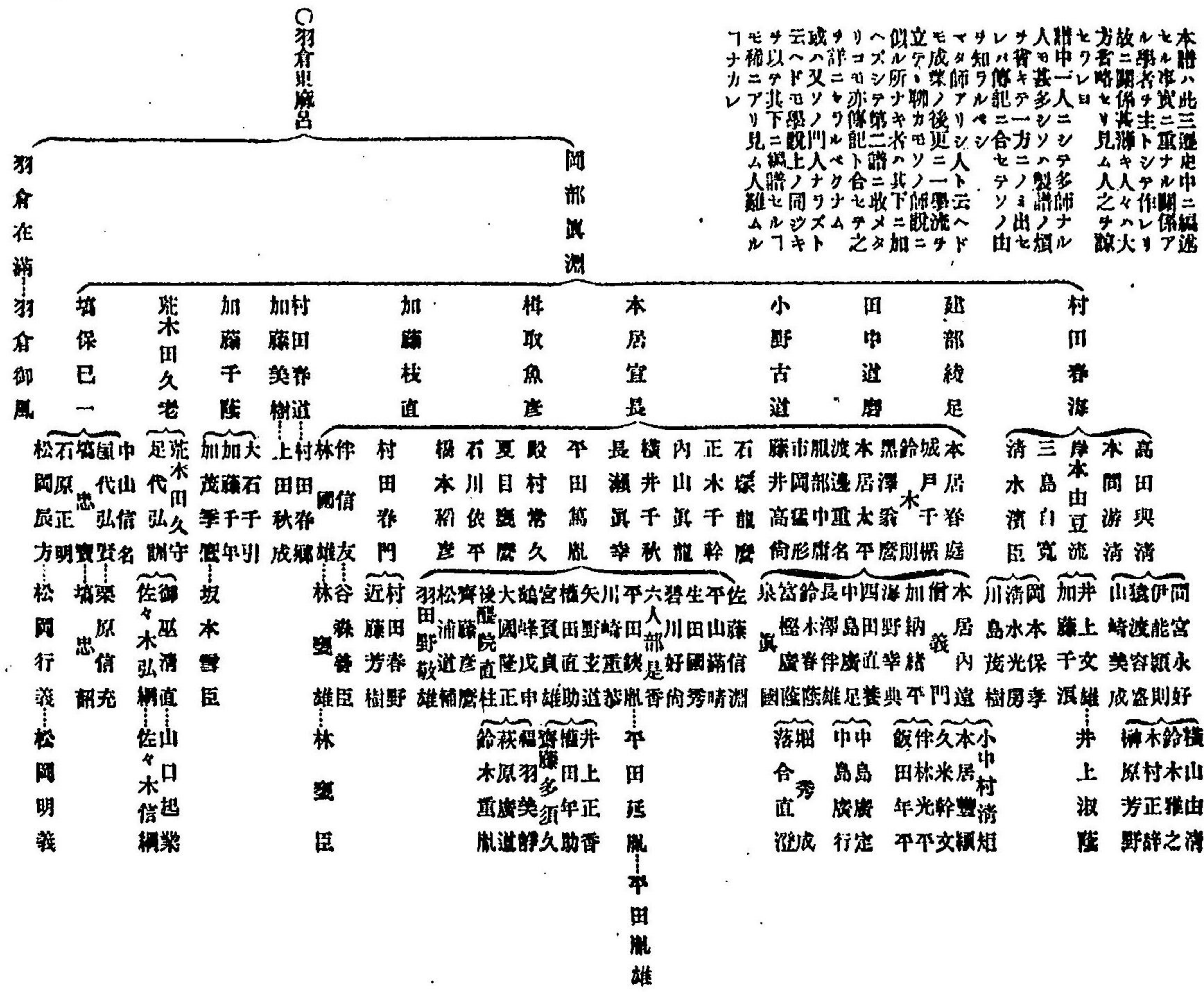
下河邊長流	六頁	壺井義知	四十二頁
德川光圀	八頁	羽倉東麻呂	四十三頁
僧 契冲	十四頁	有賀長伯	四十八頁
北村季吟	十七頁	多田義俊	四十九頁
戸田茂睡	十九頁	羽倉在滿	五十一頁
貝原益軒	二十一頁	僧 文雄	五十四頁
安藤爲章	二十七頁	岡部眞淵	五十五頁
谷 重遠	二十八頁	建部綾足	六十五頁
新井白石	二十八頁	谷川士清	六十八頁
跡部良顯	三十七頁	加藤美樹	六十九頁
天野信景	三十九頁	富士谷成章	六十九頁
		楫取魚彦	七十一頁
		伊勢貞丈	七十四頁
		羽倉御風	七十七頁
		田中道磨	七十八頁

加藤枝直	七十九頁	富士谷御杖	百三十二頁
藤井貞幹	八十頁	清水漢臣	百三十三頁
小澤蘆庵	八十頁	尾崎雅嘉	百三十七頁
横井千秋	八十六頁	本居春庭	百三十九頁
本居宣長	八十七頁	石川雅望	百四十頁
第二章 國學完成の時期		本居太平	百四十三頁
大塚嘉樹	九十八頁	大石千引	百四十六頁
荒木田久老	百一頁	狩谷望之	百四十八頁
伴 嵩 巖	百二頁	山田以文	百四十九頁
加藤千蔭	百六頁	中山信名	百五十一頁
上田秋成	百十頁	村田春門	百五十二頁
村田春海	百十五頁	鈴木 朗	百五十三頁
内山眞龍	百二十二頁	藤井高尙	百五十三頁
石原正明	百二十五頁	屋代弘賢	百五十七頁
塙保巳一	百二十六頁	香川景樹	百五十八頁

松岡辰方	百六十一頁	本居内遠	百九十七頁
平田篤胤	百六十二頁	足代弘訓	百九十八頁
城戸千楯	百七十八頁	加納諸平	二百一頁
岩本由豆流	百七十九頁	鹿持雅澄	二百二頁
伴 信 友	百八十頁	鶴峯戊申	二百四頁
高田興清	百八十四頁	石川依平	二百六頁
海野幸典	百八十七頁	長野義言	二百十頁
橋 守 部	百八十九頁	山崎美成	二百十二頁
僧 義 門	百九十頁	鈴木重胤	二百十三頁
黒澤翁滿	百九十一頁	萩原廣道	二百十四頁
林 國 雄	百九十二頁	中島廣足	二百十六頁
富樫廣蔭	百九十三頁	前田夏蔭	二百十七頁
第二章 國學衰移の時期		内藤廣前	二百十八頁
本間游清	百九十五頁	黒川春村	二百十九頁
色川三仲	百九十六頁	栗原信充	二百五頁

國學學統略譜第一

本譜ハ此三選中ニ編述セル者ヲ主トシテ關係アル方者略セリ見ム人々ハ大...



國學學統略譜第二

本譜ハ第一圖ノ如ク一掃シ得ラズ學統區々ニ互レルヲ以テ年度ノ前後遠近ニ拘ラズ...

- A list of names organized by family or lineage, including 伊勢貞丈, 山崎伊宮, 高橋直隆, 高崎正風, etc.

國學三遷史

井上 頼 園 檢 閱
逸見 仲三郎 增訂
中野 虎 三 編 述

緒 言

本邦上古における文學は、如何なるさまなりしか、傳書甚乏しきを以て、今詳に之れを知るによしなし。然れども、古事記、日本紀等によりて傳へられたる歌の一部、或はその頃の人言行等を以てすれば、まづ其の全般を窺ひ知る事を得らるべし。而してその真正なる文學は、漢字渡來の後、始めてその形を成せる者なれば、其の已前に於けるものは、今特に之を記して、後世に傳ふべきものなきが如し。

紀元已後九百四十五年、人皇第十五代應神天皇の十六年、始めて百濟より論語千字文等を獻せり。これよりして、本邦に漸々漢字行はれ、爾來これを以てわが言辭を記す事とはなれり。故に本邦文學の歴史として、その全く發端の二字を下し得べきは、實に應神天皇の御代なりき。奈良朝の頃に至りて、歌學盛に發達し、規模宏遠にして、快活なるさま、實に

後世の範となすに足れり、その末頃より物語書など出来て、一般の文學上におきて、やゝ見らるべき形體をぞ成せりける。

平安の朝に至りては、歌學上は大に衰へたるにや、壯快なる風調は少くして、男女の間なほに贈答せし短歌のみ多く、そのさま女々しくぞ成りにたる。されどもこれに引替へて、國史の撰修といひ、漢文漢詩の流行といひ、物語、草紙、日記、紀行、歌序、雜書等の如き、各種の文華次第に開き出でたり。故にこの朝の間を、文學の盛時とや云ふべからむ。かくて延喜天曆の頃、歌學復大に勃興したり。こは當時朝廷におかせられて、歌道の衰微せるを慨嘆せられ、勅撰集を作らしめ給へるに依れり。その長歌は、奈良朝に及ばざる事甚遠く、地に伏して星を探らむとするが如し、然れども短歌に至りては、優調麗詞、後世の模範たる事必せり。降りて寛和以後に至りては、ある一種の文學大に隆盛を極めたり。則ち花山一條三條の朝におきては、平假名がきの巧妙なる、清少納言、紫式部の二女を始めとし、赤染衛門、和泉式部、大貳三位等の才女、引續きてあらはれいでたり。然してこの女史等が、筆鋒より咲出でたる文華は、精美巧妙千歳に薫り、江湖の耳目を驚しつゝあり。こゝにおいてか、大に文學に彩色を添へたりといひつべき。

然れども、一榮一枯一盛一衰は、數の免れざる所なればにや、爾來文學は、漸々に下れるも

の、如し。そは戰亂等によりて、發達を妨げられたるにもよれるか。則ち源平二氏の頃より、鎌倉時代等の事柄を記せる軍記類物語文等に比較して之れを知るべし。然れども、奈良平安の頃の餘光、全く消失せざればにや、卜部兼好、鴨長明等の如きあり。又戰記軍物語なども、織田豊臣時代の事を記せるものよりは、遙に超越してありき。

降りて足利室町の末葉に至れる頃は、打續ける戰亂に、世は麻の如くに亂れ、劍戟の音叫喚の聲のみ、晝夜耳朵を貫きつゝ、呻吟の聲は遠く跡を絶ち、和漢の典籍、多くは灰燼となりにけり。されば、如何でか文學を維持する事を得む。かくて和漢の文學は、公家、社家、寺院等の間に潜伏して、僅々たる區域に餘命を繋げるのみ。

然るに織田豊臣兩氏を経て、徳川氏の初めにかけては、やうく亂離を倦みはて、或は遠世して文學に一世を安せんとし、或は文道を起して、武道の勢力を矯めんとして、隱然こゝに志す者多かりしが如し。然れどもいまだ武運に壓せられつゝ、文運世上に開くべき度に達せざりしに、徳川初代の將軍家康大に茲に感ずる所ありしにや、國家經綸の策を講じ、普く天下の碩學鴻儒を待つ。その初め、藤原惺窩の名を聞きて、之を陣中に延き見り。天下平定の後、學校を起し、經籍を印行し、文庫を建立して、一般の士民等に講書を許した

抑文學は政治風俗など、其の進歩隆運を共にする者なり、故に社會の動搖靜らむには、自然文華を開き、實子を結ぶべき理勢なれば、徳川幕府の政治は、三代將軍家光において整頓し、文學は五代將軍(綱吉)に至りて、盛昌を極めたりと云ふべし。すでに然らば、わが國の文學は、此の時よりして、花實共に榮え、其の範圍漸次に擴張せられて、あらゆる文學を網羅したりしにこそ。

いでや明治年間の文學も、前記の時代を根幹として、枝葉の繁茂をなし、而して又、外來の文化、大にこれが進歩の力を補助せりしかれば、まづ其の根幹たる前記時代に於ける、國學者の小傳を知るは勿論、その系統學說等を心得むとする事は、わが國の文學を攷究する者の、最必要なる事ならずや。故に、其の時代に於ける沿革を聊か陳述し、且これが學統小傳等をも知らしめむとす。而して今、この時期を分ちて三期とす。則第一期を國學勃興の時期とし、第二期を國學完成の時期とし、第三期を國學衰移の時期とす。其の詳細は、次章已下に論述するを見るべし。

第一章 國學勃興の時期

此の期間は、水戸宰相(光圀)が、間接或は直接に、この學に盡されしを首として、本居贈四位(宣長)の歿せられし享和元年迄を劃りとす。此の長日月の間に於て、如何なる學業の起りしかといふに、これ則國文學勃興の期間にして、國語國文の學起りてその基礎をなし、大に國學上の發達を助けたり。見よ奈良朝におきては、和歌の隆盛を極め、爾後平安の朝、鎌倉時代、足利時代等における、或は物語出で、日記表はれ、戰記、草紙の類等、芽を萌して漸く花を開き、遂に此の期間に至りて實子を結びたりし事を、そはこの期間以前におきては、國史國文等を、解剖的に研究し、或は比較的の考證する學術は、更に開發せざりしにても明なり。

そも、徳川時代におきて、始めて文學上の基礎組織等に重要な、語學上の問題勃興して、是等に係る著述の世上に顯はれたるは、則僧契沖の和字正濫抄、和字正濫要略、貝原益軒の點例、和字解、日本釋名、新井白石の東雅、同文通考、東音譜、古史通、僧文雄の磨光韻鏡、加茂真淵の語意考、歌意考、文意考、谷川士清の和訓栞、富士谷成章の裝抄、頭插抄、脚結抄、六運圖說、楫取魚彦の古言梯、伊勢貞丈の安齋叢書、本居宣長の漢字三音考、字音假名遣、地名字音轉用例、阿刈腹、玉篋皇國言葉活用抄、詞の玉の緒の如き、皆語學上の著述にして、後世の模範たるもの多し。

然れどもこれらの發明説は、その原動者として大に力あるも、其の考案は甚粗雑にして、その正確なる學説、全備なる法格の如きは、第二期に至りて始めて表るといふべきなり。故に今この期間の要領を撮言すれば、古書古文和歌等を解釋せむとするに連れて、語學上の須要を感じ、茲に始めて語典の編述あるに至れりといふべし。今この第一期における、諸學者の小傳を擧げ、系統學派の如何及び著述の種目を知らしめ、その如何を明知せしめむとす。

下河邊長流 二二八四二二一

長流名は具平、通稱彦六、長嘯ともいふ。長流は其の號なり。本姓は小崎氏、大和國宇陀の人なり。幼より學を好み、長じて國學に通じ、詠歌は古禮を善くす。故に世人、古學の起る長流に權輿すといふ。

中年より、難波に出で、住居せしかば、遂に妻帯せずして、讀書するをのみ樂とせり。性、強記にして、萬葉集、古今集、伊勢物語等、凡て之れを暗記して、一字をも誤らざりといふ。難波の富豪、その名を聞きて、多く門下に集る。然れども人となり、氣韻高くして、他に束縛せ

らるゝ事を好まず。意に適はざる事あれば、來訪者にも會見せず。富豪者の招きにも應ずる事なく、唯枕を高くして打眠るのみ。

時に水戸黃門(光圀)大に學を起さんとし、その名を傳聞き、禮を厚うして之を招く。然れども終に應せず。依りて紙筆を賜ひて、萬葉集の註釋を請ふ。長流これを諾しながらも、尙意の向はむ時ならずでは、筆を採らず。又机に向へる時も、一二首づゝを註して止みたり。故に釋全く成らずして、終に貞享三年六月三日歿す。時に年六十三歳なりき。

長流は、契沖と方外の友なり。故にその歿せし後、契沖遺稿を集め、晚歌和歌集と號して、世に梓行せり。長流又漢學にも長ず。嘗て述懐の心をよめる歌に、

かつら川心にかけし一枝も折られぬ水に身は沈みつゝ

又、大和國は故郷なりければ、

終にわが着てもかへらぬ唐にしき龍田や何のふるさとの山

以て性質をも知られ、小傳をも補ふに足るべし。今その著書を擧ぐれば、左の如し。

- 歌仙抄 萍水和歌集 續歌林良材 累塵藻水草
- 晚花和歌集 萬葉名寄 林葉累塵集 枕詞燭明抄

徳川光圀 二二八〇八一九七

光圀は、徳川家康の孫にして、頼房の第三子なり。小字は千代松、字は子龍、初の名は徳亮、字を觀之といひ、日新齋、又常山人、又準然子、又梅里と號す。水戸の城主なり。大に治績あり、其の名後世に赫々たり。

光圀生れて岐嶷、風神俊邁、歳甫めて四歳、群兒と遊戲す。眞弓山等覺院の僧、之を相して此の兒相貌非凡なり、何ぞ常に城中に居らしめざるやといへり。時に父頼房いまだ嗣を定めず、將軍家光、頼房に命じて諸子を探ばしむ。依りて其の傅相中山信吉、水戸に至りて諸子を見る。時に光圀歳甫めて六歳なり、信吉を呼びて翁と稱し、直に盤上の打砲を取りて之に賜ふ。信吉乃千代松を抱きて、是れ眞に吾が郎君なりと云ふ。是に於て復命す。依りて光圀迎へられて世子となり、江戸の邸に引取らる。翌年の春頃、や、一日大に雪ふる、則即座に一首を詠す。

降る雪が白粉ならば手にためて小かうが顔にぬりたくぞある

小かうとは、光圀の介添人にして、男優りの老女なりきとなり。

光圀長じて學を好み、博く群書を閲覽し、善く文章を屬す。一日光圀、父に従ひて斬囚を櫻馬場に見る。其夜父、光圀に命じて曰はく、汝能く晝間の斬首を提げ來れと、當時の馬場は、

邸の西南に在りて、樹木鬱蒼たりと云ふ。故に夜に入れば、暗黒にて路頗辨じがたし。然るに光圀は直に茲に赴き、搜索して遂にその首を得、髪を拏げて曳き來る。父乃刀を賜ひて、其の剛勝を賞す。時に年僅に七歳なり。九歳にして元服を加へ、從五位下に叙せられ、尋いで從四位下左衛門督に轉ず。十二歳にして、既に騎馬游泳の術に熟す。嘗て父の試に依りて、淺草川に入り流を絶ちて渡る。父之を賞して、宗近作なる小刀を賜ふ。光圀常に、兄頼重を越えて嗣となれるを以て、自安んぜず。嘗て伯夷傳を讀みて大に感ずる所あり。茅土を頼重の子に傳へむと欲す。父卒して其の封土を嗣ぐに際し、一日兄頼重及諸弟を父の神威前に會し、即謂ひて曰はく、某弟を以て兄に越ゆ。本意ならざるを思ふ事久し。而して隱忍今に至る者は、先君の世に在るを以てなり。明日幕使の來らむを意ふに、是れ某をして封を紹がしむるにあらむ。願はくは姪松千代を得てその嗣となさむ。然らずんば、明日の事某敢へて命を拜せざるべしと、諸弟その不測の事あらむを慮り、頼重に勸めて之れを諾せしめたり。

光圀夙に載籍の已むべからざるを知りて、修史の志厚かりき。明曆三年、始めて大日本史を撰び、彰考館を置き、俊才の士を招き、編輯檢討其の體裁筆削の如き、必自史臣と反覆商議し、皇統の正閏を正さむと深く心を留められ、神功皇后を后妃に列し、大友皇子を本

紀に掲げ、正朔を南朝に繋らる。神器の京師に入るに及び、始めて統を後小松天皇に歸するが如き、皆これ光圀の卓見なりとぞ。然れども朝廷を憚りて敢へて名を命せず、之れを見て單に史稿と稱せらる。後子孫能く其の志を繼ぎ、校訂刪補敢へて怠らず、玄孫治武に至り、關白鷹司政熙に依りて、大日本史の名を公にせん事を請ふ。朝議之れを許さる。是に於いて鏤刻し、上表して之れを獻す。光格天皇、殊に勅を傳へて之れを褒め給へり。寛文七年、父頼房の病を報じ來るに遇し、光圀直に江戸の邸を出で、晝夜を兼ねて國に就く。其の卒するに及び、哀傷して食せざる事三日、葬儀一々禮制に遵はれたり。藩士の嘗て譴責を蒙りて屏居する者、皆之を許して柩を路傍に拜せしむ。時に頼房の近臣等、之に殉せんとす。光圀自其の家に至りて之れを諭し、堅く殉死を禁じたり。當時諸藩戰國の弊をうけ、其の殉死の多きを以て相誇る風ありしかば、光圀これが弊風を矯正せむとて、まづ此の事ありきとなり。

光圀既に修史の事に力を盡し、彰考館を開きて天下の俊才を招致す。初め藤原肅の徒、儒を以て幕府に仕ふ。髮を削り頭を禿にして、法印の官を受け居たり。光圀この風習を非とし、儒臣をして皆髮を貯へしむ。是より後復儒員をおかず。その史臣及侍講の如き、皆士を以て之れを兼ねしむ。幕府嘗て弘文院學士林恕に命じ、本朝通鑑を修せしめたり。既に成

りて之を刊行せむとす。時に光圀江戸に參じ、尾張、紀伊の二侯と與に登營して、その書を閱するに、本邦建國の始祖を誤れり。光圀駭きて曰はく、この説は異邦附會の説にして、決して吾が正史になき所なり。熟按するに、昔者後醍醐天皇の時、一の妖僧ありて此の説を唱ふ。ゆゑに其の所載の書を燒かしめたり。方今文明の世、豈斯くの如き非説をして世に存せしむべけんや。宜しく命じて之を削るべしと。二侯も亦之に左袒す。依りて終にその刊行を止む。すべてその德行偉蹟及び著述等、すべて皇政維新の遠因となりし事は、世人の普く知る所なり。

延寶六年、古今の和文を蒐集して三十五卷とし、之を朝廷に上りしに、後西院天皇大に嘉賞し給ひ、則勅撰に准じて名を扶桑拾葉集と賜ひ、兵部卿幸仁親王之が序を作り給ひぬ。集中に載する所は、序、跋、日記、紀行より記事、叙事、さては艶詞、願文、憑吊、送別等に至るまで、古今各種の和文を網羅したり。又古今諸家の記録數百部の中より、類例を折衷し、舊記を考索し、以て朝廷の禮典儀式の中、四方拜より追灘に至るまで、恒例の諸式はいふも更なり。御踐祚より國忌、薨葬の臨時等を類聚して、五百十九卷となし、後西院上皇に上りしに、御感斜ならずしての、給はく、わはれ朝廷の盛なる世ならましかば、勅撰の書ならましを、いつしか公武地をかへて、斯るいみじき企を、東の奥にて思立ちし事よなと、をぞるに御

深備され給ひ、やがて題號を禮儀類典と賜ひ、宸奎をも賜はりし中に、傳文兼武絶代名士といふ語あり、この他有要の編述極めて多し、之を以て歴史辭章法制有職等の諸學、總稱して和學、又は國學と稱するもの、盛に起りて天下之に嚮ふに至れり。

光圀致仕して後、居を久慈郡西山に卜せらる。榛井を闢きて巖谷に依り、垣牆を設けず、茅屋衝門僅に風雨を蔽ひ、日々懷を詩酒に放ち、澹然として自樂む。而して粗食澣衣、意甚晏如たり。自西山隱士、又梅里先生と號す。其の意皆秦伯夷の風によらるとぞ。元祿十三年、夏痞を病み、十月いよ／＼篤を加へ、終に十二月六日西山に卒す。時に年七十三なり。瑞龍山梅里先生の碑後に葬り、葬祭禮に遊ひ、諡して義公といふ。

光圀資性英邁にして、仁恕よく衆を御す。卑賤疎遠の者といへども、腹心を推し、辭色を借す。故に人々其の用をなすを樂む。光圀天象地理、濟民行兵の要より、制度典故、擊劔銃砲醫藥算數、及び鳥獸草木の微に至るまで、悉之を綜ふ。故に著作上參證せし所のもの甚多し。又尊王の志深く、嘗て碑を攝津湊川に建て、親ら題して、嗚呼忠臣楠氏之墓と記し、その忠烈を顯彰したり。又毎歲元旦に際しては、晨に起きて西方に向ひ、禁闕を拜する事。老年に至るも廢せずといふ。其の訃音の幕府に達するに當り、天下に令して七日間音曲を停止せりとぞ。以て其の平生を知る事を得べし。天保三年五月詔して、從二位權大納言を贈ら

れ。明治二年十二月、又詔して、光圀が兵革僅に息み、文教未だ明ならざるに當りて、早く尊王を唱へ、名分を正し、心を修史に盡して、千古の廢典を起し、之を追賞せられ、特に從一位を贈られしは、蓋偶然にあらざるなり。その著に係る諸書を擧ぐれば左の如し。

- | | | | |
|----------|--------|--------|--------|
| 參校太平記 | 參校平治物語 | 參校保元物語 | 諸家系圖纂 |
| 大日本史 | 近代諸士略傳 | 花押叢 | 本朝姓氏類纂 |
| 神道集成 | 新撰近代帝系 | 烈祖成蹟 | 南朝事蹟 |
| 水府系纂 | 田丸應事蹟考 | 聯句纂 | 楠正成記事 |
| 萬葉目安 | 明君一斑抄 | 源流綜貫 | 歷代大臣考 |
| 記錄年代考 | 禮儀類典 | 日次記考證 | 諸記年月考 |
| 甲寅紀行 | 新撰年中行事 | 南行雜錄 | 有職備考 |
| 和名纂要 | 扶桑鐘銘集 | 書學指南 | 扶桑拾葉集 |
| 喪祭儀略 | 續扶桑拾葉集 | 成憲摘要 | 和漢梅松百題 |
| 和漢梅松百題探餘 | 常山咏草 | 釋萬葉集 | 西山聯句集 |
| 新撰詩集 | 新撰文集 | 和蘭譯語 | 救民妙藥集 |
| 桃源遺事 | 舜水文集 | 草露貫珠 | 朱氏談綺 |

鎌倉日記	書學纂要	慎終日録	四體拾要帖
西山遺事	西山奇方	西山隨筆	薙露遺響
慕祭諺解	詞堂時祭諺解	三國筆海全書	釋奠儀註諺解
西行雜錄	諸國土宜備考	山吹日記	常陸國志
新編謙倉志	西山聯句		

此等の書は、單に、光圀の著作とは云ひがたく、彰考館に於いて、史臣に撰ばしめられ、親ら之を總監せられしのみなるも多かれど、今しばらく世間一般の説に従ひ、こゝに混載するにまじ。

僧契沖 二二九〇—一九六

契沖名は沖、諱は空心、契沖はその號なり、俗姓は下川氏、父を元全といふ、攝津國尼ヶ崎の藩士にして、幼より奇才あり、五歳の時、母口づから百人一首を教へしに、十日にして皆よく暗記せしかば、父又之に授くるに、實語教を以てす、又忽に之を覺え、一字をも誤らずとなむ、茲に於て父母大に驚き喜べりといふ。

七歳の時重病にかゝり、夢中に感ずる所ありきとて、後終に僧となる、十一歳の時、近郷今里の妙法寺に入り、十三歳の時剃髮して高野に登り、數年の後阿闍梨といふ僧位を得て、攝津生玉の曼陀羅院に住す、然れども、市囂を厭ひて諸國を巡りぬ、後先師の遺命に依り、妙法寺に住せり、是れ一は老母を養はむが爲なりとも云ふ、母歿して後大阪の高津に庵を結び、退隱して圓珠庵と號し、永住の地と定められたり、
徳川光圀薨に下河邊長流をして、萬葉集の註釋を作らしめむとせしに、果さずして没せしかば、更に契沖に之を托せらる、依りて萬葉代匠記、及古今餘材抄、厚顔抄等の書を作りたり、光圀大に其の卓説を賞し、白金千兩絹三十四疋を贈りて、之が勞を謝せらる、契沖悉之を散じて貧民に分ち、或は寺院の修繕費にあて、一錢をも私に使用せざりきといふ、其の古今餘材抄の序に云へるやう、これより先西山公の仰に依りて、代匠記を作りし時、普く珍書奇籍を涉獵せしを以て、萬葉集註解以下大に發明せし所あり、これ家を作れば餘の材木あるが如し、かの萬葉の爲に考へたる事の餘れるを本として、此の集の抄を作りし者なるを以て、餘材抄と名づくるなりと、以て契沖の代匠記に於ける刻苦の一般を窺ふに足るべし、

契沖、又假名遣の甚亂れたりしを嘆き、古書に徴して遂に之を一定したり、これすなはち

世の所謂契冲假名遣なり。

元祿十四年正月廿五日、年六十二を以て寂す。徳川時代の國語學はこの人によりて世にあらはれしなり。故を以て明治昌代に至り、正四位の贈位ありて、其の學徳を顯彰せられたり。下河邊長流と殊に親しかりしかば、契冲の詠みて贈りし歌に、

われを知る人は君のみ君を知る人も數多はあらじとぞ思ふとあるにても知らるべし。又海邊の體を題にて、

藻鹽焼く難波の浦の入重がすみ一重は海士がしわざなりけりと詠めるは、殊に人口に膾炙する所なり。今その著書を擧ぐれば左の如し。

- 圓珠庵雜記 年中行事抄 雜々記 勢語臆斷
- 和字正濫抄 和字正濫要略 眞蹟俳諧歌 河社
- 源注拾遺 富士百首 三十六人歌仙贊歌 六々詠人贊
- 古事記抄 日本紀覽宴歌頭書 古語拾遺抄 萬葉集代匠記
- 萬葉集總釋 新撰管家萬葉集 古今集餘材抄 百人一首改觀鈔
- 和歌拾遺六帖 類字名所外集 類字名所補翼鈔 二四代鈔
- 後遺考 勝地吐懷篇 勝地吐懷篇異本 漫吟集

難勅撰

厚顔抄

北村季吟 二二七八一 一九二

季吟は、松永貞徳の門人にして、京都玉津島の社司なり。通稱は久助拾穂軒、又は盧庵といひ、湖月亭はその家の號なり。初は江州北濱に住し、醫を以て業となせしが、後に和學を松永貞徳に學び、遂に一家を成せりと云ふ。

寶永二年十二月二十一日、子湖春と共に幕府に召出され、俸祿二百俵下し置かれ、湖春へ二十人扶持づゝ、宛行はる。席の儀は、御醫師並に申付けられ、元祿七年三月十一日、三百俵御加増あり、同十二年十二月十八日、法印に叙せられ、歌學所に進み、再昌院法印と稱し、又は國學博士とも稱す。

寶永二年六月十五日、年八十八を以て歿す。著書甚多し。季吟は詞章も巧ならざるにあらねど、殊に俳諧に名あり、其の不朽の功は、古書を註釋して世に流布せしめたるにあり。當時の國學界は、誠に闇夜にして、誰一人この暗黒海を渡航する者なかりしが、如し。然る時に當り、西に長流契冲あり、東に季吟ありて、同功一體の働をなし、終に國學界にさまよふ

徒の爲に古書を註釋し、細かに言語文字を解説し、從來の傳説を抄録して、敢へて己の意見を加へず、本文に引用せる古言故事をば、和漢は勿論佛書にまで涉獵して、後學の徒に便したり、其の源氏物語湖月抄の如き、或は萩原廣道の評釋に一步を譲るといへども、全部完成しざるを以て、今に世の喝采を博せるなり、又枕草紙春曙抄、徒然草文段抄の如き、尙今日まで人の賞讃を得、普く世に流布する所なり、その外の註釋書、何れも文學界を益して、原書の光輝を發揚するに足る者多し、實に大功ありし人といふべし、今その著書を左に擧ぐ、

- 兩吟集 犬千句 堀川百首追考 師走月夜
- 誹諧合 山の井 續山の井 歌仙發句
- 埋木 新續犬筑波集 いなこ集 七十二物語
- 續連珠 諸國獨吟 室咲百韻 水かしわ
- 土佐日記抄 源氏物語湖月抄 大和物語抄 伊勢物語拾穗抄
- 女郎花物語 枕草紙春曙抄 枕草紙文段抄 徒然草吟和抄
- 徒然草文段抄 萬葉集拾穗抄 百人一首拾穗抄 八代集抄
- 和歌詞の抄 歌仙拾穗抄 岩つゝじ 二十會集

- 十會集 三物記 六々私抄 假名列女傳
- 次嶺經 疏儀莊記 増補題林抄 和漢朗詠集註
- 古今教端抄

戸田茂睡 二二九五 一六一九

茂睡、姓は渡邊、通稱は八兵衛、後に茂右衛門と改め、恭光といふ、號は寒露軒、その住める家の前に、山梨の木あるを以て、又梨本ともいふ、其の先は、徳川氏に仕へて、戦功ありしが、茂睡に至りて、本田忠國に仕へ、祿三百石を受領せり、その梨本といひけるは、
のがれかね世にふり果てし老の身は隠れ住むべき山梨の本とよみし時よりなり
とぞ、後故ありて浪人となり、淺草金龍山のはとりに移りぬ、其の時、
熊にあらず虎にもあらず、淺草におき伏すわれを誰かしるべきと詠めり、是れより
茂睡とぞいひたりける、こゝに於いて、梨本集を編し、和歌の制の乱れたるを嘆じ、世の詠歌の派を立て、又制詞ある者を定めて、琴柱に膠するを誹りたり、後に髮を削りて、
身にかへてをしみし家の名をだにも捨つれば捨つる世にこそありけれと詠みたり

り又何時の頃にやあらむ。

ちりの世と思ふ心も積りては身のかくれ家の山となるらむと詠みたりけり。隱家の茂睡とは、自も稱へ又人も稱へたりければ、其の名はいよゝ高く世に聞えけり。その隱家百首とて、相知れる人々詠める歌を集めたるあり。その初に出でたるは、住む庵を世の人の隱家といふを聞きて、

人知れぬ身に任すればおのづから求むともなき隱家にして、又もどめぬはしといへるよしは、源義豊といへる人のもとより、

隱家は山も求めず世をわたるためにやかけし前の棚橋と詠みておこせたる返事に、

わが庵は山も求めずたなはしの短くみつる世をわたる程といへり。寶永三年四月十四日年七十二にして歿す。淺草新寺町金龍寺に葬る。法號を源雲寺梨本茂睡といふ。其の妻の墓碑も、その側にありて、雲操院橋山といふ。

茂睡は、僧契冲荷田贈正四位よりも前において、既に二條冷泉の制詞を立て、和歌を緊束する事の不可を擧げて之を諱り、大に萬葉時代の古道を唱道したれば、伴蒿蹊は、此の人の歌道に古道を唱へし、近世の魁といふべしと稱へたり。その著書は左の如し。

鳥の跡

庄九郎物語

隱家百首

僻言しらべ

紫の一もと

和歌梨本集

おはづかし

若むらさき

ひとり言

貝原益軒 二二九〇一八三

益軒は、筑前の人にして、漢學を以て世に聞ゆ。通稱久兵衛、初は柔齋、後に篤信と改む。字は子誠、益軒と號す。初字を損軒といへり。世々黒田家に仕へ、醫を以て業となす。

益軒、幼時より醫書の教育を受け、略薬方に通ず。又好みて佛書を讀む。元端に四書の句讀を受け、初めて佛書の非を知り、之より重ねて是れを繕かさざりきといふ。明暦中京師に遊び、松永木下山崎等の門に入り、苦學する事三年、業大に進みたり。益軒、大に陸王の學を慕ふ。學部通辭を讀むに及びて、之を尙書論語に質し、深くその非を悟り、悉舊學を捨てたりといふ。後京師に帷を下して徒に教授す。その名四方に普くして、從學する者甚多し。太宰春臺尤人を許さず。然るに嘗て益軒の博學洽聞を稱して、海内無比なりといへり。とぞ其推重せられし事以て知るべきなり。名聲益高くして謙遜愈甚しく、平居深く自韜晦し

て謹慎を主としたりといふ。

益軒暇あれば名勝古跡を探り、其の足跡殆天下に普かりき。紀行の書は、皆是が結果なりといふ。其の他著す所數十種、記するに多く國辭を以てし、家範郷訓製造養生等に至りては終始愚到を主とし、田夫野女兒童走卒といへども、理會し易らしむ。今世に於ける普通國文の模範となすべきもの多し。その文例の一二を左に示さむ。

惜陰

幼より勉學ふに隙を惜むべし。古の聖人すら猶寸陰を惜み給ふ。況して今の凡人に於いてをや。徒に悠然して、空しく時日を費すべからず。光陰箭の如く、時節流るゝが如くなれば、年若きを待みて時を失ふべからず。

人の世にあるは、事わざ繁くして物學ふ隙少し。その少き隙を惜まず、怠りて空しく過ぎ、無益の事を成して時を費し、一生をはかなく終らむ事いと愚なりといふべし。今年の今日、再得がたき事を思ひて、かりにも徒に時をうつすべからず。これ一生の間心を用ふべき事なり。

古人も、常にして措かず、常に行ひて止まざるものには及びがたしといへり。たとへば、農の勉めて隙を惜みて、朝夕田を作り、商の勉めてあきなふものは、必、人にすぐれ

て、その家富みて衣食乏しからず。古人も、人生はつとむるにあり、勤むれば、則置しからずといへり。國家の政をくはしく勉むれば、その國家必治る。學問を精しく勉むれば、必諸人にすぐれてその才進む。萬事皆然り。隙を惜みて久しく勉むれば、成就せざるものなし。

それ人の實は、隙に過ぎたるはなし。何となれば、君子の學問を勉め、國家の政を行ひ、父母主君に仕へ、諸の藝を學ぶも、農の耕し、商の販ぎ、百工の器物を製作し、婦女の布帛を織縫ふも、皆隙を用ひてなし出す業なれば、人の最も惜むべきこと、隙に過ぎたるはなし。故にその惜むべきこと、金玉にも過ぎたり。

古語にも、聖人は尺璧を貴ばずして、寸陰を貴ぶといへり。隙を惜まざる人は、學ぶ事も勉むる事もなければ、必、才智も、徳行も、藝能もなきものなり。隙を惜まざれば、君子は身を修め、家を齊ふる事能はず。農工商は、貧窮飢寒を免るゝ事能はず。學者は粗學にして不才なり。萬の道々の工も、必拙し。これ隙は人生の寶にして、惜むべき故なり。中につき、年少の時は事少く隙多し。精力も記憶も強く、一度見聞さして覚えし事は、身を終る迄忘れず。この時勉學べば、その功多し。三十歳以後は、萬の務多く隙少く、精力やうゝ弱くなるに従ひて、その覺衰へぬれば、力を多く用ひても忘れ易く、勞す

れども功少し年若き人はこれをよく心得て後悔なからむ事を思ひ時日を惜みて勉むべし。

自然の樂

内の樂を本とし耳目を以つて外の樂を得る媒として其の欲になやまされず天地萬物の景氣のうるはしきを感じれば其の樂限りなし此の樂朝夕常に目の前にみち／＼てあまりあり是を樂める人は則山水月花のあるじとなりて人にこび求むるに及ばずだからもて買ふにあらざれば一錢を費さず心にまかせて檀にとりて用ふれども盡さず常にわが物としてれうすれども人いさかはず如何となれば山水風月の佳景はもと定れる主なければなりかく天地のうちきはまりなき樂をしりてたのしめる人は富貴の驕樂をうらやまず其の樂富貴にまさればなり此の樂を知らざる人は樂しむべき事目の前に常にみち／＼て多けれど其の樂をしらざれば樂しまず世俗の樂は其の樂未だ止まざるに早くわが身のくるしみとぞなるたとへば味よき物をむさぼりて恣に飲みくはばはじめは快しといへどやがて病おこりて身の苦みとなるが如し凡世俗の樂は心を迷はし身をそこなひ人をくるしましむ君子の樂はまよひなくして心をやしなふ外物を以つていはゞ月花を愛

で山水を見風を吟じ鳥をうらやみ類其の樂淡ければ終日樂しめども身にわざはひなく人のとがめ神のいさむるわざにあらず此の樂貧賤にしても得やすく後のわざはひなし富貴のひとは其のおどりおこたりにすさみて此の樂をしらず貧賤の人は此の二の失すくなし志だにあれば此の樂は得やすし。

益軒は漢學者を以つて世に立ちながら敢へて詩を嗜まずして和歌を好む常に曰はく和歌は吾が國俗の宜しき所詞意通曉し易し唐詩は本邦風土の宜しき所にあらず其の詞謨國俗の言語に異り以つて模倣し難しと正徳四年故國に於いて歿す年八十五なりき荒津金龍寺に葬れり。

そも益軒素より漢學者を以て世に立ち漢學者を以て世人も之を許す然るに今國學者間に列せしは唐詩を退けて和歌を好むが故なるかと言へば決して然のみにあらざるなり其の著書たる日本釋名を繕く時は益軒は正しく吾が徳川時代に於ける言語學者にて且其の先蹤者たるに相違なきなり釋名の凡例を見るに益軒の眼中既に轉語略語約語等の觀ありて其の例徴を舉げて之を説明したり其の他連濁重語字音等の所説もあり其の中に曰はく古言を解するに解きがたき言をば疑しきを缺きて解くべからずみだりに解けば誤る者なり又古語を解くには易く朴に解けば古人の言を作りし

意に叶ふ。六ヶ敷く穿ちて解けば、古人の意に叶はず。又深く遠きを忌むといへり。此の意に依りて釋名を訓せり。和語を解くは、謎を解くが如しといひて、白石に反駁せられさとも、その解方誠に面白く、實に吾が言語學者の先蹤とも言ふべきなり。益軒に辭世の歌あり曰はく。

來しかたは一夜ばかりの心地して八十路あまりの夢を見しかなど。又其墓碑の銘は能く益軒一世の性行を盡せりといふべし。

恭獻思道、極精造微、愛物爲務、事天不欺、箱藏瑣顯、謙遜愈輝、遺訓存策、後學久依、其の著書は左の如し。

點例	和字解	願生輯要	花譜
筑前續風工記	大和廻	諸州巡	四景圖
養生訓	菜譜	和名本草	大疑錄
大和本草	慎思錄	五常訓	大和俗訓
近思錄備考	和俗童子訓	小學備考	初學訓
和漢名數増補	文訓	武訓	家道訓
樂訓	君子訓	和歌紀聞	自娛集

音樂紀聞

三禮口訣

心畫軌範

貝原家訓

安藤爲章 二二三 二九一 八一

爲章は、契沖の門人にして、丹波國桑田郡の人あり。初は爲明後、爲章と改む。通稱は新助、年山と號す。朴翁の第二子にして、兄素軒と共に儒を學び、傍國學を修む。初め父の蔭を以て伏見宮に仕へたりしが、後に水戸侯の召に應じ、彰考館の寄人となり。大日本史、禮儀類典等の編輯に參與し、祿三百石を食む。義公難波の僧契沖に、萬葉集を註せしむる時、爲章命を受けて、屢難波に往來し、其の教を受け、終にその門人となりきといふ。爲章人となり、節操あり。故に家嗣子なしと雖も、他姓の人を養ふを欲せず。義公嘗て其の祿を増さむとす。爲章辭するに子なきを以てす。享保元年十月、歿して家終に斷絶す。時に年五十八なり。今その著書を左に擧ぐ。

年山紀聞	年山打聞	千年山集	紫女七論
手向草	榮花物語考	常陸帶	世繼物語私考
宇津保物語考			

谷重遠 二三三七八一七九

重遠は土佐の人にして、通稱を丹三郎といひ、秦山と號す。山崎闇齋の門人にして、儒學は更なり。神典國史律令格式等涉獵せざるはなく、古書を多く考訂して、世を益する甚多し。四國の文學は、この人より開け初めつといふも、敢て誣言にあらざるなり。享保三年六月三十日病を以て歿す。年五十六なり。今の谷千城子爵はその裔孫なりとぞ。今その著書を擧ぐれば凡左の如し。

中臣被鹽土傳

神代卷鹽土傳

土佐國式社抄

保建大記打聞

講法

元亨釋書抄

東游草

俗說贅辨

秦山集

秦山隨筆

新井白石 二三三七八一七二

白石は、久留里侯の臣にして、初の名は璣、後に濟美、又君美と改む。字は在中、白石は其の號なり。又紫陽錦屏山人、天爵堂、勿齋等の別號あり。其の先は上野國荒居に居たり。故に新井と稱す。非凡の人物にして、其の學問事業實に江戸時代の一時期を刻するに足る。

久留里侯の邸火ありし時、白石の父正濟は、從ひて侯の族内藤政親の柳原邸に寄居し。此處に於いて白石を生む。白石生れて、岐嶷聰敏の譽あり。三歳の時能く大字を書す。侯其の幼恵を愛し、召して膝下におく。一日盛岡侯來り、之を奇として曰はく、吾に嗣子なし。請ふ養ひて子とせむと。侯曰はく、これ侍臣の子なり。吾が子にあらすと。盛岡侯曰はく、必吾に賜へ。吾其の長を待ちて、當に祿千石を與へむと。侯之を固辭す。七歳の頃、父母と戯劇を見歸りて、後之を語るに、一も遺忘する所なし。十歳に及びて、常に侯側に給事して、文翰を書くに、殆老成の如し。然るに侯卒して、正濟致仕す。嗣子頼直無頼なり。延寶四年、臣某等廢立を謀りて之を正濟に問ふ。正濟甚之を不可となす。六年の春、事發覺して、某等皆逐はる。正濟もこの罪に連坐し、白石も禁錮せらる。白石側儻不羈、長して膽氣あり。慨然として嘆して曰はく、大丈夫生きて封侯を得ずんば、死して將に閻羅王となるべしと。既にして節を折り、銳意經史を考究せり。時に府下の富豪河村瑞軒といふ者、多く書籍を藏せしかば、白石之を借覽したりしに、瑞軒白石が他日有爲の士たらむ事を察し、學資を給し、又其の孫女に配し、納れて婿とせむ事を望みき。白石之を聞きて謂へらく、昔潭上に小蛇ありしが、其の腮に微傷したり。既にして大龍のこの邊に斃れたりしを見るに、大龍は則先の小蛇にして、其の痕今や尺餘のものと成れりといふ。今翁子に妻すに孫女を以つてせむとす。

るは、是小蛇を傷くるにひとしかるべし、異日子が家を起すにあたりて、其の瘼豈少小ならむやと、断然之を謝絶し、その貧窶に屈せず、益勵精苦學、能く經史百家の書に通じたり。天和二年古河侯に仕へ、十年にして志を得ず、仕を辭じて去る。時に貧甚しく、篋中唯青錢三百米三斗ありしのみ、然れども是あれば未だ遽に凍餒せずとて、意氣少しも撓まざりきといふ。其の木下順庵の門にありし時、該博精通の評高かりしかば、白石を薦めて、加賀侯に仕へしめむとせしに、適同門の加人岡島仲通といへる人、戚然として國に老母あるを告げ、仕を加賀に求めむ志切なりしかば、白石之を察し、順庵に告げて己に代らしむ。順庵嘆美して謂へらく、世衰、人心日々薄きに赴く、故に義を重んずる者絶えてなし。僅に子に於いて之を見るのみと、乃仲通を加藩に推したりとぞ。其の義俠概この類なり。

元祿六年、徳川家宣猶甲府藩邸に在り、白石を召して儒官とす。時に年三十七なり。待遇日に厚く、進講畢る毎に必坐を賜ひて、國家の遺事を説かしむ。十四年命じて新に列侯の譜を撰ばしむ。七月草を起して十月に脱す。其の譜三百三十七家、慶長五年に始りて、延寶八年に終る。凡八十餘年間の沿革備に之れを載す。乃命じて藩翰譜といふ。寶永五年家宣將軍の儲副となり、將に西城に入らむとす。白石、間部詮房に依りて謂て曰はく、凡天下の事、臣嘗て進講せり、今又何をか言はむ。請ふ忘るゝなくんば幸甚しと。後幾もなく召されて

侍講とある。事藩邸の時の如し。家宣將軍職を襲ぐに當り、祿五百石を給し、文學を以て殿中に給仕せしめ、事大小となく、皆白石に問はれたりとぞ。

正徳元年、朝鮮使節の來聘せし時、白石從五位下筑後守に叙せられ、應接の事を司りしに、この時、大に典禮儀制を改め、内外彼我の名分を正さむ事を建議し、多く採用せられたり。されども、時人白石の漫りに舊例を變改するを咎め、謗議喧然たりしかば、白石終に骸骨を乞ふに至れり。されども、家宣之を許さず、其の功を賞して更に祿五百石を給し、俸祿を倍されたり。白石の病に臥せる時、家宣市正直をして病を訪はしむ。正直歸り報じて曰はく、過慮牌を傷ひ、元氣甚衰ふ。四花の炙萬壯に及べども、未だ効あらずと。家宣正直を顧みて曰はく、白石世を憂ふる心實に深し。豈特に萬壯の炙の能く治する所ならむやと。三年家宣薨す。次の將軍家繼又幾もなくして薨す。是を以て白石も亦退けられき。乃門を鎖し、客を謝し、筆硯書冊の中に餘生を送り、享保十年五月十九日、歳六十九を以て卒す。淺草本願寺域内高龍山報恩寺に葬る。其の墓少しも宏壯ならず。正面唯僅に題して、新井源公の墓といひ、側面に筑後守從五位下諱君美年六十九、享保十年五月十九日卒の廿四字を刻するのみ。

白石學問洽博にして、識見卓絶なり。事實用を尊び、特に和漢古今の典禮故實に精通した

り著する所の書三百餘種ありといふ。世人白石を呼びて、或は政治家なりといひ、或は經濟家なりといひ、又は歴史家といひ、外交家といひ、漢學家といひ、文章家といふ。しかして國文學者といふ者更にある事なし。其の缺點とこそいふべけれ。そも言語上に係る學說には、貝原益軒に先んせられきといへども、其の深廣なるに於いては、大にその容量を増加し、益軒の説に反駁を試みたり。その著古史通を、加賀侯嘗て通讀せられ、嘆じて曰はく、本朝第一の良書なり。能く萬古の疑惑を決すと。白石知を家宣に得て、献替する所少からず。特にその著き者は、惡幣鑄造の議に關する事にして、若し白石にしてこれ無からしめば、勘定奉行萩原重秀私慾を逞うして、その災の及ぶ所、如何ばかりなりしか計り知るべからざらむ。又林信篤と、將軍家繼の喪服の事を論せしが如き、人口に繪炙せる所なり。又今日に其の恩澤を蒙る所の者は、吾が國人の普通假名文の體これなり。その折焚柴の記、藩翰譜等は、以てその模範となして可なり。今その文例の一二を左に擧ぐ。

父祖の家訓

父にておはせし人の、八十に餘りて終り給ひしまで、何事もわが幼きより、見參らせたりしにかはり給ふ所のおはしまさねば、天性うけ得給ふ所の、人に越えすぐれ給ひしによりしなるべけれ。又常の行によりて、その徳の衰へたまはぬが故とぞ覺

ゆる。わが物覺えしより、教へ給ひし事ども多かる中に常に思ひ出でらるゝ事は、男子は只事に堪ふる事を習ふべきなり。これを習ふべき事は、何事にもあれ、わが極めて堪へがたく思ふ事より堪へはじめぬれば、久しくしてはさのみ難き事と思ふ事は、あるべからざるなりと仰せられき。我八九歳の頃より常にこの事によりて、力を得し事も多けれ。元よりわが性急に生れ得しかば、怒の一つのみぞ堪へがたかりし。されど、それも幸に世の中の嶮岨の中を涉りて、既に年と共に力衰へたりしかば、今は昔の如くにはあらぬにや。わが後の人々、この事父祖の家訓なりと思ひて、萬の事にこの心得あらむこそ、願はしき事なれ。

板倉重宗獄訟を斷する事

此の人の職に在りし時の名譽、天下の稱する所、又わけて數ふべからず。其の要をひとつ一條を爰に註す。重宗職に任じて、後毎日決斷所に出づる所、西面の廊下にて遙に拜する事ありて、さて決斷所に至る。此所には茶磨一つをすゑおき、わが障子を引立て、其の内に坐し、手づから茶をひきながら訟をき、分つ。人皆此の事どもを不審しあへり。されども問ふ事も得ならず。

遙年經て後問ふ人のありしに、答へて曰はく、先決斷所に出づる時、西面の廊下にて

遙に拜するは愛宕の神を拜するなり。多くの神の中に、殊に愛宕は靈驗あらたなりと聞きし程に、所願ありてかくは拜しぬ。かの所願といふは、今日重宗訟をことばらんに、心に及ばん程の事あらじ。若し誤つて私の事あらんには、立所に命を召され下さるべしと、年頃深く頼み參らする上は、少しも私心あらんには、世にながらへさせ給ふなど、日毎に祈誓するにて候ふ。又訟を分つに明かならぬは、わが心の事にふれて動くが故なりと思ひなしぬ。よき人は自ら動せぬやうこそわらめ。重宗夫れまでの事はなりがたく、唯吾が心の動く静なるとを試みんには、茶をひきてのみぞ知る。心定りて静なる時は、手もそれに應じ、磨の巡る事平にして、さしられて落つる所の茶、いかにもこまかなり。茶のこまかに落つる時に至りて、我が心も動かさずと知り、其の後漸に訟を分つ。

又わかり障子を隔て、訟を聴く事は、凡人の顔額は、打見るより悪くさげなると、おはれがましきとあり。誠しきあり、奸しきあり。其の品多くしていくらといふ數を知らず。見候ふ所の誠しきと思ふ人の云ふ事は、誠と聞かれ、かたましきと見る人のなす事は、直くしても皆偽と見ゆ。おはれがましき人の訟は、まげられたる所あるよと思はれ、悪くさげなる人の争ふは、ひが事ならむと覺ゆ。これらの類は、我が目に見る

所に心に移されて、彼れ等言葉を出さぬうちに、早わが心のうちに、よこしまならむ、正しからむ、直ならむと思ひ定むる程に、訟の言葉を聞くに至りては、わが思ふ方にその事をさしなす事多し。訟のなるに及びては、哀れがましきに惡むべきあり。悪くさげなるに哀なるあり。誠しきにいっはり、奸しきに直き。此の類殊に多し。人の心の知りがたき、容貌を以つて定めん。事叶ふべからず。古の訟を聴くに、色を以つて聴く事あり。それは、おははるゝ處なき人の事なるべし。重宗が如きは、見る所に付きて、心おははるゝ事多し。又さなきだに、訟の庭に出でんは、おそろしかるべきに、まして生殺を司る人を見ては、まばゆくいふせくて、おのづからいふべき事をも得いはで、罪にも科にもあふ人あらんと思へば、所詮互に面を見も見られもせぬにはしかとと思ひて、かくは坐をへだつるにて候ふと語りきとなり。

今、白石の言語學上に於ける意見の梗概を言はむに、その著に係る東雅及東音譜を見るに、言語に種類ある事を慥めたり。則、古言と今言と雅言と俗言との如き差ある事、次に古言を解釋せむに、一定見を有し居る事、則、恣に己の意見を加へて、空前の言を以て、日本語の幾轉變を論じ、三韓語支那語が、吾が言語に影響を及したる事を嘆き、次に聲音の事を論じたり。その所論を見れば、白石の眼中、既に言に子音のある事、長母音のある事、半音

のある事、鼻聲に喉舌唇の三聲ある事、入聲ある事、清濁ある事、輕重ある事等を明にせり。然るに是等の音聲上に於いては、貝原益軒と大にその意見を反對にして、日本釋名に述べたる和語を解く、猶謎を説くが如しとの説、及、語源解釋の八要訣等を厳しく攻撃したり、次に音と詞との區別をなしたり、その言語上に卓見を有するかくの如し、然れども専門家ならざる人の研究なれば、論じ足らぬ隅々、おかぬふし、多かれども、是もとより漢學者の懋半に、和學者の未だ手を付けざる事に魁したれば、強ち是非すべき事もあらざるべし、其の他、采覽異言と西洋紀聞とは、外來語研究上の資料となり、古史通は、古來の人名考と地名考とに關係少からず、東雅は、日本語の歴史、及、語源に關する研究の結果にて、東音譜は、綴字法、同文通考は、假名の沿革等に就きて、自の考案を書き集めたるなり。この他吾が國文學上に、裨益を與へられたる書を擧ぐれば左の如し。

- | | | | |
|------|-------|-----|------|
| 藩翰譜 | 折焚柴の記 | 漢音考 | 韓語考 |
| 梵語考 | 漢字和字考 | 人名考 | 決獄考 |
| 文字考 | 軍器考 | 蝦夷志 | 田制考 |
| 貨幣考 | 冠服考 | 舞樂考 | 職官考 |
| 西洋圖説 | 南島志 | 改貨議 | 律尺考驗 |

- | | | | |
|------|-----|------|----|
| 三器攷略 | 古史通 | 改貨後議 | 紺珠 |
| 實學明驗 | 紳書 | 讀史餘論 | |

跡部良顯 二二二 三三九 一六八

良顯は、幕府の麾下にして、通稱宮内光海と號し、又重舒齋ともいふ、良顯幼時の時、父親ら大學の一本を手寫して、之を與へて曰はく、この書を熟讀するにあらざれば、人となる事能はずと、依りて常に之を懐にし、造次にもおかせして誦讀しけり、然るにその母もまた讀書を能くして、家庭の教養怠らざりしかば、早くより諸學に通じたりき。

良顯曾て皇統の正閏を論じて曰はく、後醍醐帝南遷以來、よろしく南を以て正統となすべし、後龜山帝の禪讓に及んで、皇統始めて一に歸す、然るに、舊史北朝を以て正統となし、或は南北并ひ稱する者は、皆春秋の大義を犯す、以て訓ふべからず、獨源親房の神皇正統記を正しとす、其の卓見稱すべし、然れども、該書は、專南朝の衰微を慷慨して、足利氏の凶暴を惡むに過ぎず、上世帝王の正閏に於けるは、則論著する所なし、是いまだ盡さざる所なりと、依りて南朝編年録を著せり、享保十四年正月二十七日歿す、時に年七十一なり、青

山梅窓寺に葬る。

良顯人となり、方正謹直なり。曾て一門生良顯に告げて曰ふ、某生は好んで劇場に遊ぶと。良顯曰はく、恐くは人之を誣ふるならむと。曰はく、然らず。然らば何を以て之を證するか。と答へて曰はく、小生自之を劇場に觀たりと。良顯愕然色を作りて曰はく、是汝自先づ犯すなり。何を以て人を責めんやと。即日之を絶せりとぞ。以て其の言行の一般を知るに足る。今その著書を左に擧ぐ。

- 古語説 日本書紀抄 垂加翁神説 天文曆道鈔略
- 國號傳 南朝編年録 古今三箇大事 十種瑞寶秘傳書
- 夷大黒説 土金藝古並五行辨書 安座傳 心御柱圖口授
- 庚申侍傳 正神邪神傳 龍雷傳 古語拾遺示蒙節解頭書
- 混沌傳考書 三種神器集説 三種神器秘傳抄 中臣祓清淨草
- 三種神器傳來考 玉銚道草 心御柱和訓傳 日少宮傳塵死説
- 土金三種大祓 土金秘訣傳 神代混沌草 神學發明
- 神武紀葵草 神學承傳記 神道喪祭家禮 神代講談書
- 七夕草 御鎮座次第記重波草 夢寢説 御鎮座傳記日輪草

- 排佛説 自從抄口訣 齒黒辨 正直二字之傳
- 猿樂傳 日本養子説 和字傳來考 誕生蓑目傳
- 榛名山雜記 光海翁筆録 伊香保紀行 光海翁和文集

天野信景 二二三九二一六四

信景は、大和の人にして、尾張藩に仕ふ。幼名は權三郎、長じて宮内といひ、又治部といふ。字子順、白華翁と號し、後薙髮して信阿彌と稱す。信景幼にして穎悟、學を好み、長じて益奇才あり。大に藩侯に用ひらる。嘗て藩命を奉じ、諸士と共に國史を撰びたり。信景博聞強記、凡目にふるゝ所のもの誦せざるはなし。毎に一事を得ば、其の源泉を究め、博引旁證、其の蘊奥を盡すといふ。享保八年、病を以て職を辭じ、同十五年薙髮し、同十八年九月八日歿す。年七十三なりき。

信景、學和漢を兼ねたりと雖も、殊に國典に精しく、傍梵典にも通せり。資性温厚篤實にし、奢侈を喜ばず、其の致仕するに當り、敝衣粗食自以て快となし、藁屐敝履以て人に耻づる事なく、日として出で、遊ばざるはなし。知らざる者は之を見て野人と云へり。とぞ。

の著の鹽尻といふ書は、敗紙を以て稿を起し、手づから之れを淨書せず、侍者に纂錄せしむ。偶人の借りて之れを見む事を請へば、悉舉げて之を與へ、敢て秘惜する所なし。元和以來、文學を以て世に名を舉げし士少からず、又その著の世に行はれたる者も多しと云へども、その著一も此の鹽尻に及ぶものなしといふ。以てその傑作なる事を證すべし。然れども惜むべきは、その書全部傳らず、今の世に行はるゝ者は、漸く其の十分の一なりとぞ。今その著書を左に擧ぐ。

鹽尻	壬午初筆	壬午二筆	秉燭獨斷
寶永始毫	孤燈揭盡	梅雨窓筆	見聞雜記
幅湊故事	問津漫書	問津閑筆	時雨閑筆
備忘雜書	蠶芥隨筆	蠶芥隨筆附錄	考槃靜記
剪燈漫志	秋のはと	後の今霄	吉野紀行
袖の海	青蚨年月明鑑抄	尾張古城志	讀書範
本朝學令和解	本朝學令釋奠和解	孔子諡封辨	朱子諡封辨
儒者名辨改說	學庸開題	著卜圖解邪易辨	朱易衍義補
古今易斷	三年無改辨	辨惠公請郊論	鎮觀要心異解

滿州字式	地觀記東	蓬門要略	善隣記事
義解念佛抄	一枚起請俗訓	尙島記事	犬追物檢見考
避子說	芽花隨筆	步射秘解考	秋雨閑筆
白華雜記	破窓漫筆	机上一覽	立之初筆
聞考集記	戊寅冬記	運壁隨筆	凝寂堂筆記
庚辰隨筆	聞人尋書	我聞如是	事言籍記
落葉回掃	神器授受傳	神事發揮	神宮評
神宮問集記	神代卷聞書	神代紀聞	神祇本源拔萃
伊勢參宮里程抄	伊勢大神宮參詣記	總社參詣記	熱田神社問答
牛頭天王辨	熱田問答雜錄	熱田寬平記頭注	卜氏辨
大日靈尊訓意秘訣	祭記雜纂	淫祀辨	倭姬世記考異
尾張五社略記	尾張五社詞考	尾張十五寺略記	姓氏考
神皇正統記校考	南朝紹運圖	王代一覽補遺	尾張人物誌
參校尾張本國帳	續神皇正統記辨	新撰姓氏錄校考	藤原系圖傳
貞享御即位聞書	師檀名辨	職原抄聞書	盛衰記拔抄

大和稱呼秘解 徒然草淺見 造言辨講習次第 海道俚語
 徳川世記 御系圖考案 吳竹集 武業記 弓矢傳同補遺 鹽原雜記
 諸士家紋舊傳 家紋記 源氏桐壺大概 六千鳥
 古今集序註 浦の名殘 百人一首聞書 わまわかり
 小島の慰校考 藤川の記校考

壺井義知 二二三九一六二

義和は河内の人にして、通稱安左衛門、字は子安鶴翁鶴壽、又温故軒と號す。有職故實の學に精しく、且古典に通じ、其の名一世に振ふ。享保二十年十月廿四日歿す。年七十九。城東清光院に葬る。其の著書は左の如し。

延喜式裝束抄 裝束圖式 鶴翁裝束抄 裝束要領抄
 裝束要領抄附錄 四位五位裝束略抄 鄙鶴問答 裝束文飾推談
 官職知要 源氏男女裝束抄 衣紋愚童訓 枕草紙裝束抄
 直垂考 職原抄通考 職原抄辨疑私考 職原抄解

廟陵考 官職浮説或問 官職浮説知要 當時諸家官位昇進次第
 位署式私考 本朝古今刀劔錄 雄辨 昔傳提要
 昔傳拾要 紫式部日記傍註 古語拾遺抄 故實秘要抄
 令義解愚注

羽倉東麻呂 二二三九一六一

東麻呂本姓は荷田宿禰氏は羽倉と云ひ、通稱を齋といへり。荷田或は蚊田に作る。京都稻荷山の社預にして、夙に國學の替廢を歎じ、眼を國史律令典故等に屬し、心を上代の歌文に潜め、復古を以て自ら任ずと云ふ。神代卷萬葉集に於いては、大に發明する所ありて、終に其の學を以て一家を成す。國史律令格式等の書に精しく、世に羽倉學と稱せられて、一時大に行はる。されば後世國學の隆盛に至りしは、實に預りて力ありと云ふべし。
 東麻呂幼より學を好み、其の才の穎敏なりし事は、延寶五年歲僅に九才の時、稻荷山に小鳥狩して、

稻荷山今日は小鳥の音を絶えて音するものは谷川の水と詠まれたり。その非凡の

器たる推して知るべきなり。

享保の頃、八代將軍吉宗公、世に古書の埋れたるを嘆かしく思され、玉瓦を共に藏して賣とせしむるは、却りて後世を迷はすべき業なりとて、廣く國々に求めさせ給ひ、東麻呂の名を聞き、江戸に召寄せ給ふ。東麻呂召に應じて東下し、其信偽を匡しけり。その論辨の正確なるを深く感じ給ひ、長く江戸に居を定め、親しく仕へまつるべきよし仰あり。然れども老を以て之れを辭し、義子在滿を以て之に代らしめらる。吉宗公其の老を勞り、祿なきを給して優遇し給ひけり。後國學校を伏見に建てむと請ひ、既に其良地を卜するに及びぬ。されど病にかゝり果さずして歿せり。時に元文元年七月二日、年六十八なりき。

東麻呂中世以後の歌道、專、淫靡の風を成すを慨み、之を矯正せむと欲し、遂に生涯戀歌を詠まれざりきといふ。其の家集を見るに、當坐に戀の題を採りては、其の物を雜になして詠まれたり。たとへば虎に寄する戀を雜に詠めるは、

仇ひくふおもひ巴提使にたぐへては虎も拙きものどこを見れとなり。

初め諸國を回遊して江戸にあり。偶赤穂の遺臣等、密に計りて吉良氏をうち、以て亡君の讎を報せんと欲したり。然るに東麻呂大高源吾と風流の上に於て相善し。源吾告ぐるに此事を以てす。春麻呂幸に吉良氏の邸中に出入し、邸内大小となく其の事態を知る。こゝ

を以て之が圖を作りて與ふ。故に大に其の便を得たりといふ。其の大義名分によりて、事を成すものを助くるかくの如し。以て平生の心緒を推想するに足る。その詠吟中、世に名高き歌は、春葉集に書といふ題にて、

踏わけよ倭にはあらぬから鳥の跡を見るのみ人の道かは

東麻呂斯學の復興に關し、その功少からざりしかば、明治昭代の鏡にうつりて、加茂真淵、本居宣長、平田篤胤等と共に、正四位の贈位宣下に預られけり。今國學校創造の啓文を左に擧ぐ。

謹請蒙 鴻慈創造國學校啓

誠惶誠恐頓首頓首謹聞伏惟 神君勃興山東霸功一成、平章天下、艸上之風、孰越君子之志、維新之化、始建弘文館、庶矣、且富又何之加、明君代々作、文物愈昭、光烈相繼、武事益備、濟々焉、蔚々焉、鎌座氏之好儉、庸何及于斯乎、郁々乎、斌々乎、室町氏之尙文、豈同日之談哉、應此昇平之化、天生寬仁之 君、以其天縱之資、國見不嚴之教、野無遺賢、倣陶唐之諫鼓、朝多直臣、擬有周之官箴、上尊

天皇、再不滿之政、下懷諸侯、而來包茅之貢、道齊有暇、則傾心於古學、教化不周、則深治於先王、購奇書於千金、天下聞達之士、嚮風探遺、篇於石室、四海異能之客、結賦、臣嘗遊都下之

日幸蒙射策之擢，忝不願謫劣之義，偶有校書之命，浴于忘布衣之恩，誰為為之，誰令聽之，子遷氏之言，深有取焉，雖有智慧，不如待時，鄒孟子之意，真有以也，當時既有意於賴，幕府之威靈，起此大義，借大樹之庇蔭，達臣素願，而不敢者，私心竊以，跬步不止，跋蹠千里，犬馬之年，未滿六十，今日之美，安知不為異日之醜，後進之知，豈識不如先輩之能，愚而自用，難免蟻斧向車之謗，賤而自尊，似忘燕石街人之羞，有志而不遂，千里遲々歸，豈圖卒有探薪之憂，麒麟徒伏槽檻之間，何意為造化小兒苦，鴻鵠長繫樊籠之中，口不能言，同陳仲子之居於陵，脚不能行，似卞和氏之在楚山，為世廢人，噬臍何及，遇時窮厄，嘔眉獨泣，天之將喪斯文也，命也，天之未喪斯文也，時也，時之不可失，不敢不告也，今也，洙泗之學，隨處而起，黜墨之教，逐日而盛，家々講仁義，步卒所養，解言詩，戶々事誦經，閭童壺女，識談空，民業一改，我道漸衰，紀土州管嘆焉，田園競捨，資產傾盡，善相公深痛矣，臣竊以是亦足以見太平日久之象，唯有為可痛哭長太息者，在我神皇之教，陵夷一年，甚於一年。

國家之學，廢墜存十一於千百，格律之書，氓滅，復古之學，誰云問，詠誦之道，敗闕，大雅之風，何能奮，今之談神道者，是皆陰陽五行家之說，世之講詠誦者，大率圓鈍四教儀之解，非唐宋諸儒之糟粕，則胎金兩部之餘瀝，非鑿空鑽穴之妄說，則無證不稽之私言，曰秘，曰訣，古賢

之真傳，何有，或濫，或與，今人之偽造，是多，臣自少，無寢，無食，以排擊異端，為念，以學以思，不與復古道，無止，方今設非振臂張膽，辨白是非，則後必至塗耳，寒心，混同邪正，欲退則文已漂已晦，欲進則老且病，且憊，猶豫無所決，狼狽失所為，伏此諸望，或京師，伏陽之中，或東山西郊之間，幸賜一頃之閑地，斯開

皇國之學校，然則臣自少所蓄，秘籍與牒不少，至老所訂，古記實錄亦多，盡皆藏于，此備他日之考索，僻邑之士，為絕難及者，或有寒鄉之客，有志而未果者，問多借之讀之，才通一書，百王之澆，陋此知，洞覽千古，萬民塗炭，可極，幸有命世之才，則盡敬王之道，不委于地，若出琢玉之器，則柿本氏之教，再奮於邦，六國史明，則豈趨

官家化，民之小補乎，三代格起，則抑亦國祚悠久之大益哉，萬葉集者，國風純粹，學焉，則無面牆之饒，古今集者，詠誦精選，不知則有無言之賊，夫

本邦設施學校，權與于近江朝廷，主張文道，濫觴於

嵯峨天皇，菅江家有分彰院，源藤橘和繼起，太宰府有學業院，足利金澤延及，然所藏三史九經，陳俎豆於雅宮，其所講四道六藝，薦蘋蕡於孔廟，悲哉先儒之無識，無一及

皇國之學、痛矣後學之鹵莽、誰能歎古道之隳是故異教如彼盛矣、街談巷議無所不至、吾道如此衰矣、邪說暴行乘虛入、憐臣愚衷、創業於國學、鑑世倒行、垂統於萬世、首創難成功、非經國大業邪、繼續易用力、真不朽盛事哉、臣之至愚何之知、所不敢自讓者語釋也、國字之多紕繆後世猶有知之者、典籍猶存、古語之少解釋、振古不聞通之者、文獻不足、國學之不講、實六百年矣、言語之有釋、僅三四人耳、其爲巨擘、新奇是競、極無超乘、骨髓何望、古語不通、則古義不明焉、古義不明、則古學不復焉、先王之風拂迹、前賢之意近荒、一由不講語學、是所以臣終身精力、用盡古語也、伏以斯文之興之與廢、固在此舉之取之與捨、願閣下留意幸察、臣東麻呂誠惶誠恐頓首頓首謹言。

わ、大人が一世の熱念、この一編において赫然たり、今又著書を左に擧ぐ。

- 神代卷講義 小汀抄 古今序古注考 伊勢物語童子問
- 伊勢物語修刪 創學校啓文 齊明紀童謠考 春葉集
- 偽類聚三代格考 出雲風土記考 萬葉集童蒙抄

有賀長伯 二三九七一六〇

長伯は、平間重雅の門人にして、有名の歌人なり。京都の人、以敬齋と號す。初、重雅の門に入りて苦學する事數年、業大に進みて後師風によらず、みづから一家の言を立て、專各所を探りて古歌に徴し、歌枕秋の寢覺を著し、又和歌八重垣、和歌籠のちり等を著し、大に歌學者の爲に便益を成せり。從學する者も甚多し。その盛なりし事は、川井立秋の哭詞に見えたり。元文二年六月二日、享年七十七にして歿す。浪華高津東正法寺に葬る。その著書を擧ぐれば左の如し。

- 和歌八重垣 和歌分類 和歌籠の塵 和歌籠の塵二葉草
- 歌枕秋の寢覺 歌林雜木集 源氏掌故 和學和歌式
- 世々のしをり 演のまさと 秋の寢覺増補 世々のしをり追加
- 秋草愚草 長伯集

多田義俊 二四一〇八一四七

義俊は、大阪の人にして、通稱は兵部、初は進藏といふ。字は政仲、南嶺、又春塘、或は秋齋と號す。始め京師に遊び、壺井義知に従ひて、有職故實を修め、頻に古典を研究し、博覽多識を以

て世に賞用せらる。後故ありて鶴翁の門を放たれ、甲州流の軍學を以て徒に教授せり。寛延三年九月十二日、年五十三にして歿す。洛東本妙寺に葬る。義俊、強識を以て人に稱せらるといへども、其の才に任せて人を欺く事あり、これその缺點にして、鶴翁に破門せられし所以なり。時に八文字屋自笑と、江島其磧と隙あり、自笑依りて代作を其磧に依頼する事能はず、之を義俊に依頼す。以て義俊の才筆其磧に劣らざる事を知るべし、その著書は左の如し。

- 遊和草 遊和草續 直字辨 伊呂波聲母傳
- 孫吳異見 武門故實百箇條 宮川日記 多田滿仲五代記
- 羽書稿 尊草紙 凡右雜記 繪本福壽草
- 半宵談 古源愚抄 春塘隨筆 秋齋問語
- 南嶺子 南嶺遺稿 鳥逐歌註 神史考
- 本語口傳 故實纂要 和歌物語 職原抄辨講
- 職原抄問書一名辨講 以呂波訓義 獸肉論 御昇壇記
- 葬祭記 舊事記偽書考 古語拾遺本義 神事類事抄
- 古事記本義 日本書紀義解 日本書紀或問私考 延喜式祝詞私説

- 三紀辨 創楔辨 神明憑談 中臣祓本義
- 中臣祓辨義 神拜恐惶抄 神璽辨 神代卷秘要抄
- 神代卷講述筆記

羽倉在滿 二二四三六六一四六

在滿は、東麻呂の養嗣子にして、實は甥なり。字は持之、東之進と稱し、仁良齋と號す。京都の人にして、大に古學を唱へ、特に有職の學に精し。享保の頃、子蒼生子を伴ひて江戸に來り、頻に家學を唱ふ。こゝにおいてかその名大に揚りたり。初父東麻呂、幕府より召されつれども、思ふ所ありて之を辭し、在滿を推して仕へしむ。在滿始は、小十人の列に加へられけるが、かねて殊に仰事ありて、皇朝の學の事をのみ專司らしむ。かくて櫻町天皇位に即かせらるゝに及びて、幕府の思ひけらく、大嘗會は、永享の頃より、世の亂打續きて、久しく絶えにけるを、貞享の頃、幕府にて再起されけるは、いとかしこき例なり。ざるを先帝の御時、その事さらに行はせ給はざりしは、安からぬ業なりとて、元文三年の冬、又幕府よりこれを起し、まつらむとて、則在滿に仰下されて、かけまくも

かしてき大庭に参りて、その事のありさまくはしく拜し奉り、終始を明晰にして奉れどぞ仰られける。依りて在満都にまかり上りけるに、折しも重き服着ぬべき事の出来ぬれば、穢なる身の大内に入るべうもあらざりき。されど尙東にての仰事を、其の司々の人々に傳へて委しく之を問ひ、細かに聞きえて、やがて大嘗會具釋九卷圖二枚を作りて、歸來り奉りき。

その事世に珍かなれば、貴き賤き人々、在満にその事問ひ聞く事多かりき。茲に在満思へらく、かく愛でたき御代の例なれば、遠き國人にも傳へてむ。又女童などにも事のよしわきまへしらせんとて、更に便蒙といふなる書二卷を作りて板に彫りたり。此書世に廣りて人々もてはやしけるを、雲の上にも聞召し及ばせ給ひて、大内にてとり行はせ給ひたる事を、みだりに板に彫りて、公にしけるは、輕々しきわざなりとありければ、を幕府にてもかしてき事に思ひとりて、在満をこうじ給ひて、謹みて家に居るべきよしの仰事あり。されど深く罪なはせ給ふべき事にもあらねば、日數經て事なく宥されぬ。その後、貞觀儀式十卷を校正して奉りけるに、其の書の中にとりたる鼓吹司の事ども、猶委しく説きしるせとの仰言ありて、鼓吹司調練義解一卷をしるして奉りければ、いどめでさせ給ひて、種々の物賜りぬ。又古の衣服の色目を、延喜式によりて染め試み給はむとて、吹上の御

園にて其の事催され給ひし時、其事にあつかれる人、これかれありしも、在満も共に仰を蒙りければ、裝束色袋二卷を作りて、世々の染色の事ども考證したり。又今に傳りたる令に、失せたる卷三篇ありしが、そのうち、關市の一篇は、在満はじめてもどゆいで、奉れりどぞ。

その頃、田安中納言は、右衛門督にておはしけるが、和漢の書を好ませられ、殊に皇國の故事どもを委しく調べさせ、在満を常にめしまつはれけり。これより田安家になむ仕ふまつりける。令三辨度制考などは、田安家の仰によりて記せるなりけり。かくて在満病ありて、致仕せむと請へれども、更に許されざりしを、強ひて請ひ申し、かば、さらば汝に代はるべき人撰り出で仕奉せられよとなり。則加茂眞淵をすゝめ参らせて、其の身はやがて退きぬ。これより徒を集めて國典を教授す。門下に遊學せる者甚多かりき。寛延四年八月四日、齡四十六にて歿せられぬ。墓は淺草金龍寺の中にあり。

在満幼なりし時、伊東長胤に就きて唐文を學びけるに、その才世にすぐれたりとて、長胤深く愛でたりければ、早くその名人に知られたり。其の強記なる事は、一度目耳に觸れたる事は、數年の後まで忘るゝ事なかりきとぞ。家貧しくして書多くあらざりければ、其のあるせるものの引書など、大方は空に思浮べをりきとなり。又常の心おきては、己の一旦

思ひ込みし事は、かりそめにもわれをまけて人に従ふ事なかりけり。さればやむ事なき
あたりよりの事をも、常に辭し申し背き參らする事ども多かりしかば、親しかりし人ど
もはいと危ふき事に思ひけるを、自は事どもせず、長閑に思ひけちてぞありける。其の學
すべていと深廣なりしが中に、律令の學なむ殊に秀れたりける。今の世に律令の事考へ
いふ人、すべて在滿の説に基き依らぬはなし。今其の著書を擧ぐれば左の如し。

- 家記所繫考 大昔會具釋 大昔會便蒙 百人一首解
- 令三辨 本朝度制略考 羽倉考 裝束彙考
- 家集 長月物語 家乘 白猿物語
- 國家八論 古今集左注論

僧文雄 二二三六〇一三四

文雄は、京都了蓮寺の住職にして、俗姓は中西丹刃の人なり。名は無相、字は豁然、蓮社と號
す。其の寺錦街に在るを以て、自尙綱堂と稱す。幼にして儒學を好む。太宰春臺と水魚の交
をなし、論議談笑胸廓を開きて、日の盡くるをも知らざりさといふ。常に音韻の學に心を

潜め、攷究倦まざりしが、終に一家の見を立て、音韻學者を以て稱せらる。その著磨光韻鏡
の如きは、世間に賞揚せらる。晚年大阪の傳光寺に錫を留め、寶曆十三年九月二十三日を
以て寂す。時に年六十四なり。其の著書を左に擧ぐ。

- 磨光韻鏡 磨光韻鏡餘論 九弄辨 字彙莊嶽音
- 三音正偽 韻切代技編 古今韻枯 經史莊嶽音
- 韻鏡律正 古今括韻開合圖 廣韻字府

岡部眞淵 二二三五七二二八

眞淵は、荷田贈正四位の門人にして、姓は加茂の縣主岡部はその氏なり。通稱は衛士、初め
三四郎といふ。遠湯濱松の庄岡部郷伊場村の人なり。常に庭を田居の様を作り、加茂氏の
尸にも由わればとて、自家號に負せて縣居とはいふなりとぞ。父は伊場村の農與三郎定
信といふ。其の祖先は、神魂命の孫、鵬武津奴見命の末裔に出で、山城國愛宕郡賀茂縣主神
主成助の系に係る。眞淵は、元祿十年伊場村に生れ、後濱松の旅籠屋に養子となりたり。初
め祖徠の門に遊びて漢籍を學び、詩文をも能せられたり。少壯の時、朝夕讀書にのみ耽ら

れたりしより、養父の心に叶はざりきとぞ。然るに、其の妻或時曰ひけらく、つらく御身の才を見奉るに、かゝる家主となりて、生涯くちはて給ふべしとも覺え侍らず。幸に一人の兒あれば、家はこれに繼がせ給ひ、更に心を家政に残さず、天下に名を擧げ給はむ事をこそと勸めけり。眞淵その言に依りて、享保十八年歳三十七にして、京都に昇り、荷田大人の門に入り、國學を研究し、終に出藍の譽を得、芳名を宇内に傳へたり。

抑古學は、難波の契沖阿闍梨、又京都の荷田大人等の爲に魁せられたり。而して此の翁の出でられしより、專眞に盛にぞなりにける。又詞の働もこの翁こそ説初められにけれ。江戸の醫師小野古道が、始めて名簿を參らせつるより、次々翁の業を受けし徒三百に餘れり。田安中納言宗武、その名を聞きて、招聘し、寵遇特に厚かりき。嘗て田安殿の四十の賀宴に侍りて、咏奉られける歌に、

大君の守となれる君なれば君が齡は神ぞ守らむ

殿にもこをいと愛で給ひ、夜明けて入らせ給ふ時、御衣をぬがせ給ひて、眞淵にとて賜はせけるが、いと多かる人々の中に、一人かゝりしを殊に忝けなみ奉りて、

葵てふ綾の御衣をも、氏人のかづかひ者と神や知りけむと咏まれきとぞ。其の後致仕して、益力を研磨、藝勳に用ひらる。和歌は萬葉集に倣ひ、文章は古體をよくせらる。古學

の普く世に行はるゝに至ると、詠歌の古風に復せしとは、一に眞淵の力によれり。故を以て海内の國風家、その下風に栖息たざる者少し。人皆稱して曰はく、眞淵翁の前に眞淵翁なく、眞淵翁の後に眞淵翁なしと。又翁嘗て曰はく、契沖は聖關せしも、樹藝を終へずして死す。吾師の大人は、樹藝せられしも、いまだ菊獲を終へずして逝くと。菊獲の功蓋みづからに任ずる所なるを意味せらる。其の規模の大なるを察するに足る。

その初め漢學を學ばれたりしを以て、大に彼學にも委しかりしかば、服部南郭と唐詩を論じて曰はく、唐詩の風韻は、六朝に如かず。吾汾上驚秋の詩においてこれを知る。其の詩の北風吹、白雲万里、渡河汾の起承の二句は、旅情を叙し得て妙なり。心緒逢搖落、秋聲不可聞の轉結に至りては、只上句を注するのみ。氣韻の索然たるを覺えすと。南郭深くこれを然りとす。又書法超風にして、上代の墨の如し。明和元年秋濱町に移り住し、六年十月病を以て歿せらる。年七十三なり。品川の東海寺少林院の後山の上に葬り、玄珠院眞淵義龍居士と謚號す。明治の御世鐵道の線路、墓所に接近せるを以て有志等之を憂ひ、同所の紅葉山に改葬せりと云ふ。羽倉本居平田の三大人と共に、明治昭代の鏡に照され、正四位の贈位ありし事は、いとかしこき事になむ。今その墓碑の銘を左にあぐ。

縣居于志、名眞淵氏者、加茂縣主、遠津祖者、山城國愛宕郡賀茂大神乃美也。都古賀茂成

助縣主也、成功乃裔片岡乃祝奈里之師重之女内爾仕奉而筑前局登云之爾、遠江國敷智郡濱松郷岡部乎賜利之乎、彼岡部爾齋比末都禮留新宮之神戶登永之永新宮乎、伊都伎奉留信伎與之、文永之十末里一年、彼命婦乃弟師朝爾、美許登能里有之與理、則其新宮乃祝登成而、代々乎經而政定登云之波、引馬乃原乃御軍爾從奉、伊左表志伎業有氏、御佩乃太刀乎賜利奴、于志者、其政定與利、五繼乃孫定信登云留我、眞子爾豆曾於波之計流、元祿乃十年登云爾、岡部爾豆阿禮出給比豆、享保乃十末里八年、京爾上利豆荷田宿禰東磨翁乃教乎受給比、寛保乃三年此江戸乃大城能下爾參來給比之乎、延享之三年、田安乃殿爾米左解良禮豆、古之道能博士登之豆、殊爾免泥左勢給閉里伎、于志齡老氏、寶曆乃十年仕乎志里叙伎豆、明和六年病給比豆、十月晦日乃日爾奈母、七十末利三乃齡爾豆、身能給比氣留、豫能多末比置都留麻々爾、江戸乃南在原郡品川乃東海寺奈留少林院乃、山上爾葬奴、抑皇國乃古學乃道、彌開氣之波、荷田翁、難波之契冲阿開梨我、以當豆伎毛阿禮杼歌乃調乎古爾引返多留波、此于志乎許曾、始登波尊倍禮、著給留書種々世爾行波禮氏、人皆知例婆、茲爾言波儒、千蔭若可里之與利、教受都留美多麻廼布由爾、報奉良牟登豆、人々登共爾謀豆、石夫美建留爾奈母有計留、伊蘇能可徹、布留伎世夫理衰、志流辨世之岐美、布里之與乎、志努婆牟比等波、志努婆謝羅免也、時者和元年

三月、橘千蔭文作白豆書利

眞淵翁始めて江戸に赴かむとて、親戚故舊を訪ひ、暇乞せられし時、翁の幼年の時よりいと親しく交はられたる濱松驛の某老人翁を誡めて曰はく、事は成り難く、志は碎け易し、子がこの行も余において甚危む所なりと、翁先其の箴言を謝し、さて江戸に至りて後は、必大に斯の道を振起し、身も亦顯榮たらしむ事を誓て答へらる。老人又曰はく、唯々怠らざらしむ事を心掛けらるべし。余はこの詞を以て子に饒別すと、いと懇切に告げたりとぞ。然るに翁志を遂げ、延享三年に至り、田安家に招かれて、古學博士と成られし時は、この老人の既に歿せし後なりしかば、翁は深く之を遺憾とせられきといふ。今翁の文歌の一二例を示さん。

荷田在滿家歌合序

首の葉のよしあしいはんは、春秋のけしきを争ふが如し。おのがヒ、このめるさま、いづれをよしとし、いづれをわしとかせん。それことばはる人、はた其の心づからいへば、つひにつくせる定めあることなし。されども柳さくらは、萩薄のくらぶべくもあらず。菊紅葉は花山吹になぞらへんか。はぎはことなるものにて、は、誰かわかさらん。その花紅葉が中にも、吉野の里よく見ん人は、龍田の山たち越えにたるおも

ひこそありぬべけれ、おろかなる心には、霧かすみたちまどはれて、色めもわきがた
かれど、これは花紅葉世にちるべきならねばとて、露も心おかでなすわざになん、ゆ
め山風になしらせそや。

岡部の家にてよめる長歌

年どしに	しぬび奉れば	ふる里に	在すがごとく
常はしも	思ひてしものを	何しかも	もどな歸りて
逢ふ人に	言とひぬれば	父のみの	父は在さず
母そばの	母も在さず	然はあれど	吾妹なねの
かしらには	白髪生ひて	かなどより	出づるを見れば
母刀自は	在しにけりと	立ち走り	入りてし見れば
面には	皺掻き垂りて	よろばへる	吾をしも見て
いもなねは	父來ましぬと	いぶかしみ	思ひたりけり
かたみに	言をもとはす	白玉の	涙かきたり
むかひ居て	昔へしぬぶ	事ぞさねおほき	

萬葉考のはじめにえるせる詞(第四節)

いとしも上つ代々の歌は、人の真心のかざりにして、その様なごとくもかたくも強く
も悲くも、四の時なぞ立かへりつゝ、前しりへ定めいひがたしや、中つ代にうつろ
ひて、高市岡本の宮の御時の頃よりをいは、三冬つき春さり來て、雪氷のとけゆく
が如し、是れを始のうつろひといはむ藤原の宮となりては、大海の原にけしきある
島もものうかべらむ様して、面白きいきはひで出で來たる、是ぞ二たびのうつろひ
なりける、奈良の宮のはじめには、このいきはひあるをまねびうつし、まゝに、おの
がものどもなくうらせばくなりぬ、これを三度のうつろひなりける、その宮の中つ
頃は、はゆかしき隈もなき海山を、風早き日に見むがごと、あらびたるすがたとなり
ぬ、是れぞ四度のうつろひなりける、それより後の歌は、この集にはのらず、古今和歌
集によみ人えらずとふ中の古きしらべなるぞ、この宮の末より今の都の始めのう
たなりける、そはかのあらびたりしがうらうへになりて、清らなる庭に山吹の咲き
どをめらむなして、ひたふるに妹に似る姿となりたり、これを五度の終のかはり
めなりける、しかしてまたその世々の中にも、猶古へなる、其の世なる古今をかねた
るくさくあり。

こゝにこの集に載するが中の、人々のすがたをわかちいはんに、古き御世なるは、お

してゐるやなにはの宮の皇后、こもりくの初瀬の宮の天皇、かつらさの豊浦の宮の日嗣皇子、高市岡本の宮の天皇おはしませせ、あげつるはむは恐し。よみ人しられぬに、おきそ山三野の山真そみ鏡にあきつひれ負なめ持ちてわをしぬばする、息長ののをちのをすげなごの類ひ數有り。こは既にいへる古の實にして、おはれなるものなり。これより下に秀たる歌といへど、くらぶべきあらず聞ゆるは、古ぬる世こそむかしかりけれ。

かくて後大津のみこのゆたけきすがた、大伯のひめみこのおはれなるしらべなど、歌ちふもの、しらべはかくぞありなましとおほゆ。志貴の皇子は静にしてこまやかに厚見のおほきみはにぎひてなほし、高市の連黒人は厚らかにして面白し。名細きよしの、山を花によりで見ることがとし、ながきがめでたかりけむを、是ぞそれとしられぬにやあらむ。柿本朝臣人麿は、古ならず後ならず一人の姿にして、荒魂和魂いたらぬくまなむなき。其の長歌、勢は雲風にのりてみ空行く龍の如く、言は大海の原に八百潮の湧くが如し。短歌のしらべは、葛城のそつ彦真弓を引きならさむなせり。深き悲みをいふ時は、千早ふるものをも歎かしむべし。山上臣憶良は言ふつゝ、かにして心うつくし、久米のどもの雄々しき姿して、たつゝ舞せらむおもはゆ。短歌の

に、たゞごとはいへるはいふべくもなし。山邊、宿禰赤人は、人万呂とやらうへなり。長歌は心も言もたゞに清らをつくせり。短歌こそこれも一人の姿なれ、巧をなさず、あるがまに、いひたるが妙なる歌と成りにしは、本の心の高きがいたるなり。譬ば檳榔の車して大路をわたるぬしの、あから目もせぬが如し。大伴宿禰旅人のまへつぎみの短歌は、をしくてかなし。酒をよめるに、すめら御國の心をいへるは、たふとし。こはしらべをすて、心をぞとるべき。長きはしらす。それがつぎなる家持のぬしは、事をよくしるして勾ひなし。譬ばいでましの大みどものつらめ、めでたくしるせるよみのごとし。短歌はいと多かれど、あらびてうらぐはしきはまれになむある。これよりさきに、三方の沙彌、久米の禪師が、古き姿のうるはしき。又長の忌寸意寸まゐる。春日くらのおほと老が心しらび、其の外にも是れかれあれど、につくさず。田邊史さぢまろ、笠野朝臣金村、高橋連蟲万呂などは、徒に古をいひうつせしものなれば、強きが如くにして下よわしをみなにては、額田姫王は、いにしへのみやび人なり。春秋のわらそひをことわり給へりしなむ、女心のをはしき。大伯皇女の御歌は、事にふれて上にいひつ。石川、郎女がなよびたる姿、譽謝、姫王のよろしきしらべ。大伴坂上郎女の歌は、氏の手ぶりのしるく、事にもあたりぬべきさまなり。又歌ぬし、られぬ

にこそ、猶多けれ。藤原の宮づくりたてたる民が歌は、をぼろげにあらす。同じ御井の歌のふる車なぞしいひてあやあるは、其の代の黒人万呂の外にすぐれにたりず。べて短歌に秀たるさはなれど、擧ぐるにたへんやは。其の著書を擧ぐれば左の如し。

- 外宮考 日本書紀訓考 直淵雜錄 山間文神代卷
- 祝詞考 延喜式祝詞解 古事記私記 古事記訓考
- 假名古事記 萬葉解 万葉考 厚顔抄加評
- 落久保物語頭書 源氏物語新釋 大和物語直解 伊勢物語古意
- 伊勢物語大意 勢語七考 さいはり琴の譜 本言
- 陸奥出羽風土記文附致 法華祭講奉對案 維陽詩草
- 論語紀聞 書經辨解 詩經辨解 淨土三部假名抄言釋
- かりの行かひ 書意考 文意考 語意考
- 冠辭考 古器考 歌意考 國意考
- 十二月考 古冠考 田安殿奉對案 車服板萃
- 應問答 雜問答考 獨唸曲 千歳燈

- 千歳雜錄門人所記 初學 萬葉新探百首解 古今集序傳說
- 古今考 古今集打聞門人所記 古今集私說 古今古探百首
- 百人一首初學 百人一首古說 神樂歌考 竹採翁長歌考
- 神樂東遊考 催馬樂歌考 遠江歌考 梅花子集
- 國歌臆說 縣居家集 東歸 西歸
- 縣居歌集

建部綾足 二二三七九 一三三

綾足は、南都の人にして、淺草雷神門の邊に住めり。俳諧に勝れ繪畫を能くす。字は孟喬。吸露庵と號し、又淺草庵。或は片歌道守、詩名を寒葉齋といひ、一名を英親といふ。又俳號を涼袋と呼べり。後俳諧を止めて、凌俗と改む。綾足は和歌の名なり。綾足、幼時より聰敏にして、才藝人に過ぎ、俳諧を好む。或時人の許にて俳諧すと聞きて、己も習ひ見むとて、一句を詠じけるを初にて、三月ばかりも過ぎては、其を導きし人の句をも批判し、或は作りかへなとせしを見る人大に感じたりとなり。後加賀の希因の許に遊

び、又伊勢の乙由の流を學び、終に新奇自在の風を成せり。後江戸に住して、俳歌と繪畫とを以て生業とせり。從學する者甚多く、爲に家富ゆるといふ。時に加茂真淵大に萬葉の古風を唱へて、其の名世に噴々たり。綾足則その妻をして、その門に入らしめ、以てその流を學ばしめ、自その妻に付きて又その説を聞く。こゝに於いて俳諧を改進し、一家言を立てむと欲し、京師に上りて專片歌を唱道す。片歌は、日本武尊より起る。古事記の、にひばりつくばを過ぎて幾夜かねつる」とあるこれなり。或はこれを旋頭歌の片歌といひ、五七五の常のさまなるをも片歌とせり。この歌、爾來頽れて唱ふる者なし。故を以て綾足常に曰はく、予今俳諧をすて、片歌を唱ふるは、世人の敢へて取らざる事を知る。然れども、片歌中興の祖ともいふべき者は、吾をおきて他に求むべからずとて、みづから任じたりとなり。則伊勢の熊保野は、日本武尊薨去の地なりとて、碑を建て、之を誌し、右大臣華山公、片歌道守の四字を書きて賜はりしが、片歌の終に行はれざりしは、いとも惜むべき事なりけり。安永三年三月十八日東國に遊び、武藏國熊谷に於いて歿す。年五十六なり。牛島弘福寺に葬る。

綾足小説を能くし、磊落不羈にして、その品行上に於ては、議すべき者多しといへども、秀才多能拔群にして逸氣あり、その猖狂無行なる一世を蕪弄して、人を視る事小兒の如し。

會て其俵三百金を賜ひて遊資に充て、以て熊悲に従ひて書を學ばしむ。綾足其の金を以て某妓を脱籍せしめ、留宅を守らしむ。而して自は長崎に遊ぶ。然るに妻其の門人と奸す。綾足これを聞きて離別し、則門人某に與へ、更に意に介する事なし。居る事六年にして歸り、書を某侯に奉る。その狀一團塊の如し。侯怪みて之を問へば、山の芋なりと答ふ。侯怖然として怒り、爾來綾足を近けざりきとぞ。綾足斯の如く、磊落不羈の性なるに似たれども、生涯羈絆をうけむ事を厭ひ、殊更かくは謀りしなりとも云ふ。後才藝に熟せし妓を撰びて落籍せしめて妻となす。加茂の真淵に従ひて歌學を學びしは、則この後妻なりといふ。今著書を擧ぐれば左の如し。

- | | | | |
|---------|--------|--------|-------------|
| 歌文要語 | 伊勢物語考異 | 西山物語 | 吉野物語一名本朝水滸傳 |
| 孟喬雜書 | 寒葉齋畫譜 | 漢畫指南 | 建氏畫苑 |
| 漫遊記 | 片歌二夜問答 | 片歌百夜問答 | 片歌道のばり道 |
| 片歌道のはしめ | 片歌東風流 | 片歌舊宜集 | はし書ふり |
| すゝみ草 | とはし草 | をりく草 | |

谷川士清 二四三六七一二一

士清は伊勢國の人にして、世々醫を業とす。昇淡齋と號せり。士清はその字なり。初め玉木葦齋に従ひて、山崎派の神道を學び、後有栖川職仁親王に事へ奉り、和歌を修め、傍頻りに國史及語釋の學を研究し、終に大成して一家を成し、大に世に稱揚せらるゝに至れり。士清人となり、氣概あり、史傳を暗誦し、學和漢を兼ね、好古博洽を以て稱せらる。最心を日本紀に潜め、その行文措辭等を儒書に取り、或は佛書に取れる類、皆其の本づく所をわけ、廣く先哲の説を彙集し、參互檢討して、日本書紀通證三十五卷を作る。又古今雅俗の言語を統招し、和訓栞を著して、大に國學界を裨益せり。曾て縉紳家の招に應じ、藤堂侯も數々その家を訪はれきといふ。晩年に及び著書の稿を石櫃に入れ、埋めて之れを反古塚といふ。安永五年十月十日歿す。年七十なりき。伊勢國刑部村福藏寺に葬る。法號を文藝大英居士といふ。其の世に公になりたる著書は、甚少し。

- 勾玉考
- 和訓栞
- 日本書紀通證
- 鑿屑譚
- 反古塚記

加藤美樹 二四三八七一一〇

美樹は、加茂眞淵の門人にして、姓は藤原、通稱は大助、字萬伎とも書けり。靜廼舎はその家號にて、幕府大藩の士なり。縣居の門に入りて、殊に古學を唱ふ。寶永年間、公務を以て浪華に駐す。時に京坂の人刺を通じて、その業を受くる者甚多かりき。安永六年六月十日、京都の二條において歿す。時に年五十七なり。三條三寶寺に葬る。その著書の世に公になれる者は左の如し。

- 古事記解
- 雨夜たみ辭
- 土佐日記注
- 木曾路之記
- 古葉注解
- 伊勢物語注解
- 假名問答
- 假名類纂
- 靜舎歌集
- 靜舎雜著

富士谷成章 二四三九八一八

成章、本姓は皆川、淇園の弟なり。字は仲達、專右衛門と稱し、厩城と號す。故ありて他姓を冒す。厩城は養父の號を繼ぎしなり。後、居所の名を取りて北邊といふ。三歳にして書を善くし、七歳にして詩を作る。九歳の夏、偶、韓人來聘す。成章その館に至り、彼と筆談せり。機警、韓

客をして舌を卷かしむ。長ずるに及びて、益漢學を修め、深く經史に渉る。その經を收むるに當り、發明する所あれば、大に喜びて以爲らく、是千舌の道なり。今に於いて顯る。然れど聖作といへども、異國の故事のみ、苟吾民の故に通ずるにあらざれば、何んぞ能くこれを傳紹して、以てわが俗を化せしめんや。これより志を翻して、頻に本邦の學を修め、國史より以下諸法令儀式等の書及名人家乘遺集に至るまで、偏くこれを攷究せざる事なく、又和歌を修めて、詠吟する所の數、死に至るまで、その幾十萬首なるを知らず。一日兄淇園、その友人兩三輩と共に家に會して、百題を出して詠吟す。午時より子刻に至るを期して、各五律を賦す。淇園まづ成りて、諸輩これに次ぐ。然るに獨成章大に後れたり。人々其の平生の神速なるに違ふを怪む。然るに終に其の出す所を見れば、百題に各和歌一首を添へたりけり。是において諸子大に驚き、坐を叩いて賞賛したりといふ。その爲す所多くはかくの如し。故に業を受くる者、四方に遍かりしなり。

成章、言語音便の説に精しく、曾て釋話を作りて、その徒に口授す。その挿頭抄脚結抄の如き、今に至りて尙世に行はる。其の他著さむと欲して稿を脱せざる者、無慮百有餘種ありといふ。本居大人、曾て詞の玉の緒を作れるをり、脚結抄及挿頭抄を見て、われより先にかゝる事いひけるかと、いと愛で喜び給ひたりとぞ。

成章、人となり、風流温篤にして、加ふるに天資の聰悟を以てし、諸技藝を學ぶに、一聞して直に之に通ず、而していまだその成らざる時は、則出さず。出せば必人に優るといふ。天文曆數、及雜技吹彈を學びて、成らざるはなし。人と與に相會し、知らざるものは、その形軀の矮小なるを見て、之を輕侮し、既にしてその敏なるを見、心大に傾駭し、以て異人となす。又間を得れば、新意を出して器を創す。その器、必人の爲に傳播せらるるといふ。曾て柳川侯に仕へ、久しからずして致仕し、安永八年、四十二を以て歿す。洛の蓮臺寺に葬る。兄の淇園大に嘆惜し、墓神を作りて、其の平生を盡す。その著書は左の如し。

- | | | | |
|------|--------|------|---------|
| 六運圖說 | 國字源原考 | かざし抄 | おすひ抄 |
| おゆひ抄 | 國字牌格 | 三音通義 | 北邊七體七百首 |
| 和歌梯 | 一夜百首詩歌 | 山の燈 | 北邊歌集 |
| 層城詩草 | | | |

楫取魚彦 二三八三一一五

魚彦は、加茂真淵の門人にして、下總國楫取の人なり。稻生氏にして、茂右衛門と稱し、茅生

庵と號す。又青藍ともいふ。初名は景良。後に魚彦と改む。父は景榮。母は土子氏なり。魚彦六才の時、父景榮歿して、母に養育せらる。幼より讀書筆札を好み、又書法を寒葉齋綾借に學び、兼ねて俳諧を好み、甚これに能くす。年長するに及びて、益丹青の妙所に至り、法を古に求め、姿形を目前の寫生にとり、おのづから一家の風を成せり。就中、梅と鯉魚とを寫すに深く意を用ひ、庭前に數種を植ゑ、又平生許多の鯉魚を小池に放ち、その形勢を熟視せり。故に人之を賞して、頻に其の畫を索めたりといふ。

加茂真淵の江戸に在りて、盛に古學を唱へ、普く有志の士を誘ふ。魚彦直にその門に入りて、古學を修め、特に萬葉集を貴びて、頻に古言の奥旨を究め、日夜孜孜として怠る事なかりき。其の平生詠む所の歌、少しも後世の言を難へず、好んで上古の調を貴ぶ。而して新意、往々其の間に發すといふ。魚彦常に假名用格の混乱せるを嘆き、古事記、日本紀、萬葉集より、和名鈔に至るまで、古き假名を尋ね、古言梯を著せり。後進の士これに依りて、利益を得る事甚多かり。

魚彦、明和二年に家を子景序に譲りて、江戸に出で、其の居を茅生庵といふ。六年十月、縣居大人の歿し給ふ時、その門下の徒、魚彦に従ふもの甚多く、既に二百人に餘れり。時に酒井侯、奥平侯、戸田侯等、禮を厚くして延聘し、奥平侯は俸米若干を賜ふ。又上野の法親王にも

寵遇せらる。天明二年三月二十三日、病を以て歿す。年六十なり。後門人千賀真恒、同友と相譲りて、魚彦の遺稿を集め、橋場の總泉寺境内に埋め、碑をこゝに建つ。これを茅生塚といふ。其の碑今廢れたり。其の碑文は左の如し。

茅生壘碑

鐵聲蜂音乃壘波也。茅生波吾大人。茅生乃翁。實廬乃號。爾志豆翁波。楫取中臣魚彦。奈利翁下總國楫取縣從。東乃遠乃朝廷大江門乃大城乃下。爾出豆加茂縣主真淵大人。爾屬我吾皇御國乃古誓乎。讀考反古調乎。序歌反里介留今也。降禮留代爾志豆高俊代。廻文藻乎。悟佐久。故作禮留古言乃梯。登云書序其高代乃高爾。昇布手便登毛成奴。又廣久種々乃書乎。論呂比勢成世留業乎。掛卷母恐俊二荒乃宮乃法王聞食皇靈乃布由乎。蒙豆從其勳功乎。不稱波不有介里如何奈留也。年名乎天明登云留二年三月二十三日。齡六十登云爾黃泉爾去奴。茲爾翁耳從反留朋友等議豆此武藏國豐島奈留縣爾淺茅我原登名乎。負世志地乎山緣登志豆書捨爾多留文等歌等乎。埋美即豆是乎茅生乃壘登。曰平何恰此石登與爾千秋五百秋。毛淺茅生乃茅生乃翁。實名乃不朽豆往昔好米留人乃。爾爾奈母爲平止智河真恒識奴源伊呂古書。

又其の著書を擧ぐれば左の如し。

古言梯 百人一首略傳 檜の孺手 萬葉集千歌
 雨夜の燈火 筆のさきこと 冠辞のかけ緒 續冠辭考

伊勢貞丈 二三四七五一一三

貞丈は通稱平藏、安齋と號す。姓は平氏なり。貞永の二男にして、家千石を領して、幕府に仕ふ。兄良陳十三にして、痘を患ひ病死す。家族等、急に家督を願はんといひけるを、母大久保氏曰はく、父貞益、其の兄貞永幼死の跡を繼ぎ、又しも兄の家督を願はひは、官に對して恐多かりと。即其の事を傳の儘に上申し、家領を殘らず返上せしかば、家絶えぬべくなれりしを、舊家の故を以て格別に思召れ、相州舊領の中にて、三百石を貞丈に下さる。やがて寄合席となり、御小性組番に入り、天明四年二月、年老いたるを以て小譜請入仰付けられ、金二枚を賜はる。同年三月十一日致仕して、麻布に住し、以て餘年を有てりといふ。貞丈幼より有職故實を好み、博覽宏通、中世以後の記録において、研究せざるはなく、終に一家の流を成せり。制度典章器械服飾等に至るまで、考據精密なりき。その著述の書は、實に我國文學界を益し、且間接に裨益せし事も少からず。其の書多くは刊本ならず、寫本を

以て世に傳はると雖も、世のこれを珍重せざる者なし。天明四年六月五日歿す。時に年七十なりき。西久保大養寺に葬る。其の著書は左の如し。

- | | | | |
|-----------|--------|--------|--------|
| 東鑑不審問答 | 新伊問答 | 比那問答 | 家流問答 |
| 雜說問答 | 幼學問答 | 軍神問答 | 梅檀鳩毛問答 |
| 飾馬問答 | 笠懸藝目問答 | 刀劍問答 | 烏帽子折問答 |
| 三社託宣考 | 安閑紀錯簡考 | 三種神器名考 | 源氏八領鎧考 |
| 押字考 | 和歌三神考 | 道風像考 | 菅像辨 |
| 世繼物語考 | 逆類箴考 | 武具要說考 | 脇差考 |
| 飾劍木也考 | 空穗考 | 辨慶七道具考 | 鞆考 |
| 侶呂衣推考 | 矢羽文考 | 愚得隨筆附考 | 五六掛鎧考 |
| 狩衣考 | 甲冑名考 | 平體考 | 長烏帽子考 |
| 赤鳥考 | 烏柴考 | 蝦夷鐵先考 | 尻籠考 |
| 驛路鈴考 | 禁色考 | 革類考 | 乗物考 |
| 三木三鳥考 | 烏帽子考 | 細長考 | 綾文考 |
| 本朝軍器考補正詳考 | 神代卷瀆見 | 神道獨語 | 大袂詞解 |

舊事紀刻偽	王代圖略	源平盛衰記聞書	源氏ひとりこち
勢語臆斷別勘	今昔物語聞書	寶劔寶鏡記	齋院齋宮記
姓氏辨付說	庭訓往來扶翼	百敷草拾遺	扶桑見聞私記辨偽
和字衆說	位記口宣注	非參議四位	徒然草大意
鑑類	軍器考首書	五武器談	古鑑色目
鑑直垂色目	鑑具足辨	武器考證	鑑着用次第
鑑色談	甲冑威毛色目	振甲圖說	武藏鑑
馬揃	鞍具鑑圖類	諸鞍日記	鑑鞍記
鞍鑑工記	平義器談	俗說辨母衣說辨	取馬故實評
射法忘說集	武備根元	武門故實百箇條評	練兵要錄
三儀一統辨	軍職志	尉子五篇解	殘儀兵的辨
武林原始首書	古代烏帽子圖	葵作	位袍
正三記	直垂考附錄	包結記	洗革
額綱	日蔭之蔓	安多武久呂	火打袋
烟草集說	諸篇拔萃	韞藏秘策	求身抄

小車錦	呵純	要訓	二見浦
二上峯	松島日記注	今川壁書解	舳舻訓
あるまし	後院	まゝなき	貞丈雜記
凶禮式	伊勢家坐右書	南嶺遺稿評	四季草
天下貧富人情沙汰	秋齋閑話評	伊勢漫筆	安齋小說
安齋夜話	安齋漫筆	安齋問答	安齋隨筆
大和事始正誤	雜書燈下書	無題隨筆	本朝軍器考標疑

羽倉御風 二三四八八一三

御風は、在滿の子にして東藏と稱し、初の名は冬滿なり。東都において國學を教授し、父の學を傳へて、よく其の家の名をなせり。御風、性強記にして、一目すれば終身忘るゝ事なしといふ。洗洋自恣にして、最酒を嗜み、檢束する所なし。故に或は人の爲に誦られなむすれども、毫も意に介せず、冷然自得す。唐津侯、其の名家の子なるを憐み、常にいたはり恵み給ふ。天明四年八月十六日歿す。年五十七なり。淺草金龍寺に葬る。唐津侯、その後なきを嘆か

せられ、某の子惟得を子として家を継がしめ、やがて家臣となし給へり、其の著書は、僅に西行紀行、御風家集のみなりといふ。

田中道麿 二三九〇 一三

道麿は、加茂眞淵の門人にして、美濃國多藝郡の人、大阪に住めり、通稱は庄兵衛、榛木翁と號し、後薙髮して道全といふ、初縣居の門に入りて、頻に萬葉集の古風を唱へ、後、本居宣長に従ひ、その古書に付きて、考へ得たる所少からずといふ。

道麿、宇津保物語の板本は、卷の名違へるあり、其の次第も亦亂れて、讀みつきがたき所少からざるを嘆き、古き善本によりて、これを校訂せり、又名古屋において、皇國の學を修むる者多く出來りしは、全く道麿の導きによれりとぞ、天明四年十月四日歿す、年五十五なり、著す所の書は左の如し。

- 萬葉集問答書 萬葉集名所和哥抄 萬葉集東語彙 萬葉集萬葉徵
- 榛木翁集 暗愚抄

加藤枝直 二四五二 一三

枝直は、加茂眞淵の門人にして、江戸町奉行の與力なり、幼名を爲直といひ、通稱は又兵衛、芳宜園と號す、伊勢國の生にして、橋氏なり、中世故ありて、藤原を以て稱せり、枝直に至りて又舊に復す、少にして江戸に出で、與力となりて、町奉行大岡忠相に屬す、壯なるに及びて、好んで歌を詠じ、文を屬し、暇あれば常に書籍を繕き、縣居大人の江戸に在りし時、その情交甚親厚なりき、終に大人の居を己の邸中に移し、以て文學の教授を受くといふ。

枝直、年七十二を以て仕を致し、朝暮只歌を以て意となせり、故に益其の妙を極めて、名聲高く、從ひて學ぶもの甚多かりき、年八十にして、自詠中うの得意のものを撰み、自東詠と題し、六卷と成す、後千蔭これを刊行し、專世に行はれたり、天明五年八月十日歿す、年九十四なり、本所回香院に葬る、枝直の詠歌は、天性の妙に出で、詞花言葉をもとせず、誠實を旨とせり、その著書は左の如し。

- 新撰梅曲 享保御定書立案 東歌 子に與ふる文
- 改正觀世流謠曲 青木氏推薦事實 古を好どほこるをにくむ説

藤井貞幹 二三八二一〇八

貞幹は京都の人にして、叔藏と稱し、字は子冬、無佛齋と號し、又好古といふ、日野家の落胤にして、國學を以て聞ゆ。曾て街口發といふ書を著せり。其の主旨たる。大に國体に害あるを以て、本居宣長に駁撃せられたり。是れよりして、聊その名聲下れりといふ。その最長じたりし學は、考證にして、述作の書數部あり。寛正元年八月十九日、年六十八にして歿す。眞如堂に葬る。その著書は左の如し。

- | | | | |
|--------|-------|------|---------|
| 街口發 | 國朝書目 | 逸書 | 逸號年表 |
| 天智天皇外記 | 金石遺文 | 好古小錄 | 歷代外印鑄造考 |
| 集古圖 | 古瓦譜 | 好古日錄 | 好古雜錄 |
| 金石圖考 | 無佛齋文集 | | |

小澤芦庵 二三八三二四六一

蘆庵は、冷泉爲村卿の門人にして、有名の歌人なり。尾張に生る。名は玄中、通稱帶刀、蘆庵と號し、觀荷堂といふ。幼にして大阪に住す。其劍術を善くするを以て、武者修業して諸國を

經巡り、京都に至りて某公に仕へ、歌を冷泉爲村卿に學べり。後、おのづから一家を成せり。曾て師卿の手跡を贋書したる誹あるを以て、卿之を聞きて快からず思ひ、使をして破門の仰せありしかば、蘆庵使に向ひて、深く其の罪を謝し、御請け申しあげんとて、やがて内に入り、歌を短冊に記していだしぬ。其の時の書は、既に上代様にてもものしたりとぞ。

しるべせし和歌の浦風道たえて身は捨舟のよるかたもなし
と、使返りて有りしよをいらへ申せば、卿の曰はく、彼才あるが故に、いかで永く吾が下
風に立つべき。彼は後必名たゝる歌人とならむと言はれけりとぞ。

蘆庵年三十五歳の時、洛東岡崎村に住家をもとめて、物書く業を營となし、母をも尾張より迎へて、孝養怠りなかりしが、幾程もなく、歌もて名を世に轟かせり。上田秋成、伴蒿蹊、橘千蔭なほは、親しき友なりけり。又香川景樹も、若き頃より、蘆庵と親しく交りたりしが、或夜往きて物語しけるが、蘆庵の曰はく、汝の才は過ぎたるが患なり。なほありしが、その翌日、景樹の許より、千里をもかけれと鞭は打ながらあはれと見らむ醜のおそ馬と、申遣しけるに、蘆庵

鞭うつは海を超えよと思ひさやあなく、危ふ醜の早馬とありき。景樹老いての後
までも、この教誨をかたじけなしといへりとぞ。又何時の頃にや。

こののはをわたらひ草になさめやは山のやせ田ももたらましかばと咏みしは明
 惠上人の汚さじと思ふ心をともすれば世渡るわざとなすぞかなしきといへるに意同
 じく、文事も世のわたらひとするを恥ぢしなり、某法親王其の名をきこしめされ、數々
 御使もて召し、かども固く辭みて參らず、親王の仰に、隱者なり、殊に老人なり、風雅の事
 に強ひて招かむは、禮を失ふに似たれば、來らざるも理なり、この方よりこそ尋ねけれ
 どて、太秦までは、二里に餘れる通路なるを、殊更に訪はせ給ひしかば、蘆庵も忝なく思ひ
 奉りて、夫よりをり、參上る事とはなれりぞぞ。

蘆庵人となり、方正端嚴にして、邪を疾む事特に甚し、人過あれば忽これを面責して、毫も
 假借する所なしといふ、一夜盜賊忍入りけるに、蘆庵火を燈して出でければ、早去りて影
 もなし、翌夜又入りぬ、蘆庵又薙刀をとりて、打向はむとせしかば、盜賊は、歌人の家に似ず
 とて、驚き逃れ去りぬ、こゝによめる歌あり、曰はく、

ありそ海の巖こゝしみ越えかねてよるゝかへる沖つ白波また大坂の豪商三井
 家の一族皆蘆庵の門に入りて業を學ぶ、寛政壬子の年、蘆庵重き病に罹りて、久しく惱み
 居たりしに、一度だに訪はざりしかば、病癒えての後に曰はく、彼は世に名高き富豪なり、
 今物學公師の病篤しと聞きなば、介抱人を添へおかん事もとより難からざるを、其の身

だに訪はざるは、人心なきものなりとて、其の後絶交したりきとぞ、其の書の奥に、

三井の水濁れるものを澄めやとて何汲みつらむ袂ぬらしに

人の世の富は草葉におく露の風の間を待つ光りなりけりとありければ、三井家罪
 を謝せれども、遂に可かざりきとぞ。

蘆庵よき箏一張を求め出して、みづから弾き試みしに、姿にも似ず、其の音さやかならず、
 依りて樂人某に見せたるに、樂人も亦試みて實に響あし、これは古器の、しかも木理さへ
 美はしく、後世に得がたきものながら、斯く鳴らでは何かせんと返しぬ、蘆庵おして言へ
 るは、如何にもよき箏なり、少し手を入れなば、鳴りなむ、その時惜み悔い給ひそとて、家貧
 しき中より、金五兩を出し買ひ求めて、箏の上下の裡の穴より、甲の裏を砥石にて磨り、瘥
 るにも起くるにも、又人と對話するにも、暫しも手を休めず、日數多く経て後、緒をかけて
 試みしに、果して絶妙の音ありて、勝れたる名器とぞなりける、皆人感じ羨みたりしに、
 或日中島道成來りしかば、この箏を出して弾かしむるに、道成さても羨しき箏をもてる
 ものかなといへば、蘆庵曰はく、少しも心にかゝる悪しき所は無きにやと問ふ、道成如何
 許るべきと答へしに、さらばこの箏を君に參らすべし、失禮は容し給へかし、そこ程の上
 手に、よき箏一面も持たせざるは恨みなれば、贈り申すといふ、道成も思掛けねば、驚きて

再三辭し申し、かきも、その志の厚かりしかば、痛く悦びて其の日みづから携へ歸りしとぞ。蘆庵家甚貧しかりしかば、或日他に行きて歸るさに途中より轎をやとひて家にかへり、轎夫に賃を興へむとするに、錢の三文足らざりければ、やがて隣家に乞ひしかば、折節其の家にもなかりければ、三文の償にとて咏み興へしは、

津の國の難波のあしのみつをなみことうらかけてからしけるかなとなり。

蘆庵王室を尊ぶ心篤く、居間に長刀をかけおきて曰はく、禁内若し事あらば、これを提げて難に赴くべしと。曾て蒲生君平山陵志を作らむとて、幾内の地を經歷するを聞き、その素志にかへるを痛く悦びて、君平をその家に宿し、心のまゝに探ね究めまめしなと、その志見えぬべし。天明の頃、火にあひて家を失ひければ、

小車のうしと見し世にかへり來て更におもひの家に住むかなとよめり。かくて戊申の年禁中の炎上に、

今朝見れば焼野の原となりけりこゝや昨日の玉敷の庭と感慨の情言葉の外に表れたり。この時、蘆庵の家も同じく災にかゝりしかば、太秦の地藏堂に住みけり。

今は世をうづまさ人になりはて、都は雲のそよにこそ見れとよめり。

當時都にては、高峯澄月、大愚法師など、世に聞えたる歌人なり。そが中にも、蘆庵は殊に勝

りてぞありける。本居大人も都に歌人蘆庵あり。東に文人春海あり。吾が企及ぶべきかぎりにあらずと、常に褒めたいへられさとぞ。頼春水、妻と共に蘆庵の家を訪ふ。然るに妻は、曾て歌を蘆庵に學べりしかば、蘆庵歌を咏みて送りしに、其の句毎に來れるよしを言ひ、古歌數十首をよみて、その證とす。されば春水も驚きて、吾等の詩を作るも亦さる事ながら、記憶はもとより翁の半に及ばずといへり。とぞ。春水の子、山陽も蘆庵の太秦歌稿の後、に題して、杜詩以變州後爲上乘蘆庵翁和歌爲當代第一而其避災寓太秦時稱最深妙故太秦者蘆庵之變劫也とあり。皇學する者はもとより、漢學者にも亦第一を以て推されたり。享和元年七月十一日、年七十九を以て歿す。其の前日、臥したるまゝ、を次の間に移したる時、

波の上を行く心地して磯近くなりけらしな松の音聞ゆと咏みたりとぞ。其の屍は、北白川心性寺に葬り、法號を寂照院月江蘆庵居士といふ。蘆庵の詠歌は、才氣秀抜にして、古今の諸跡に出入し、其の自由なる事云ふべからぬ所あり。世人稱して平安中興の良師といふ。門人に示し、十二首の歌あり。以て詠歌の規矩となすに足るとぞ。又哲あり。小河津流、前波歌軒、田山紋義等、皆一時名ありし士なり。今その著書を左に擧ぐ。

蘆芽

古中道

六帖詠藻

千首都類

萬首部類 袖中和歌六帖 ぶりわけかみ 観荷堂一家言
観荷堂隨筆 蘆庵集 ちりひぢ

横井千秋 二四三六九一〇九六

千秋は、本居宣長の門人にして、尾張の藩士なり。名は宏時、田守と稱す。通稱は十郎左衛門時諱の子にして、兄圖書時辰の養子となり、小性より部屋用人に昇り、祿八百石を領す。鈴門の巨擘にして、大人の志を助けて古學を研究す。大人が古事記傳を刊行せしは、千秋が助大に力ありと云ふ。千秋、平生漢人の輕薄なる風を嫌ひ、皇國の古風粹然なるを稱へ、深く本居大人の學徳を信じ、神代正語をものしてよなと誂へたり。尾張の儒臣の、鈴門に多く入りしは、千秋の勸によりてなり。著述は皇國君臣の大義を書せるものなと數多ありとぞ。今世に傳はりたるは、天の御中の詞一卷あるのみ。享和元年七月廿七日、年六十四にして歿し、尾張國祖父江村永張寺に葬る。

本居宣長 二四三六九一〇九六

宣長は、加茂真淵の門人にして、通稱は舜庵、後に中衛と改む。姓は平朝臣一流にして、池大納言頼盛卿六世の孫なり。父は小津三四右衛門定利といひ、享保十五年五月七日、伊勢國松阪に生る。常に坐せられし書齋の坐右に、赤き紐に貫きたる小鈴をかけおき、氣屈し神倦む毎に、これをふり鳴らしつゝ、體を慰せり。よりて鈴の屋と號すとす。幼名を富之助といひ、八歳にして手習を始め、十一歳にして父を失ふ。この年通稱を彌四郎と改め、十二歳の時諱を榮貞といひ、漢籍四書を讀むに、強記絶倫にして、誠に愛すべき才あり。幼より群童に秀抜して、遊戯を成さず。十五歳にして初冠し、十七歳にして咏歌を始め、傍射術茶道に心を寄せ、漢籍五經を讀む。二十三歳にして京都に行き、堀景山に事へて儒道を學び、又武川幸順法眼の弟子となり、醫術を學ぶ。この時より小津氏を止めて、本居の古姓に復す。一日同遊と相會し、嘗て曰はく、吾學を以て天下に冠たらずんば、再足下と相會せずと。尋いで通稱彌四郎を健藏と改め、廿六歳の時名を春庵と號し、諱を宣長と改む。二十八歳の時故郷松阪に歸り、小兒科の醫を以て業となす。その術大に行はれ、治を請ふ者甚多く、活樂師を以て呼ばるゝに至る。その治療に出づる時といへども、駕中少時も手に卷を釋て

す三十二歳の時、加茂真淵君命を帯びて伊勢大和山城の國々を巡回すと聞き、その旅宿に至り、初めて名刺を通じて、その弟子となられけり。

宜長、曾て勢語臆斷、百人一首改觀抄をよみて、國學に志し、冠辭考を見て、益志を確し、終に眞淵の門人となるに至れり、然るに眞淵は江戸にあり、故に雁書往來し、遂に國史律令格式諸家記録歌書物語等、悉く涉獵せずといふ事なし、宜長非凡の才識ありしかば、眞淵の考へ及ばざる事ども、次々に致へ出でて、遂におくかを究められば、其の名世に轟き、遠近より笈を負ひて、教を受けむと慕ひ來るもの多かり、門徒前後六百人に及び、著されし書は棟に滿てり、その書多く世に用ひられし事、皆人の知れるが如し、古歌古文等の解釋物には、古今集遠鏡、歷朝詔詞解の如きあり、又源氏玉の小櫛には、源氏物語に關する諸書を集成して、これを批評し、併せて其の異同を辨解し、また萬葉集玉の小琴といふもあり、諸書の異同を訂正し、これを評論せられたり、音韻には、漢字三音考、字音假名づかひ、地名字音假名づかひ等ありて、音韻の學を釐正し、紐鏡詞の玉の緒等を以て、本邦文法語格を正し、係結の用例を明示して、先人未發の説をもを公にせり。

又古事記は、皇朝の古傳古語を存して、絶えて漢意を交へず、故に其貴き事比なけれども、難語多くして讀み易らず、然るに先輩、これを解説する事を成さざりしかば、宜長これを

嘆じ、三十五才の時より草稿を始め、大に精力を盡し、四十二才の時、直毘靈の稿なりたり、さてこの直毘靈は、皇國の愛度き故よしを解き、道といふ事の論を書きついでられけるが、尾張國の人市川匡麿、未我能比禮といふ書を著して、かにかくと駁論せしを見て、微笑して曰はく、斯の如き書幾許出づとも、齒牙にかくるに足らず、兒戯に類する事のみと、措て顧み給はざりしを、門人等強て反駁を請ひければ、已むを得ず、二三夜間にして、葛花を著し、その禍説なる事を説かれたり、又藤井貞幹といふ人、衝口發といふ書を著せり、其の主意大に國體に害あるを以て、鉗狂人といふ書を著して、之を辨駁せらる。又上田秋成が、國學の辭める論説を難じて、呵刺腹を著さる。その卷末に、上件上田氏が論、痛く道の害となる者なれば、いさゝかこれを辨するなり、見む人争を好むと思ひそ。

さよめおく道妨げて難波人あしかるものとがめざらめやといへる一首の歌を書かれたり、書名は蓋これより起れり、かくて後は、浮雲の名残さへ無くなりて、天津日かげと共に古道愈明になりぬるは、いと潔き事になむ、國侯寵遇特に厚く、遂に國政を諮詢し給ふに至る。是において、玉匣別記二卷を著して、之を進せらる。侯大に喜びて給ふとなり。

宜長五十歳にして、古事記上卷の傳成り、六十三歳にして中卷の傳成りぬ、六十五歳にし

て、紀伊の殿に召されて、奥醫師の列に加へらる。三月にて歸り、松阪に居らるゝ事舊の如し。六十九歳にして、古事記下巻の傳なりぬ。七十歳の九月十三日の夜に、このよるこびの會を開かれたり。されば前後三十五年の星霜を経て、遂に傳四十四卷を著し、天下に公にせられつるなり。其の考證の精密なる、千載の疑惑を氷解し、後人を誨誘せらるゝ功鮮少なからざるなり。斯學に勉めらるゝ狀、眞の考證の難義に至りては、寢食を忘れらるゝ事、數日に及べりといふ。終身の學力は、實にこの書に竭されたりといふべし。さてこの書の摺卷となりしは、寛政の始よりにして、文政五年までに彫刻皆成れり。玉襷に四十四卷と見え、たれせも、この外に古事記傳首卷一卷あり。これは紀伊大納言殿の手づから古事記傳の四字を題字に書き給ひしに、本居太平翁の添書したる者を、摺卷に成したるなりとぞ。その添書には、これを板に彫初めしは、天明六七年頃にして、その全部出來したるは、文政五年にして、その間三十年餘り五六年を経たりとあり。

そも、鈴の屋集に載せられたる、和歌文章等を按ずるに、その用意の周到にして、剪裁の功を経たる者なる事は、更に云はむは愚の事にて、決して凡庸の企て及ぶべき所にあらざれども、その文の最も見るべきを、今讀者の爲に之を便せば、その彫琢修飾せられし、鈴の屋集の文にあらすして、反りて直日靈玉勝間などの、淡泊近易なる中にあり。そ

の文の輕快美妙なる事、誠に一種の體を成せりといふべし。今その文例を示せば左の如し。

述 懐

昨日は今日の昔にて、はかなくのみすぎにすぎゆく世の中をつくづくと思へば、あはれわが世も幾程ぞや、手をとりて數ふれば、はやみそぢにも餘りにけり。命長くて七十八といけらむにて、だに、早くなれば過ぎぬるよと思へば、まだよごもれるやうなる身も、行先き程なき心地のみして、心細くぞおぼゆる。かくのみはかなく、心なき木草鳥獸の同じつらに、なにもなく、明しくらしつゝ、生ける限の世を盡して、徒に昔の下に朽果てなむは、いと口惜しく、いふ甲斐なかるべき事と思ふにも、萬にいたりすくなく、拙き身にしあれば、何事をし出で、かは、世の人にもかすまへられ、なからむ後の世に朽ちせぬ名をだにと、いめましと、いと、人に似ぬ愚さへ、取添ひて、かなしく心うかりけり。さりとては、た身をえうなき物に、はふらかしつべきにもあらず、かくのみ拙く愚なる心ながら、何業にまれば、怠なくわが心に入れて、勉めたらむに、遂には一つのゆゑづけて、なごめにし出づる節もなきかなからむと、いな頼みに懸りてなむ。

螢雪をわつめてふみ讀みける

唐土のふる事

唐土の國に、ひかし孫康といひける人は、いたく學問を好みけるに、家貧しくして油を得買はざりければ、夜は雪のひかりにて書讀み、又同じ國に車胤といひし人も、いたく書をよむ事を好みけるを、これも同じやうに、いと貧しくて、油を得ざりければ、夏の頃は、螢多く集めてなむよみける。この二の故事は、いと名高くして知らぬ人なく、歌にさへなむ多くよむ事となりける。今思ふに、これらもかの國人の例の名をむさばりたる作り事にぞありける。その故は、もし油をえ得ずば、よるくは、ちかぢなりなせの家に物して、そのともし火の光をこひかりても、書はよむべし。たとへそのわかり心にまかせずば、月なりとも、螢雪にはこよなくまさりたるべし。又年の内に雪螢のあるは、しばしのはどなるに、それがなきはどは、夜は書よまでありけるにや。いとをかし。

宣長又別に一の功を奏せられしは、從來國學者と稱へらるゝ者、和歌者流と黨を分ちて相輕侮し、甚しきに至りては、氷炭相容れざる事ありしに、宣長大にその弊を知り、初山踏の中に歌學と國學との互に關係ある事を論せられ、大に學者を感發せしめられたり。こ

れより國學者も歌文を兼習し、和歌者流も又歴史法制等の一般を窺ふ事となり、以て兩者を調和するに至りし事これなり。是一預事なるが如しといへども、その實大に文學の進歩に關係ある者といふべし。

享和元年、七十二歳になりし時、人々の請の默しがたくて、再京都に上りて四條にをらる。かくて、古今の書をも説き教へられし時などは、臺閣縉紳皆敬服して來聽せらる。又某々貴顯の殿にも招かれ、いとかしこき御歌をも賜はりしなど、千載の後までも、人の愛で羨み聞ゆべき事なり。曾て攝政殿下の命に依り、著書駁戎慨言を呈す。まかして其の書遂に叙覽に入りぬといふ。宣長の學は、荷田加茂契冲等の志を嗣ぎ、且これを大成せられたるものなり。故に世の學者東應真淵宣長を稱して三大人といひ、後平田篤胤を加へて、四大人と稱し、共に明治昭代の恩澤に浴して、贈正四位の榮典にぞ預らせ給ひける。

享和元年六月十二日、松阪の家にかへり、その年の九月十三日に、太平翁の別莊にて、人々と共に月を見給ふ。これを大人の終の會にはありける。この月の廿九日に、年七十二歳にして歿せらる。遠近の門人集會し、禮を厚くして、松阪なる山室山上に葬る。此所はかねて自石碑を立てられて、

今よりははかなき身とも嘆かじな千代の住家を求め得つれば

山室に千歳の春のやどしめて風にしらぬ花をこそ見めと詠みおかれし所なり。遺命によりて、墓標には松櫻の二株を植ゑ、前に本居宣長奥墓と石に誌せるは、大人の自筆にかゝれしなり。後に門人私に諡して、秋津彦美豆櫻根の大人といふ。大人早くより家を二つにして、醫業は實子春庭をしてこれを繼がしめ、國學の家は養子太平をしてこれをつがしめたり。大人持論あり、一首の歌にあらはして曰はく、

家のわざなおこたりそね風流士の歌は詠むとも書は讀むともとなり、是れその生涯、醫業を廢せざりし所以なり。大人殊に櫻の花をめで、自の像を人の畫きたるに、

敷島の大和心を人とはい朝日に匂ふ山櫻ばなど書き給ひしをはじめ、櫻の詠歌は數多あるが中に、春は満山花といふ題にて、

見わたせば花より外の色もなし櫻に埋むみ吉野の山とよまれ、又夏の頃、春の櫻を思ひて、

あつくとも櫻の花の水無月に咲く世なりせば風は待ためや、又秋の頃、

櫻花かなしき秋の夕暮に散らば命も露と消ぬべし、又冬の初に、

なごかくはちりし櫻ぞちらざれば再匂ふ菊もわりけりなど、四季の時々にも、櫻の事を忘れ給はで、その歌を詠みたまへるは、實にこの大人の御心は、常に櫻の花にぞ有り

るけむされば瑞櫻根の大人と諡號し奉りしも、うべなる事なりかし。借又宣長常にいへらく、凡學びの道は、公なる者なればとて、縣居大人の説にても、その誤れるは解直さむこそ、則これわが師の心なれ、玄かのみならず却りて師を尊ぶ道にこそ、あれど、かくて教子等にも、よき考の出來らむには、必吾説になづみそ、わがわしきゆゑを言ひて、よき考を弘めよとしめし給ひ、すべて秘事など言ふ事、學の道にはなき事ぞと、物にもしるしおかれたる、廣く正しくすがくしき心おきて、又類なく尊きことをかき、今その著書を左に示さむ。

神代正語	神代記 菅華山 蔭	古事記	歷朝詔詞解
石上私淑言	馭戎慨言	出雲國造神壽後釋	鉗狂人
直毘靈	大祓詞後釋	玉くしげ	玉匣別記
紐鏡	字音假名用格	詞の玉緒	字音假名づかひ
葛花	手向草	阿刈霞	古事記傳
紫文要領	天祖都城辨々	初山踏	御國辭活用抄
手枕	おもひ俱佐	櫻三百首 一名枕の山	古今選
國歌八論 斥非評語	玉葎	源氏鈴の色音	萬葉集追考

玉鋒百首	水草の上の物語	玉賀都萬	仰瞻鹵簿長歌
改萬葉集	地名字音轉用例	疑齋辨	答問錄
本居系圖	美濃の家づと	同折そへ	さき竹の辨
源氏玉の小櫛	萬葉集玉の小琴	後撰集詞のつかねを	真曆考
意字郡古文解	菅笠日記	漢字三音考	古今集遠鏡
結すてたる枕の言葉	家の昔物語	國號考	草菴集玉箒
草菴集續玉箒	微の言の葉	紀美能米具微	鈴廼舍集

第二章 國學完成の時期

この期間は、則國文學完成の年度にして、本居贈正四位の逝去せられし頃より、橘守部の遠逝せし嘉永二年迄とす。實にこの期間は、國文學隆盛を極め、且完成を得たるものなり。第一期におきて發明せし事どもを、大に辨論して修正増補し、國語をして歌學上などの小部分に屬するものたらしめず、獨立的一學科と認めて説き去りぬと云ひつべし。本居春庭義門法師等は、表面上他に正業あるにもかゝはらず、殆國語を以て本領とせられた

る者の如し。又終には、伴信友等の如き考證學者を出し、歸納的學説を以て、第一期にその基礎を成せる諸説の當否を考證せられたり。音韻國語國文等の學におきても、また大に精細に亘りて、まづは完全といふべきもの出でたり。今これを概説すれば、伴蒿蹊の國文世々の跡、譯文童噺、上田秋成の靈語通、冠辭考、續貂、村田春海の假字拾要、和學大概、五十音辨、誤假字大意抄、字鏡考、證清、水濱臣の語林類葉、本居春庭の詞の通路、詞の八衢、石川雅望の雅言集、寛狩谷掖齋の箋註和名類聚抄、鈴木朗の言語四種論、雅語音聲考、希雅、活語斷續、講、平田贈正四位の古史本辭經、神字日文傳、伴信友の假名本末、動植名彙、橘守部の五十音小説、助義本義一覽、てにをば、童蒙訓、短歌撰格、長歌撰格、文章撰格、義門法師の友鏡底の影、山口菜、おを、輕重義、活語雜話、活語指南、玉緒操分、和語說略圖、奈摩之奈、差出の礫、磯の洲、先、黒澤翁滿の言靈のしるべ、林國雄の詞の緒環の如き、皆第一期間における諸學者の説を基礎として、その遺業を精確にせられたるのみならず、今日の學者も信據しつゝある卓説も多かり、則第一期は事實を本とし、第二期は之を確むるのみならず、その背裏に屬する事をも攷究せしものなり。今此の期間における諸學者の小傳を左に擧ぐ。

大塚嘉樹

二三九一九四

嘉樹は江戸の人にして、通稱は市郎右衛門、字は子敏、蒼梧又老邁と號す、幼にして學を好み、詩文をよくせり、中年より本邦の傳記を獨習し、遂に律令等の書を崇み、有職故實を以て子弟を教へ、その聲譽遠く聞えし事、伊勢貞丈の上に出づと云ふ、故に従學するもの甚多かりき、享和三年六月二十九日、年七十三にして歿す、淺草の本覺寺に葬る。嘉樹常に謂へらく、古より有職故實を以て稱せらるゝ者、多くは皆學識に乏し、故にその著述世に傳ふるに足るもの少し、嘆かほしき至りならずやと、すなはち憤勵して、和漢の學を兼修し、博く經史古典に通じ、和漢を申貫して、鈴粟に従事す、故を以てその考證甚精確なりといふ、著す所の書は左の如し。

- 得長壽院考 分類官職考 伊雜伊蘇兩宮考 六位九級年階考
- 儀同三司考 水干着用并名目考 國司國造考 熨斗目名義考
- 文飾私考 當色考 正從濁音考 一斤染考
- 喪服互異考 紫古今異同考 魚綾考 麴塵黃櫨染考
- 笏考 直垂私考 綾紋考 中書侍從帶劔考
- 大刀襖考 閏月稱後月考 古實考 神前帶劔考

- 叙子考 菅公眞影服飾考 端午幘冑考 關東坂東考
- 藥玉考 采女與舞妓格別考 尺度考 俗稱年忌厄年考
- 度地一步考 鉤點引愚考 魚竜雀馬褶解 京師條路圖解
- 坊保町圖解 木蘭地辨香色解 立蔭解 八坂瓊之曲玉解
- 流内外圖解 禁秘抄小上臈句解 職原抄准三宮大臣之條細解 勘解由字義
- 職原抄參議篇年給二合解 位署式補義 花押之稱謂并名目釋義
- 古稱數月義 五節名義 馬事舊儀 驛鈴之圖并事義
- 八講會之義 黃金名義 久之字義 今義解獨案内
- 同姓不娶之義 伊勢家裝束 百官相當略 百療訓要抄別註
- 女帝子爲親王辨 十二位官位相當略 六位藏人臈斷 内待司准位等差
- 百寮訓要抄官位相當略 叙爵稱謂
- 位署式或問 無品親王無任官例不審 職原抄學館院別當條王氏之疑辨
- 職原抄准大臣條中本補訓點 職原抄學館院別當條王氏之疑辨
- 檢非違使篇副注 深窓秘抄傍註 傳奏次第 子孫襲職例
- 現任公卿論 冠服沿革記 服飾正誤 服飾類聚

裝束圖式補正	服色部類	服色名目類聚	服色名目聚類附錄
烏帽子物品	四位人着紫指貫否	扇之由來	續平緒傳書并唐組
慶賀笏記	笠車輓行圖說	雜衣四條	帶所要品
卷櫻故實	淺沓裏無等臆斷	未類物品	代與世之差別
水干傳書	歲時故實大概抄	狩衣種類	几帳制度
左右尊卑辨	乘輿品目	事物稱謂	刀劔略記
足袋制作	懷刀舊制	綿甲	年賀贈物名目抄
近世紹運略	新造中殿倭畫新歌	公方之稱謂	荒海障子由來
宮殿之稱	源平武將分派略圖	賢聖障子辭論	本朝四姓甲乙差別
帳臺之間	公家諸法度注釋	赤木机制作	歷代將軍略譜
寛政改元雜事	國郡大小名義差別	花押子細	僧政官位相當略
僧徒官位提見	僧徒官位呼名并准位牽合		角大師眞影漫談
洛東大佛殿曲祿紀事	白馬節會拜見記	死地觸穢有否辨	良家子說
初學入門之日時	まゝならぬ	龍九子異同說	秋雨の燈友
喜天美見具佐	貞丈翁赫虎	すてられもせぬ物語	昌平漫筆

駿臺遺老話 駿臺志 駿岳隨筆抄 駿岳琥珀
 橘翁文章 蒼梧隨筆 蒼梧叢書

荒木田久老 二四〇六九三

久老は加茂贈正四位眞淵の門人にして、幼より古典を攷究せり。家伊勢内宮の權禰宜なり。父は外宮の祠宮度會正身にして、外祖父秀世の嗣子となり、權禰宜の職を繼ぎて主殿と稱す。後故ありて實家にかへり、名を中書と改む。後更に荒木田求馬久世の嗣子となり、久字を襲ひて久老と改む。内宮權禰宜に補せられ、從四位下に叙せらる。五十槐園は、その家號なり。本居宜長翁と異曲同工の開えあり、遂に大家を以て稱せられたり。
 久老最力を萬葉集に用ひ、槻の落葉を著せり。その人と爲り、豪放不羈にして、常に青樓に上りて遊宴日子を經過し、酒池肉林以てみづから娛めりといふ。或時醉中忽然掌を拍て曰はく、古來未發の考を成せりと、則人に誇りて曰はく、世の古典古語を解する者を見るに、机上若干の書籍を置き、沈案苦思以てこれを解せむとす。これ豈よくその眞想を得たりとせむや。わが學はそれと異り、遊宴妓婦と戯れ、盃盤狼藉の間において、未曾有の名説

を發見す、これ眞の活考にして死者にわらず、世人の學問は多くはこれ死物のみとすなはち意氣甚昂然たりきとなり。

久老常に徒を聚めて古典を解く、從學するもの甚多かりきとぞ。凡その説く所、古人の跡を踏まず、依然一家を成せり。その唱ふる所の學説は、本居贈正四位の説に異なるもの多し。贊をこの門に取る、實に縣門の一巨擘なりといふべし。詠歌はその專とする所にあらざれども、又一體の妙あり。文化元年八月十四日、享年五十九にして歿す。著書は左の如し。

萬葉楓の落葉

日本記歌解

祝詞考校訂

續日本後紀歌解

祝詞考追考

古言清濁辨論

難波舊地考

酒之古名區志之考

信濃漫錄

竹取翁物語之解

播磨下向日記

校註肥前風土記

校註出雲風土記

校註豊後風土記

播磨漫錄

五十槻園集

伴蒿蹊 二二九三九六一

蒿蹊は、名は資芳、閑田子と號し、又蒿蹊といふ。近江國八幡の富家の子息なり。その人となり淡泊にして、物と競はず。幼より文學を好み、京都大佛の邊に住す。幼にして母に別れし

かば、後年勸孝辭を作りて志を述ぶといふ。有賀長伯の門に入りて和學を修め、後武者小路實岳の門に入る。實岳の歿後、獨修して以て古學を研究し、遂に一家を成すに至れり。嘗て漢學をも修めしかば、和漢の書に通じたるが、中に就て國史に精しく、國文に妙を得、又和歌を善くせり。こゝを以て、その名聲一時に揚れりといふ。當時京都において、蘆庵澄月、涌進蒿蹊を、和歌の四天王と呼べり。その居を閑田廬と號す。故にみづから閑田子と稱し、優遊著作を事としたれども、今世に知られたる者は甚少し。

蒿蹊、又佛理を究め、林泉院六如上人と方外の交を結ぶ。上人曾て詩を作りて之に贈る。その時に曰はく、老來幾部著書成、祇道屏居遂惰情、最是紙田閑不得、長遭筆未四時耕と。蒿蹊則喜びて曰はく、この詩は予の實錄なりと。その人となり篤行温順なりしかば、妙法院の宮殊に寵遇せられたりといふ。文化三年七月二十五日、年七十四を以て歿す。洛の華頂山に葬れり。この人の散文は、特に今の人に賞賛せらるゝものあり。その著國文世々の跡の如きは、日本文の沿革を示せる者にして、國文を綴るもの、一讀すべき書なり。今その文例を左に示さむ。

主將人を知るべき事

家國を治むる人の、むねと心にかくべきは、人を知る事にしあれど、いとも知りがた

かるべきものにこそあらめ、明智が軍の時高山右近といふ人、山崎の天王山にいはみてあられしに、その内に甘利何がしといふをのこつと前に出でていひけらく、年頃他國の人をも召し出で、よき祿をたうび親みもてなし給へるに、己は不用なるものとおほせばこそ、御目をもたうべらで、數に備るのみに侍り、もし今日の軍に、ゆざましきはたらきをもし侍らば、主の御目くらきを現すに似たり、さりとておくれたる振舞ひならむには、親のため口をしき子にて侍らまし、君のためにつたなからむや、親のためにいさましからんや、御定めうけたうべらまはしといはれて得答へず、その顔打守らひてあるに、よしや君の御目くらしといふ人はありとも、身にかなひたる手柄をもし侍らば、よも御かうじはたらべらじとかけりゆきて、やがてよき首三つ四つとりてかへりまうで來れりぞ、凡戰を事とする代のもの、心地は、かの國の文にもかゝるさまになむ數多見ゆめる。

又同じ代に加藤清正ぬじは、あまりに人の知りがたきにわびて、相法をさへに學ばれたりと聞ゆざればにや、その内に有りし古つはものゝ老のゝちに語らく、おのれもどより戰にこりて、軍に出づる毎にこたび命いさなば、必身しどきなむとのみ思ひしを、その軍はつれば召しいで、そのふるまひゆざましかりき、此のは、たらきは

よくしたりなをほめ給ひ、何くれとたうべられ侍りしかば、その思にひかれてや、今一たびこれに報いんとて、心ならず出立つ。かくてこの殿うせ給ふまで、終に得しぞかす過ぎしを思へば、わが心をしりて、よく欺き偽りつかひ給ひしなりけり、今ぞ心得侍りぬると笑ひきとなむ。このぬし、から國にて、虎をしもうち給へるたけ、くしさは、昔の巴提使にひとしく、君のため心を盡し給ひぬるみさを、その代に又たぐひなく聞ゆるを、人をしり心をを用ふるかたにさへかしてかりけるは、いともめづらなりや。

この他、閑田次筆、近世畸人傳など見るべき文章少からず、されども文法上に聊づゝの瑕瑾は免れがたし、今その著書を左に擧ぐ。

- | | | | |
|-------------|-------|---------|-----------|
| 國文世々の跡 | 詞辭要解 | 譯文童論 | 萬葉類葉代匠記句解 |
| 萬葉類葉代匠記句解續編 | | 津島祭の記 | 庭の訓抄 |
| 増補題字要解 | 國家八論評 | 大和物語抄補翼 | 近世畸人傳 |
| かくつちのあらび | 門田の早苗 | 勝地吐懷編斷頭 | 閑田耕筆 |
| 閑田次筆 | 閑田文章 | | |

加藤千蔭 二四九七八六八

千蔭は、加茂大人の門人にして、姓は橋、通稱は又左衛門なり。芳宜園、耳梨山人、逸樂窩、江翁等の號あり。父を枝直といひて、幕府の町與力なり。千蔭初父に學びて歌をよくし、後に縣居の門に入りて、皇朝の學を學び、歌文と筆札とを能くするを以て、門下に稱せらる。後父の職をつぐに及び、吏務叢委すといへども、猶且歌文を研究して怠らず。天明八年病を以て職を辭し、力を好む所に肆にし、老いて益その業進みたり。八町堀に住み、學徒に教授す。門下集る者數百人に及ぶ。菘花と名づくる集ありて、世に流布し、且愛讀する者少からず。千蔭は、最本邦古言の義に精し、官その著す所の萬葉集略解を上らしめ、賞して銀錠若干を賜ふ。此に於いて名聲益著れたり。兼ねて能筆を以て稱せられ、松花堂又入木堂の風を摸して一家をなす。又畫を建部綾足に學ぶ。揮ふ所は扇頭紙尾といへども、人争ひてこれを珍重す。天明八年老を告げて、家を子某に譲り、益學問の道を勤め、その名海内に轟きぬ。こゝを以て諸侯の招きも多かりしが、中に、濱田侯最この人を慕はれけり。文化五年正月、墓參のをり、橋千蔭の墓と自筆にて題せし片紙を、回向院の住持にわたして言はるゝやう、吾なからむ後はこれにて表し給へかし。生前に好まぬ事を、身後なりとて誣ふるは宜しからぬなと、いひて、托しおきて歸られけり。とぞ、かくてその年九月二日に歿す。年七十

二なり。回向院に葬る。

千蔭の文名は春海に下らず。その文章と和歌とは、うけらが花に載せられたり。今これを春海のに比較する時は、漢學の力の薄ければにや、稍遜色あるが如しといへども、尙決して一家の文たるに耻ぢざるなり。今その文例を左に示さむ。

酒々舎に蓮を愛づる詞

大ひえうつされたる上野の岡の麓、比良の大わたなせる池水のほとりに、さゝ波や志賀さゝれ波もて名をおはせたる屋あり。白妙の不二のみ雪もさえ、あらがねの地さへさくといふなるころ、人皆涼みせむとて、そのやせりにつゞいて、高きやにのぼりて見渡せば、池の面は、紅のゆはだど見ゆるぞ。蓮の花咲きみちたるにては、ありける。おひたてる葉のひろむりたるは、宮地ゆくうま人のきぬ笠の如く、うきたるは、大庭に百のつかさのわろうだしきならべたる如く、葉における露は、白玉の五百つつせひをときみだしたるになむ似たりける。池の水清らに住みて遊ぶいろくづ思ふ事なげなり。人々衣の紐をときさけおはしまによりゐて酒くみかはす程、かの岡の木高かる瑞枝ふさこす風のすゞしきに、えならぬ香のかをり來るもたせしへなしや。かなたの岸より中島まで、長き堤をつきて、石もてつくれる橋かけ渡せるは、もろ

こしの西の湖とかいふめる所のさまかけるかたに似通ひて、はるかに行きかふ人の袖の匂ひさへなづかしく見ゆ。

あるじは吾が國ぶりの歌つくり、ふみ見る事をしも好めるが上に、こと國のふみをさへにあした夕の友としければ、さるかたの友垣にしもともしからず、唐詩好める何がしのはかせは、さにぬりの小舟にからをとめのせて、この花をらせまく思ひ、日の入る國のますらをの法に心をよするは、是れぞこの上品のうてなにあれ出でたらむ心ちするなぞいひあへりけり。人々心々に歌によみ出づれば、たいもあらず。

なべて世のにごりにそまて住む人の友と見るべき花ぞこの花かくて上野の岡の入相のかね、木の間ののぎてひきわたれば、みさかりにひらけたりし花の、又ふゝめるさまに立ちかへりたるも、あはれふかゝるものから、をち方の梢の鶯すらねぐらもとむるものをとて、人々わかれかへりぬ。

隅田川のはどりなる石濱の庵にて雨の中に作れる文

は月はつかあまり、秋のけはひのなつかしくて、例の隅田川のはどり、石濱のいほりに行きて宿りぬ。在明の月の匂も、きりたちわたる曙のさまも、所から世ににぬもの

から、こゝは雨のをぼふる日なむことにあはれば深かりける。もとよりかやふげる庵なれば、音だになくて、軒のしづくのみつよくおちそむるより、籬の萩の下葉の色付きたるが、ほろゝとちるもあはれなり。水の面は、うごくともなくて鏡の如くなるに、雲のこきうすきうつろひて、かつ浮びかつ消ゆるみなわにこそ、雨のけはひはしるかりけれ。みをの一すぢは、さしひく汐にもまじらで、どはに花田の色に流れいに、沖に出づゆり、これや水上の秩父の山のまし水の落來るならむ。打向ふ岸のはり原のみ、こき墨がきの如くなるが中には、はゝその黄ばみたるは、さすがにはのかに見えて、そのひまゝより長き隄のみえわたるに、つゝみのをちなる梢は、やうゝにうす墨もてかきけちたらむが如く、いとしも遙けきは、たいなびかぬ煙とのみぞ見ゆる。

こゝかしこより鳥の飛行きつゝ、ねぐらの鶯のつばさ重げにおき出で、河の瀬のまこもにおりたてば、みさごのむれきて、水の雨に浮べるもをかし。上つせより筏しの筏笠きて、棹を筏の上によこたへ、おのれたむだきて、おもふ事なげにてをり、筏は水のまにゝ流れ行くもしづけし。渡守舟さし出せば、大笠かたぶけてわたり行く人の、やがて堤をあるくさまも、繪によく似たり。すべて一日のうちに、筑波ねより吹き

おろすかと思へば、沖よりも風通ひ来て、岸の木立も長き堤も、あるはわらはれ、あるはかくれて、かぎりなき青海原にむかひたらむやうに、おぼゆるをりも有りけり。かくてや、夕ぐれ近くなり行けば、むら鳥のおのがじ、ねぐらもとむるに、鷹の一つら二つらわたり行くなど、えもいはんかたなし。暮れば、てゝも、猶行水の色のみ、どほじろくのこりて、川ぞひ小田にいはへる、みくまりの神のみ火の、海人のいざり火ともいふべく、かすかに見えわたるもあはれなり。

秋よけてこさめをぼふる隅田川たが墨書のすさびなるらん

又著書を擧ぐれば左の如し。

萬葉集略解

新百人一首

古今集序考

大歌所御歌記

月並消息

ゆきかひぶり

うけらが花

新撰月百首

香取日記

玉川紀行

上田秋成

二三九二八八

秋成は、加藤美樹の門人にして、通稱は餘齋無腸と號し、鶉乃舎といふ。大阪の妓女の子に

して、父はかの生田傳八なりと云ふ。四歳にして孤となり、上田氏に鞠育せらる。故に常にわが身の賤しきを耻ぢ、遂に家計を濁ぎて千金を得、以てこれを書籍に代へ、醫道を研究して、上田東作と號し、醫を以て生業となす。然れども、性狷介にして人と合はず。故を以てその技傳れず。年三十八の時、火災に罹りてその居を失ふ。こゝを以て京都に徙り、後幾くもなくして攝津の長柄に行き、復京師に還る。既にして城中の熱鬧を厭ひ、南禪寺中に住す。かく腹その居を變じたるを以て、自鶉乃舎と號し、又無腸或は餘齋と號せりとぞ。秋成、本邦の學を好み、加藤美樹を難波に訪ひ、やがて門人となり、和文和歌を修む。學成りて別るゝ時、美樹歌を贈りて、東路のふしの芝山しばしになれても思ふわかれするかなどよめり。秋成博聞強記にして、眼觸れば、則心に誦を成す。故を以て家に書籍を蓄へず。室中只一二の茶具あるのみ、而して最和文和歌に長じ、文才ありて、戯作多し。興至れば數十百篇、口より出で、輒文を成す。こゝを以て名聲大に聞ゆ。然れども、妄りに人と交らず。又多くの弟子を養はず。その著述する所、概沒業して世に公にする事を好まず。一日著す所の萬葉集訓詁及筆記八十余卷を出し、傍人に命じて、これを廢井の中に漚めしむ。その友村瀬考亭、聞きて其の故を問ふ。秋成笑ひて曰はく、一時の漫筆未だ盡さざる者多し。然れども、今や老衰、刪修の功に就く能はず。未定の稿を殘して、後世を誤らんよりは、これを

井中に投じて、わが魄を清むるに若かずと。その行爲概斯の如し。故に著書の世に傳來せる者甚少し。秋成最も茶事を好むを以て、みづから風爐茶甌等を製す。後世粟田口窓と稱する者は、その創造にかゝる者なり。曾て手づから茶具數品を作りて、妙法院の宮に献す。皆その精を極むといふ。

秋成曾て七十路を死期となすとて、預め墓所を南禪寺中梅樹の下に設け、棺を作り、寺僧に托し、平生著す所の書及藏書を寺中に納めしめ、長塚に餘年を送られけり。太田南畝曾て秋成の志夜の室の記を作れり。その詞に、噫翁無用於天壤間、天壤間亦無用於翁無用之用。知者希矣。白日昭々、長夜冥々、昭々之中、冥々如此、冥々之中、亦有昭々者否、是吾獨奇翁、而人所以不奇翁也。その弟子僧昇道等、交歌を集め、名づけて藤篋冊子といふ。刻して世に傳ふ。文化六年十一月廿六日歿す。年七十八なり。洛東南禪寺中西福寺に葬る。

秋成曾て妻を喪ひ、井臼を操る。本居春庭これを聞きて、爲に熬米數斗を贈る。秋成大に喜び、これを湯中に漬し、喫して以て飯に代ふ。盡くるに及びて、更にみづからこれを製し、以て薪炊の勞を省くといふ。今その文例を示せば左の如し。

西行法師

(前略)御館に入らせられ、御裝束改めさせ給へば、やがておぼとなぶらわまた照しか

やけたり。今日の道中にありし法師まゐれとて、おまし近き所の一問なるすのこに召されたり。大將殿見おこせ給ひて、昔はこやの山の御宮づかへせし人、世をはかなき者に思成して、身は黒くやつしたれど、月花のなげきのはまれは、物の心なき東人さへ聞知りたるぞ。文字の數だに歌とのみ思ひしも、かうさし向ひては、武士のまけじ心もあらずなりぬるぞ。八百日行く濱の眞砂の中には、玉とて拾ひをさめたらむを、語りさこゆべくぞおほせ給ふ。いみじう畏りて、思懸けず大樹の御蔭にまゐり侍れば、いともかゝやかしきにぞ、唯夢路をたどるやうに侍りて、聞えまつるべき事も侍らず。さとき御眼に見顯はされ侍ること、いとくありがたく侍れ。伊勢の海、千廣の濱におりたつならひ侍れど、かひあることも打出で侍らぬには、これとて棒けまつるべくもあらず。君にもかねて學ばせ給ふとも、洩聞きたてまつれり。天の下まつりごち給ふ御うつはもの、おほいやかなるにおぼしよらせ給ふには、かけても及ぶまじきをさへ思ひ知り侍るになむ。大空に羽うちかけて飛ぶ田鶴の聲、霜枯の淺茅がもとの虫の音、いかで取りなめて聞ゆべき。あなかしこと申す。打ちしづませ給ひて、弓とる人のもとの心の武さには、よむ歌も直くあからさまと聞くは、誠にか歌は武士の荒々しき心には、讀みうつしうまじきものに、宮人達はさだし給へりと

や、軍に出立ちて笛つゝみの音、馬のいなゝきは物とも思はぬを、この三十あまりの學には、心のおくるゝはいかにぞや、こは畏き御心にもねばし、惑はせ給ふ者か、古の代々の帝は、馬に鞍おき、弓矢とらして、軍にたゝせ給ひし、そのおぼんをよみ見舉ぐれば、武く直々しくしらべもいと高しとこそ打聞き侍れ、いかで歌よまむとては、益荒雄心を取隠し、おてになよびかに讀みうつすべく、此の道のいみじき煩なれ、君が御心の敏くたけきまゝに、うちまねばせ給はむには、今の世の人誰かは立ちあへ奉らむ、三尺の劔をとりて、大風起り雲飛揚すと、うたひ、槊を横へて鳥鵲南すと咏せし、君たちは、鞍の上にて、文に遊ばせ給ふならずや、玉造らがいみじきをすりみがき、染殿のやしほの色も、はかなき目うつりばかりは、何にかは、されど谷深き鶯の聲、信濃路出づる荒駒のあゆみ、いづれの道いづれの業にも、始より勝れたらむは、鬼にこそ侍らめといふ(下略)

又その著書を左に舉ぐ。

- 萬葉集目安補註 冠辭考續貂 靈語通 校補古今集打聞
- 一 痢癩談 よしやあしや 春日物語 漢委奴王金印考
- 御嶽草紙 水やり花 清風瑣言 雨月物語

夏夜の露

諸藝聞耳世間猿 くせ物語

村田春海 二四〇六八六

春海は、加茂真淵の門人にして、姓は平、通稱は平四郎、字は士觀、春海は其の名あり、春道の二男にして、兄を春郷といひ、父子三人共に縣門に入り、春海最名を得たり、錦織齋、錦織乃舍、錦織翁、琴後翁などの號あり、初、漢學を修めて、詩文を能くし、又蹴鞠に妙なり、後縣門に入りて、本邦の古典を學び、和歌を能くす、その文章に至りては、紀氏以來の能文家を以て稱せられ、敢へてこれに敵するものなかりきと云ふ、これ畢竟漢學に心を潜めて、服中英、翰士寧、皆川淇園等を師とし、吉田學儒、安達文仲等と交り、博雅淹通にして、學和漢を兼ね、その文を作る、法則を唐宋八家にかり、詞をわが古文に採り、取捨折衷して、別に一家の體を成すを以てあり、然れども、性豪放にして、理財に疎く、身富豪の家に生れ、家兄に代はりて家を督し、終に家産を蕩盡して、これを顧みる事なし、專心を文學に用ひ、老いて益精しく、加藤千陰と名を等しくし、俱に江戸の宗匠と稱せらる、故に門下となりて業を受くる者甚多し、本居大人、常に曰はく、都に歌人、蘆庵あり、東に文人、春海あり、わが企て及ぶべき

所にわらずと、以てその能文なりし事を知るべし、今その文例を左に示さむ。

怜野集のおくがき

事をまうけて歌よむ事は、其のためしいとひさしかりき、はやく萬葉集にも、さるたぐひの歌見えたり。さて古は、歌人の常にあすわざには、あらざりしを、歌合といふ事は、しまりてより、やうくひろまりにける。しかはあれど、宇多醍醐の御時より、花山一條の御時までの、もろくの集せも考ふるに、題詠の歌せも、数おほからぬを見れば、その世々の歌人たち、これをば尙、かたへのわざとなしけるにこそありけらし。それより世くだりて、堀河の御時より、こなたは、世々に題詠さかりになりもてゆきて、今の世となりては、大方の歌人、題によるにあらざれば、歌はよむべきものとも思ひたらずなむなりたる。

抑今の世に、題詠のみもはらとなりたるは、末の世のならはしにて、古にはそむくに似たれど、今にありては、えも捨てがたきに、ひとつの故あり、そはいかにぞといはんに、古は人のこと、ひも、歌の詞も、そのけぢめある事なくて、よろづの事わざ、すべてみやびやかなれば、見るもの聞くものにつけて、昔歌にいふべからぬはなし。かゝれば、折にふれ事に、あひて、よみ出づる事やすかるべく、さてまうけてよまん事は、稀にぞありぬべき。今の世には、人の物いひさどびて、舌たみたるくちつきのみおほければ、歌よまんとするには、先よこなまりを正し、ひがめるをあらたむるに、あらざれば、なしがたく、萬のことわざも、古とは異になり、來ぬれば、歌によみ入るべき事は、た少し、よくそのみやびかならむを、擇ぶに非ずしては、なしがたし。これをみだりにとりなせば、いかでか歌とはなるべき。さるは見るもの聞くものにつけて、たゞによみ出でむことは、かたき方にて、まうけたる題によりなむは、なしやすく、おだやかなるべし。

今の世の人、題詠のみもはらなす事となりぬるは、おのづからなるいきほひになむありける。この趣を深く思ふに、題詠といふ事、古にありては、かたへのわざなりといふべく、今にありては、歌よむは、しだてなりとこそいふべけれ。たとひ只管に古を慕ふ人とても、歌學ひせむには、このはしだてによらずしては、いづれの道をか、はふまん。然るを口賢しき人の、われは古をこそ學ぶべけれ。題詠は後のならはしなれば、従ひがたしといひて、強にいひけたんとするは、よく事の心をもくみしらで、ことわりをおして、そらにのみはしりていふなれば、いとくうけがたし。

こゝに清原雄風ぬしは、わがたまあへる友にて、年比、月にあさけり、花を弄びて、世々

の言葉の色をも香をも、つみしりたるぬしなるが、われに語りけらく、にひまなびの人をみちびかんには、必題詠によらしめん事は、さらに論じいふべき事なけれど、今の世の人のたよりとなして、とりあつかふめる明題歌林の類、これかれおほかれ、今みないかにぞやおぼゆる題色も、まじり、又その歌色も、題の心をわかさむ爲には、さてもありぬべけれど、あまりに品下れる歌の見ゆるは、心ゆかず、物の心得たらん人は、よく擇びてこそとるべけれど、事もなし、かれにひまなびの輩、さばかりに品下れる歌色も、おぼはずに口馴れ行かば、よみ出でん歌のおのづからあしきまになりなむこそいとほしけれ、いかで題をも歌をも、一わたり擇びて物せばやと思ふは如何にといへり、この事わが思ふ所なれば、喜ばしくてそゝのかしいふことたびたびなりしを、この頭をの擇びなりぬとて見するを見るに、先その題はふるく出で来るをば、總べて殘さず、後なるをば、今すてたるも多し、又題の文字は、もと詞の爲にかりたるものにて、心かなはざるもおほければ、僅あらためたるもあり、歌はもとよりその題につきてよめるは更なり、さあらぬ歌は、古今六帖の例にならひて、題をおるしにて、歌はさらうと、なして、あはせ載せつ。

大方の歌のえらびさまは、ふるきは、その詞耳遠からで、すがたたけあるたぐひをとり、後なるはその調なだらかにして、心やすらかなるくさはひをぬきいでたり、これは新學の人を、あらぬ姿に口馴れしめじとのこゝろばへなるべし、さはいへど、これを私の好には任せずして、公にも私にも、世々の歌人のえらびおける集色ものうちなるをのみとりて、古の人の拾ひ波まじ家集打聞などの類より、ことさらにとりいでたるかな、さはまめなる心より、おしたちたるわざはえせじと思へるにこそ、かくつとめたるを愛で、芳宣園の翁が、ふる草まじりとかいひけんふる言の葉によりて、おもしろき野になすらへたりしは、げにつきく、しうこそおぼゆれ、いやこの集、世に行はれましかば、にひまなびの人々の言葉の林わけ入らんには、これをしをりとなさずしては、今はた何にかよらむ。

白川侯、その才を愛して、月に五口俸を賜ひ、召して侍間とせらる。春海會て道を論じて曰はく、わが國の道とする所は、周公孔子の道を捨て、別に道をわが太古に取るは、われいまだこれを聞かず、故に和字はわが字にあらず、漢字を假りて我が音に充つるなり、衣服冠冕、皆隋唐の制度なり、百官有司は皆唐制を學びて、稍これを變更したるものなり、律令格式は、皆唐制を摹倣したるなり、故に和學者とは、儒者の本朝の典故言辭に通ずるをいふのみ、歌學者は、儒者にして歌を作る者をいふのみ、吾儕庸陋といへども、また儒者なり。

備にして歌を作る者なり、然るに今の和學者は、わが國別に道なきを耻ぢ、牽強附會妄りにわが古史を引き、人を欺き己を欺く、われ寧んぞこれを辨せざるを得んと。春海加茂大人の古言の教を奉ずといへども、その道とする所には従はで、持説方に其の半を過ぐる事かくの如し。又筆札を善くし、詩文等を録するに至りては、米元章の風趣ありといふ。文化二年三月、京都妙法院の宮輪王寺座主として、江戸に下向せられし時、和歌の事を以て春海を召さる。この時、加藤千蔭、書人谷文晁も亦召されけり。春海後に仙語記一卷を著して、詳にその時事を記せり。八年二月十三日歿す。年六十六なり。深川本誓寺に葬る。その王昭君を詠せし長歌は、よく人口に膾炙し、保育唱歌となりて、雅樂取調所の伶人にうたはる。その歌は左の如し。

雪まじり霞みだれて
あらましき夜床の上に
來し方を思ひ出づれば
しづたまさ賤しき吾も
小簾の内にいつかれし世は
白玉をかづらにしづゝ

夜もすがら北吹くかせの
つくづくと枕そばだて
人の世は夢なりけりな
宮姫と數まへられて
綾錦袖にかさねて
ます鏡見る面かけの

かぐはしき花のゑまひを
大君の恵の露し
思ひつゝありけるものを
寫繪はあらぬすさびの
うきふしはせんすべをなみ
遙々と出で立つ道に
消えかへり引き留めたる
曲の緒の絶えぬうらみを
をしからぬ命と思へど
春立てど花も匂はず
荒山の岩がきこもる
いたづらに年は重ねつ
國人を夫とむつびて
皮衣袖さしかへて

我ながらわれとたのみて
普くはもれじとこそは
さがなきや筆にまかする
偽を正しもあへぬ
いひしらぬ國の境に
おき添はる袂の露の
駒の上に暫しかきなす
はるけなむ世こそ知られぬ
塵の身の散りも失せなで
秋來ても紅葉も見えぬ
伏庵にわれにもあらず
思ひきや言もかよはぬ
手羽女のまどひもなれぬ
諸般せむとは

反歌

春の日の光もうとき古塚に草のみどりやいかのこせる
又その著書を擧ぐれば左の如し。

- | | | | |
|--------|------------|--------|----------|
| 神道志 | 歌苑類題抄 | 和學大概 | 齊明紀重謠考後案 |
| 假名拾要 | 五十音辨誤 | 明道書 | わかゝつら |
| 不問語 | 作文通弊一名時文摘批 | | 歌語 |
| 字合稱呼考 | 字鏡考證 | 假名大意抄 | 西土國習考 |
| 椿太詣記 | 琴後集 | 怜野集拾遺 | 錦織雜記 |
| 古人贈答歌抄 | 仙語記 | 答和泉真國書 | 筆のさが |
| 與稻掛太平書 | | | |

内山眞龍 二四三九七八

眞龍は加茂眞淵の門人にして、遠江國豊田郡の人なり、通稱五郎左衛門、幼名は市六、後に彌兵衛、敬美と稱す。年五歳の時、嬉戯常に字形を寫す。故に祖父之を鍾愛して字を習はしむ。十三にして俳諧連歌を善くし、廿一にして、賀茂贈正四位に從ひ、皇學及詠歌の道を聞

き、師より始めて山家花といふ題を興へられたる時、

櫻さく山にしづめばしらくもの深き宿とや人も見るらむとよめり、全年冬江戸に出て、益勤勉す。

天明六年正月、山陰西海に遊ぶ。蓋し出雲風土記註解、地理實驗の爲なりきとぞ。全四月歸國し、寛政元年、遠江國風土記傳を撰む。全五年五月、出雲風土記解を著し、出雲大社に奉納す。全年伊勢宮崎文庫の請により、同書を寄付したり。後、國郡郷村里の事を調査し、地名記十卷、國圖五卷を撰む。

文化四年、京師下賀茂川合神社神主、正四位泉亭越後守より使者ありて、曾て神號解二卷を、神祇伯資延王に上りたりし返謝として、染筆懷紙二枚を賜りたり。全八年、泉亭越後守より、日本紀類聚解を朝廷に上るべきよしを申越さる。依りて、全年十二月十一日より、淨書の事を起し、翌年四月八日に終り、之れを盛釘して上京し、五月朔日、越後守の紹介を以て、正親町大納言公明卿の許に出したり。やがて全卿の閲讀ありて、序文をたまひたり。乃文は公明卿にして、筆は世子實明卿なり。然るにこの御紀に對し、民間の者の姓名を記すは憚る所ありとて、撰者の姓名を記さざりしを、姓名を記して後世に傳ふべしとて、御内勅を得て姓名を記入せり。全月廿三日、公明卿より御使を以て、文函を賜はる。その中に、

先日、御噂の御本云々、さつそく御さた申入まらせ候へば、御満足さまにてあらせられ、則御覽せられ候所、御めづらしくよくいたし候ものにて、御なぐさみになり、御かんしんの御事にてあらせられ候、外にくはしき御書添のやう、御満足さまにてあらせられ候、よく所々御あせの御事と、なほ又よろしく私より申せとの御事に候。

大 け四辻大納言殿の女典侍局なり

御返事よろしく

右の書あり、永く眞龍の家寶とすべき旨、公明卿の御詞なりきとぞ。このよろこびに詠める歌、

長濱の浦のあし田鶴千代經ども雲井までとはおもはざりしをとなり。

文政二年八月廿二日歿す。年八十二なり。その著書多し。今世に傳來せるものを左に擧ぐ。

日本紀訓考 國號考 姓氏錄註 宮所記

遠江國風土記傳 出雲風土記解 日本紀類聚解 地名記

國圖

石原正明 二四二〇七六

正明は塙保己一の門人なり。その初は本居大人の門にありといふ。尾張國の人にして、初の名は、將聰喜左衛門と稱し、號を蓬堂といへり。江戸に住し、歌學を以て顯れ、かつ有職に精しく、詠草一万章に及ぶといふ。最新古今集の風體を好み、殊に後京極攝政の氣韻を追慕して、

人住まぬ不破の關屋の板びさしわれにし後はたゞ秋の風といふ歌を第一義とし、常にこれによられたりとぞ。甥正俊の尾張にかへる時、これに與へし尾張の家苞は、曾て本居大人の門人、美濃に歸へる者に、新古今集の講義をなして、美濃の家苞と命して與へしに擬へり。而して彼の美濃の家苞に反對の説を立てらる。後品川の塙氏の別莊に一年ばかり居住し、又市ヶ谷に移住し、いとかすかなるわび住ひなりしさま、その隨筆のやうにて、いとよく思ひ知らる。文政四年正月、名古屋にて歿す。年六十二なり。その著書は左の如し。

制度通考

冠位通考

宰相通考

臣連二造考

百寮補歷

江戸職人歌合

律解

尾張の家苞

勢語章句

蓬堂集

名目類牋

百人一首新抄

塙保己一 二四八〇六七六

保己一は、加茂真淵の門人にして、後に萩原宗固に従ふ、武藏國兒玉郡保己野村の人なり。故に産土の村名を以て名とす。姓は萩野、通稱は辰之助、水母子と號す。性孝慈友愛にして、事を行ふ事甚精誠なり。保己一七歳にして、明を亡ひ替となりしかども、天資強記にして、一たび聞けば、年を経れども忘るゝ事なし。十歳の時、母を喪ふ。その父縁にして貧なりければ、十四歳の時、朋友の替者を相語らひて、杖曳き連ね、共に江戸に來りけれども、確と言契れる者もなかりければ、便らむ方もなく、九段坂の上にすみつゝ、嘆き居たりけるを、旗本なる内藤安房守、退城の折から、その體を見て如何なる故にかと怪み、人をしてこれを問はしめ給ふに、二人涙を拭ひていひけるやう、おのれらは兒玉郡の者なるが、江戸にて修業せむと、本銀町わたりに相知れる人のありて、これを尋ねて上り來つるに、今はその人の行方さへ定かならねば、何處に行かむもせんすべなく、かくは泣き居るなりと答へしかば、安房守その様をいとあはれと思ひ、

我家に連れ歸り、二人を長屋に住はせて、雨森檢校須賀一の弟子となし、琴など學ばせけるが、一人の替者は心を盡して學びつれば、後には名人と呼はるゝまでに、その業進みにけれども、保己一は、絃歌を學ぶ事四年にして、一節だにならず、更に鍼法を授くれども、又四年にして一も成す事能はず、暇あれば打睡りて、何事を勉めんとせざりき。されど歌唱の詞句は、これを一聽して記憶せざる事なく、百人一首を暗んずると、人の書讀むを聞くときには、倦む事更になかりきといふ。安房守これを聞きて、いと珍しき替者なりとて、試みに學士大夫の家に就きて、その誦讀を聞かしむるに、一も失する所なかりけり。廿一二歳の頃にや、早く書きしるさせおさし書とり出で、師なる人に示したりけるに、打驚きて、御身がかまこき才もて、僅なる事に身を寄せむは、無益の事なりけり。廣く大なる志を立てよと諭し、さて問ひて曰はく、何の業をか修めむと欲し、又何の神をか尊崇せむとすると、保己一答へて言ひけるやう、讀書の業にしくものはなく、管神は博學の宗にませば、最この神を敬すとなり。こゝにおいて博くその友を求めて、その誦讀を聞かしめ、常に管神を祈らしむ。これより弦歌鍼灸の事は、更に強ふる事なかりき。法兄豊一財に富み、師を辭して、一家を立て、後數年ならずして死す。保己一、法弟を以てその後を受け、その資財を有つべきなれども、聊かもこれを顧みず。或人勸勵して曰はく、今

この金を以て人に貸與せば、年々その息三百金を得む。これ士大夫の産に上るにあらずや。且子に子を生子、息に息を生じて、年々相殖ゆれば、坐ながら王侯都君の富をいたすべし。時機失ふべからずと、保己一色を勵して曰はく、古言に渴しても盗泉の水を飲まず、鷹は死しても穂を啄まずと、われ貧困すといへども、豈貪欲の貨を望まむや、人の貨を奪ひて、その妻子を餓えしめんや、若し已む事を得ざれば、窟を滅してこれを燃燼せむのみと、兼辨これを開きて、一齊に誦訪す。保己一これが請に堪へず、且功なくして師の食を食むを耻ぢ、去りて他に行く。然れども食を得る方なく、甚究厄に陥りたり。

保己一、居を去る事二十町許の所に、麴町平河天神あり、毎朝食せずして、味爽に趨拜する事一千日、毎趨廟庭に還拜する一百回なり。家にも亦管神を祀り、毎旦崇敬して後に食す。人皆その精誠に感せざるはなし、故を以てその業を助くるもの日に多かりき。

保己一或時謂へらく、その國に生れて、その國の典故に暗くして可ならむや、吾辨なりといへども、いかでか之を成さざらむと、これより雄心ふりおこして、人知らず世に埋れたる古書どもを拾ひ集め、類聚して以て世に顯さむとぞ思ひける。さてかゝる大業をなしどげむには、數多の書籍なくてはかなはじとて、版本ならぬ書どもを始め、世に珍しきものなりせば、何書なりとも買入れむとて、書商に依頼して集めさせたり。されば種々集る

が中には、反古の類も多ければ、人々これは無益の書にこそなぞいへば、否左にあらず。書商は珍しと信じてこそ持來れるなれ、之を無益なる書なりなとて購はずば、遂には賊の珍しき書をも得がたかるべし。故に彼等の持來らむ限りは、悉これを購入れむと云へけり。されば書代の掛金多く積りぬれど、去る事には少しも心を留めざりきとぞなむ。

友人官を買ひて、みづから榮えむ事を勸む。保己一聞かず。師之れを聞きて、その言に従はむ事を勸む。こゝに初めてこれを許す。友人相喜びて二百金を贈し、則買入れて勾當に任ず。依りて埒勾當と號す。これより名聲日に揚り、從學するもの月に多く、諄々としてこれに教ふる事に倦まず。且一も秘する所なかりき。保己一人に教授すといへども、兼ねての志は遂げむと思ひ、常に五六人の書讀むものを傍におき、日毎に古書を二三葉づゝ書寫さしめ、數千葉と積るにいたりて、その類に依り、品に従ひ、遂に群書類從前後千八百五十冊を編輯せり。諸家の珍書これによりて不朽に傳はるもの多し。

かくいみじき功績世に顯はれければ、おのづから官位高き人々に招れて、古書を講説する事も多かりけり。その講説に出行くをりには、必先かの書を寫す人々に、一度之を讀ませて聞きける後、その講筵に就きけりとぞ。さればその様を見聞するもの、誰一人として驚かざるものなかりき。或年の夏の頃とかや、夕方より源氏物語を講説せしに、數多の人

々集り居たりしが、庭より頗に吹入る風に、燈火を吹消されたりしかば、しばし待たせ給へ。燈火點じ申さんと一人のいひければ、目のある人々はなかくに不自由なるものこそと打興じたりとなむ。

保己一、温顔人に接して、貴賤貧富をわかつたず。叱咤の聲いまだ嘗て犬馬にも及びし事なしといふ。衣食起居常に匹夫に比し、金錢餘裕あれば、必これを藏書の資となし、歡樂の爲に費す事更になし、質素儉約を以て、無上の樂となしけりといふ。從學の徒日に進み、月に盛りになりければ、官に請ひて和學講談所を設置す。官依りて總檢校に任ず。文政四年九月十二日歿す。年七十六なり。四ッ谷南寺町安樂寺に葬り、法號を和學院前總檢校心眼知光居士といふ。

保己一、嘗て某商店に至る會、番頭々を集めて、一片紙に記す所の巷名を按ず。保己一側に在り、叩きて曰はく、その字水偏に義の旁なり、知らず何といふ字なるかと。保己一答へて曰はく、これ必油卷ならむと。衆その所以を問ふ。保己一曰はく、蓋し當初書するもの油の字を知らず、これを傍人に問ひしならむ。然るに傍人これに教へて曰はく、水偏に由を旁とせよと。然るに書者、由と義との國訓相通するを以て、これを誤り、かくは書さしものならむと。やがて人を遣して之を問へば、果してその言の如くなりき。茲に於て衆皆驚嘆し

て之を感せりとぞ。

又淺草に、山岡明阿といふ門人あり。その門人に片山足水といふ人ありて、宸翰の御願文一葉を藏す。然るに太上天皇とのみありて、何帝とも定めかねたり。保己一、讀ましめてこれを聞き、延禁之闕宸居無勅姑射之山南樹不虧といふ句に至りて、華園帝の宸翰なりといへり。その由は、華園院の仙洞にて遊ばし、時、後伏見院尙仙洞に遊ばしたれば、後伏見院を姑射と稱し、當今を延禁之闕と記し給はせたるなりと辨じたりとぞ。されば時人、數年人々の考へ得ざりしを、かく疾くに辨せしを以ても、その強記博聞思ひしるべしと賞賛しあへりとなり。

曾て上京のをりの歌とて、人々の稱美しあへるは、古歌に「吾心なぐさめかねつ更科や姨捨山の月をながめて」とあるを本歌にとりて、

わが心なぐさめかねつ更科や姨捨山の月をながめてといへり。て文字一字に、濁點を添へたるのみにて、主意かはり、一段興味を添へたりと、以てその才の如何をも見らるべし。又遺稿中人の傳唱せる歌は、

言の葉の及ばぬ身には目に見ぬも中々よしや雪のふじの嶺

紅葉ばの碓氷のみ坂こえしより尙深からむ山路をぞ思ふ。これはその身の榮を得

たる時よみし類なりといふその著書は左の如し。

- 群書類従 續群書類従 皇親譜略 椒庭譜略
- 倭蠹抄 花咲松 雞林拾葉 武家名目抄
- 史料 耳食勞筆 水月文藻 松山集
- 總隠集

富士谷御杖 二四八三七四

御杖は成章の子にして通稱は專右衛門初の名は成壽又成元と稱す後に御杖と改め北野と號し又源吾ともいふ業を父に受けて和歌に長じ又國史に精しかりき故を以て世人に賞揚せらる御杖又彈琴の技に妙を得たりしかば其の徒に對しても大に名聲あり文政六年八月六日歿す享年五十六なりその著書刊行して世に流布せる者左の如し。

- 古事記燈 萬葉集燈 土佐日記燈 假名訓纂追考
- 百家類葉 百家部類抄 歌袋 詞葉新雅
- 百人一首燈 歌道非唯抄 いれひも 北邊隨筆

北野文集

清水濱臣 二四八三六七三

濱臣は村田春海の門人にして江戸の醫師なり姓は藤原通稱は玄長上野の岡に近き不忍の池の邊に住せるを以て家號を泊酒舎と號し又月齋といへりそは次に引ける文章にても知るべし幼より歌文を好み村田春海に従ひて古學を研究し出藍の譽ありき後終に一家を成すその最も長ずる所の者は歌文なりしなり今文例を左に示さむ

きぬたをさく詞

近しと聞けば遠し遠しと聞けば近し。まきるもたゆみ、たゆむも又しきる。かりがねの、きぬたをさそふにやあらむ。きぬたのねの、かりがねに通ふにやあらむ。あなわやし、あなわやし。この音のかなしきか、住む里のさびしきか。打つをりのうさゆゑか。曾あらず、聞く人の心のさびしきなり。

寄花祝言

江戸の大城、いくらも去らぬうしとらのかた、大比叡をうつされし上野の岡の麓、志

賀のみづらみなすしのばすの池の汀に、さゝなみの屋の翁といふありけり。その身公につかふるきはにもあらず、私の主といふもなし。くすしの業を業とすれど、人はいかし、病をつくるよてだてを知らず。なまじひに書の本をわけながら、そのおくかをきはめむともせず。すゝろに言葉の園に遊ぶとすれども、色なる一葉をも捨得たる事なし。唯春秋を、花紅葉の中にまじりて、明し暮して、齡早く四十に過ぎにたる、天の下のいたづら人なりけり。

そもそも、天地の中には生まれ、世の中にあれど、あれ出づる人の身も、何事をか幸とし、何わざをか樂と思ひ、如何なるふしにか喜ばしく、如何なるをりにかうれしといはむ。あるは官位に望をかけ、あるはこがね白がねを、家に藏に積重ねむ事を願ひ、あるは桂の枝を折りて、雲の上までも名を輝さむ事をほりし、あるは綾錦を身に纏ひ、絲竹の音に心をとらかすを、たけき事とするなぞ、心々のひくかたによりて、とりどりに捨てがたき習なるを、このいたづら人は、更にかゝる筋を心とせず。もはら野山の遊に身を委ねて、樂しき事の限りと思へるは、いみじき世のすねものなりけり。この春も二月のはじめより、むかつをの梢に目をつけ、やゝ句初むるを待ちとりて、あしたに行き、夕に至り、花のかけに立ちもどはりつゝ、猶わかぬあまり、とぶ鳥の飛

鳥の山をわけ、行く水の隅田川にさかのぼりて、花より花に狂ひめぐりけり。かくてこのいたづら人、みづから思ひけるやう、あはれさちある身や、あはれたのしの身や、われいかばかり、花にあくがれむとすども、櫻花絶えて句はぬ唐國の境に生れ出でたらましかば、何にかく思ふがごとく、花見ることを得む。今うれしくも日本のやまどの國に生れ出でたる、是れ一つの幸なり。吾等いかばかり、野山の花にあくがれむとすども、四方の海静ならず、浪風しくゆる世に生れ出でたらましかば、いかでかく思ふがまゝに、花みる事を得む。今うれしくも治れる世に生逢ひたる、これ二つの幸なり。われらいかばかり、野山の花にあくがれむとすども、深き八重山、おき遠き島がくれに生れ出でたらましかば、何にかく思ふがまゝに、花見る事を得む。今うれしくも、咲く花の匂ふが如き、江戸の大城のもとに生れあひたる、これ三つの幸なり。われらいかばかり、野山の花にあくがれむとすども、位高く仕への道に暇なく、萬所せき身ならましかば、何にかく思ふがまゝに、花見ありく事を得む。今うれしくも、天の下にはださるゝことなく、身を心に任せたる、これ四つの幸なり。われら如何ばかり、野山の花にあくがれんとすども、病常に身を胃し、手のやつて、足ののり物、心に任せずは、何にかく思ふがまゝに、花見ありくことを得む。今うれしくも、身すゞや

かに、手いたづくかたなし。これ五つの幸なり。
あはれ、誠に楽しくよろこばしく嬉しく、幸あるわが身ならずや。かく思ひはこるわ
まりに、花にむかひてうたひ出でたる喜びうた。

若櫻匂ふ御園に生出で、花持囃す身をぞよるこふ
治れる御代の恵に遇に遇て花に飽きぬる身をぞ喜ぶ
鳥がなく東の比叡の花盛軒端に愛づる身をぞよるこふ
今日幾日花より花の旅寝して家路忘る、身をぞ喜ぶ
春毎に花の盛をたれこめて眺暮さぬ身をぞ喜ぶ

濱臣、性温厚にして人を競はず。從學の徒には、懇切に教授したり。故にその名、一世に高く、
慕ひ來りて門に遊ぶもの甚多し。こゝにおいて權門貴族、殊にこれを延て優待す。關宿侯
林田侯、殊に禮を厚くせらる。文政七年八月十七日歿す。年四十九なり。東本願寺中善照寺
に葬る。

濱臣、普く縣門の遺稿を索め、これを校正して縣門遺稿と題し、刊行して世に公にす。その
みづからの著書は、左の如し。その他、未定稿の家に傳ふるもの甚多しといふ。
源氏物語名寄圖考 伊勢物語語偶言解 萬葉集考註 後撰和歌集補註

- | | | | |
|---------|---------|-------|-------|
| 後撰和歌集附考 | 月詣和歌集標註 | 唐物語標註 | 遊京漫錄 |
| 古葉菅根集 | 中葉菅根集 | 近葉菅根集 | 自撰漫吟集 |
| 自撰晚歌集 | 字說辨誤私考 | 皇朝喻林 | 據字造語抄 |
| 語林類葉 | 庚子道の記標註 | 濱臣家集 | 泊酒舍家集 |
| 縣門遺稿 | 旅路の打開 | 古文類聚 | 總常紀行 |
| 杉田日記 | 朝敵辨 | 答問雜稿 | 清石問答 |
| 泊酒筆話 | 泊酒文藻 | | |

尾崎雅嘉二四一五七七〇

雅嘉は、大阪の書肆にして、通稱は春藏、字は有魚、號は蘿月、又傳古知今堂、又華陽、又春の屋
又春陽軒といふ。幼にして讀書を好み、諸家に就きて學ぶ。故に和漢に通じたり。雅嘉書肆
たりし故、和漢の書籍、一として備らざるなく、最も後學の便を助けたり。彼の群書一覽は、
雅嘉の著書にして、學者諸書を求むるに、大に効益あり。その百人一首一夕話に至りても、
大に賞用せられたり。雅嘉もと専門の歌學者ならずといへども、その詠歌既に一體の風

を成して、大に世人に賞賛せられたり。文政十年十月三日歿す。年七十三なり。口細坂春陽軒に葬る。

雅潔、資性謙遜にして、人に誇らず。常に語りて曰はく、近年江湖學者の弊として、先達の説を辯駁するを主とし、只管おのれの學問を世に示さむとして、妄に新説を著すもの多し。然れども予は然らず。學に志す初心の徒を益せむと欲すと。その著書この主旨に従るを以て、世を裨益する事甚多し。今その著作を擧ぐれば左の如し。

- 事物博探 新撰吟和歌集類題 群書一覽 續群書一覽
- 群書一覽別錄 蘿月文集 古今集鄙言 續撰吟和歌集類題
- 萬葉集鄙言 伊勢物語鄙言 歌枕補註 和歌明題部類増補
- 掌中題林抄 百人一首一夕話 千首類題 掌中明題抄
- 和歌ぬさ袋 和漢群書作者目錄 續異稱日本傳 蘿月菴國字漫抄
- 類題證歌集

本居春庭 二四二三八六九

春庭は、宣長の男にして、後の鈴屋と稱す。博學にして秀才なりしが、年四十餘の頃、眼疾を患ひて全く盲目とあらる。依りて養子太平をして、皇朝學の系を繼がしめ、おのれは醫道の方を繼がれたり。

春庭、幼名を建造といひ、建亭と號す。幼より父の志を嗣ぎて、古學を研究し、殊に意を詠歌に用ひられしかば、終に感能なるに至れり。明を失する後も、苦學怠らず。業愈進むと云ふ。元來強記絶倫にして、一度記憶に入れば、終身忘るゝ事なかりしが、辨となられし後は、殊に然りといふ。門人文詞等を持し來り、添削を請はむとこれを誦すれば、その長文數紙に涉るといへども、悉く暗記して添削せられきとぞ。又みづから書を講ずるに、その考證の書を引用する、某書某の丁にありと、その言一として當らざる事なし。その最も長せらし所のものは、活語の學にして、詞の八衢、詞の通路等を著して、父翁のいまだ言はれざる事を述べ、大に後世を裨益せらる。文政十一年十一月七日歿す。年六十六なり。春庭人となり、温順篤行にして、物に競はず。恭謙能く人に對す。みづから松坂にありて、父業の後を嗣ぎ、傍門人に教授せらる。その學大に世に行はれ、從ひて學ぶもの甚多し。その著書は左の如し。

石川雅望 二四九〇三六七

雅望は江戸の人にして狂歌師を以て世に稱せらる。通稱は糠屋七兵衛、後に五郎兵衛と改む。字は子相、六樹園、又五老齋、又逆旅主人、又蛾術齋と號す。狂名は宿屋飯盛とて、小傳馬町の旅館の子なり。壯年にして行狀修らず、放逸甚かりしかば、父歿せし後は、昨日に代はりたる操行にて、學を好み、讀書に耽るに至れり。佐竹侯の用達津村三郎兵衛綜庵とて、少しく和書を繕き、傍和歌を能くする人につきて學び、後蜀山人につきて狂歌を學びたり。文化の頃、馬喰町邊の旅宿、或は強訴健訟の幫助を成し、或は其公の事を以て、出江したる旅人を長く止むる等の事ありしに、連坐して江戸を追拂はる。こゝにおいて、多摩郡に住し、後内藤新宿に移りたり。後程經て靈岸島に移り、孫梅太郎の家に寓居せりしが、文政十一年法眼に叙せられ、宗匠の號を贈られたり。蓋京都緒紳家において、源注餘滴等の著書を見て、その博識を賞せられしなりとぞ。その許狀には唯俳諧歌のみの事を記せり。そは

二條齊信卿の許容せられしものにして左の如し。

所賦詠之俳諧者不學而以自則家則流之舊式矣可謂天然之奇才也感賞有餘因推授
宗匠號益導徒弟宜復于古是道者台命如斯依執達如件

文政十一年戊子五月五日

藤木越後守
大村 監物

折鳥帽子

水干色目

葛袴色目

右風流會席當坐之節可着之猥着用之義可有時宜事依台命許可如件

文政十一年戊子五月五日

大村 監物在判
藤木越後守在判

この時齊信卿より梅といふ題にて、咲初めて花珍しき梅が枝はなは手折りてもみばやとぞ思ふとありしかば、雅望その返事に、

手折りても甲斐あるべくもおもはえず老木の梅の色香薄きはとよめりとなり。
その源注餘滴と、雅言集覽とは、世に廣く聞えたる良書にして、普く後世學者間に行はれ、

且集覽の如きは、座右一日も缺くべからざる便書にして、吾國辭書中に於ける、最有用に最價値あるものなり。天保元年三月二十四日歿す、年七十八なり。淺草黒舟町正覽寺中哲相院に葬る。

曾て京都より下りたる一縉紳あり、この縉紳は、既に六樹園の狂歌に秀でたるに驚き、又五老山人の漢學に秀いでたりしにも驚きぬ、然るに雅言集覽を見て、又石川雅望の和學に秀いでたるにも驚きたり、然るに圃らざりき、五老山人、六樹園は、共に雅望の別號ならむとは、茲に於て縉紳の驚嘆甚しく、譬へむやうもなかりし事實に察するに餘りありと云ふべし、又以てその博識廣才なりしを證すべし、今その狂歌一二首を左に擧ぐ。

花満山河

山河のわけへだてなく咲けばとて智者も仁者も花を樂む

市中梅

初咲きの梅は秤か市人の二りん三りんあらそうて見る又その著書を擧ぐれば左の如し。

源註餘瀆

雅言集覽

徒然草新註

新撰調度集

萬代狂歌集

寢ざめのすさび

寢ざめのすさび後篇

今様職人盡歌合

飲食狂歌合

百人一首狂歌文庫 清石問答

名家百人一首圖繪

三つの調

五十人一首狂歌文庫 孝經傍訓

濱川隨筆

近江縣物語

梅枝物語

不問物語

飛彈匠物語

まみの住家物語

答友人鄙言

千字文略解

五老園雜誌

天の羽衣

櫻草野邊錦

七替 敵討記平汝

あづまなまり

醉竹庭集

六樹園叢書

都の手ぶり

狂歌雪月花

狂歌道中記

北里十二時

通俗排悶錄

通俗醒世恒言

狂詩粹金

武者狂歌合

白讀狂歌集

文化狂歌百人一首

狂歌著聞集

狂歌葉津加蛭子

狂歌百人一首

本居太平 二四九三六四

太平は、本居大人の門人にして、後養子となる。本姓は稻掛、通稱は三四右衛門、初は稻掛十介茂穂と稱し、伊勢國松坂の人にして、紀伊に住したり、棟隆と共に、鈴門に入り、その塾に寓する事年久しく、性篤實にして、師説を確信しければ、竟に賞愛せられて養子となり、本

居氏を冒し、藤垣内翁と號し、皇國學の系を繼ぎ、紀州侯に仕へて甚寵遇せられ、班側用人に准せらる。家學を守りて益昌なり、その最も長じたる所の者は、歌文なりと云ふ。今その文例の一を擧げむ。

契沖の古學

輕島のおきらの宮の大御代に、書ちふ物はじめてまゐるき、磯城島の金刺の宮の大御代に、佛ちふ物わたりき、漢國の教の道を、物たらひよき事と思ひ、佛たふとぶことをめでたき事として、この二つの道の、天の下四方にはびこれる事は、難波の海べに、腹蘆のおひしくことの如くなむありける。漢の道は下より根はへ、佛の道は上よりををりて、大御國の大御手ふりは、こもりづの下にのみし、知る人もなくなりて、代々をし經ぬれば、かしこきや神代の御書をどくにも、さかしきからことぶりにときまけ、よしなき佛心にどりなしもする世となむなりける。かれかの磯城島の御代には、齋部なにかしの宿禰が、漢字の出で來るは、古事わすれぬべきはしとなげかせることいも、今なむいちひろく思ひあはされける。しかるを元祿のころはひ、難波の契沖の大人は、佛の弟子として、その國字を學び、漢國の書をしもよく見渡して、御國

の遠つ御代の手ふり、言靈のたすけさきはふことわりをしつばらにさどり、言語のたふとむべき事わりをなむ考知りて、かりごもの世々久にみだれてありつる假名づかひをたゞしみちびき、あさぎりのまさはしかりつる歌の心をも、ねもごろにときをしへられけるより、ことおこりてなむ、世の中に古事學びする人々、つぎにわれつぎて、かのあしごものしみさやれるところ、をどげる心の敏鎌もてかりそけかきわけ、水底深くたづねて、眞珠白玉たかく尊き、遠つ御代の大御手ふり、神代の古事まで、やうやう光みえゆく世となむなりにける。うれしきかも、たふとぶきかも、そもくかの漢の道を、はじめておこなはしけるも、難波の高津の宮の御代、佛の道の世に榮えけるも、難波の四天王寺なるを、その難波にしもありける契沖の大人の功より、神の道のあらはれそめける事よ、堀江の深きよしあるわざになむありけらし。

太平、門人に教ふる事親切なりければ、業を修むるもの千餘人に及びき。天保四年九月十一日歿す。時に年七十八なり。和歌山吹上寺に葬る。私に八十言靈大人と諡す。その著書は左の如し。

萬葉集合解

萬葉集山常百首

玉鋒百首解

百人一首梓弓

古言類聚	三大考辨	古學要	神樂歌新釋
姓氏錄考	八十浦の玉	夏己路毛	關のうまや
吉野の若葉	有馬日記	名草の濱づと	己未紀行
名兒屋の日記	稻葉集	藤垣内集	

大石千引 二四三〇六三

千引は、加藤千蔭の門人にして、名は貞見、通稱を傳右衛門といひ、字道和、野々舎又星廬と號す。龜井戸の湯屋の主人にして、千蔭に従ひて和學を修め、後徒を集めて教授す。今様歌、琴歌等の作多し。千引、專萬葉の古調に心を委ね、歌のすがたことば氣高く、うるはしからむとつとめたりき。學才は、別に物語に長じたりしかど、伊勢物語、源氏物語の類は、古人もかれこれといはれたればとて、築花物語、水鏡、大鏡、増鏡などの實録に力を用ひ、就中大鏡にぞ心を盡されけるぞ。

千引、人と爲り穩雅にして、人と交り謙退辭讓の風あり。又名利の念薄く、錢貨損益の事なき。絶えて口にいふ事なし。又好味美服を退けて、唯學事に心を碎き、月花の興にいりては、

夜の明くるも知らざりけり。子は女子一人を持たりしに、或人勸めて、商人の家を若干の黄金に易へさせ、やがてその家に移り住ませけるに、物買ふ人の集ひ來たるは、中々に書讀む妨げなりとて、藥研堀の某氏の地を借りて住み、今様の歌作りて、琴にあはせ、みづからも、唱ひ興じて、暇ある時の心やりにぞしける。さて常にいはれけるは、今の世の著述といふものは、古書の註釋を作ると、古言の義を解すると、古歌の意を諭すとにて、その説も大方古人の考へられたる趣にて、自己の考へ出でたるはいと少し。おのれいかでわれと考へ出でて、新に語釋をもせばやとて、多くの書籍をくりかへし、かれこれを校正し、ひたぶるにその筋に思ひをこがして、遂に言元梯といふ書を著せり。晩年に本所錦糸堀といふ地に移り住まると、天保五年九月十三日、享年六十五にして歿す。芝西應寺町法泉寺に葬る。法號を千引信士といふ。著書は左の如し。

言元梯	大鏡系圖	御即位記	大鏡觀矩抄
梅合	築花物語抄	水鏡觀矩抄	日中行事略解
野々舎隨筆			

狩谷望之

二四三五六二

望之は、江戸の人にして、通稱は津輕屋三右衛門、字は卿雲、掖齋、又蟬翁と號す。始は高橋真末といひ、後に狩谷の養子となり、因りて狩谷を稱せり。幼にして和學を修め、後律令學を研究せむとす。然れども、唐代の諸籍に涉らざれば、その根據を究むる事能はざるを以て、務めて六典唐律等の諸書を講究し、遂に進んで六經を修め、恍然として發明する所あり。故に又漢籍家を以て稱せらる。望之常に人に謂ひて曰はく、源順の和名類聚抄は、吾國古書のあるが中に最も貴重すべき書にして、上は天地日月より、下は草木虫魚に至るまで、網羅して遺す所なし。故に當時これに依りて漢字を知れるのみならず、後人も亦これに依りて以て古言を證す。然るに傳寫漸久くして、誤謬甚多けれども、儒者はおきて問はず。皇學者は、國風語草をのみ修むるに過ぎざれば、後世或は讀みあからむべからざるに至らむと。こゝにおいて參證考訂し、疏釋を加へて箋註十卷を撰す。その世を益する少からず。天保六年七月四日病を以て歿す。年六十一なり。下谷天龍寺に葬る。望之もとより藏書に富む。故に世に得がたかる珍書も、多くその藏中にありきといふ。毎に人に語りて曰はく、吾れ酉洞の宮に誇るにあらず、ただ誤本を化して善本となさむと欲するのみと。これ世に考證家を以て稱せらるゝ所以なり。年四十余の時、みづから謂て

曰はく、兒既に長じて、家を治むる事を能くせば、われ將に老せむとす。遂に淺草に卜築して、常關書院といひ、漢鏡漢錢王莽の威斗中平の双魚洗三耳壺を藏す。依りて六漢老人と號す。或人曰はく、これ五漢なり、その一は何處にあるかと問ひしに、望之曰はく、おのれ漢學を嗜みて、漢學を修む。これ又漢時のものにあらずやと。その漢學に長じたるも推して知るべし。今著書を擧ぐれば左の如し。

- | | | |
|-------------|------------|---------|
| 日本靈異記考證 | 上宮聖德法王帝說證注 | 延喜式藥錄 |
| 石川年足卿墓志攷證質疑 | 姓氏錄提覽 | 箋註和名類聚抄 |
| 轉注說 | 本朝度量權衡考 | 本朝和名攷異 |
| 古京遺文 | 新校正孔方圖鑑 | 撫古遺文 |
| 諸國採輯風土記 | 新撰字鏡分音 | 扶桑略記校讎 |
| | | 皇國泉貨通考 |

山田以文

二四二五六二

以文は、藤井貞幹の門人にして、京都の人なり。阿波介、又伊豆と稱し、錦所、又梨陰と號す。吉田家の侍士にして、國典故實に明にして、終に一家の風を成せり。天保六年二月廿四日歿す。

す。年七十四なり。その著書の世に傳はりたるは、僅に錦所談、石川年足卿墓誌考證のみなり。

中山信名 二四四七六一

信名は、塙保己一の門人にして、通稱平四郎、字は文幹といふ。本姓は坂本、常陸國の人なり。本所柳原に住するを以て、柳洲と號す。幼にして強記なり。常に稗史を好み、最も太平記に熟す。よくこれを暗誦して一字一句をも誤る事なし。故に人呼んで太平記童といふに至る。されば父兄のこれを愛する事、一方ならず。十六才にして江戸に出で、塙檢校の門に入り、苦學する事五年。二十一才の三月、始めて郷にかへる。文化六年、幕府の士中山家の養子となり、七十俵五人扶持の俸祿を賜はり、書物御用出役となりたり。後出役頭取に轉ず。これより先き、信名、幕命を帯びて、鹿島香取兩神社の古文書舊記を寫し、其の後塙檢校に従ひて西上し、各所の舊祠古刹の秘藏を探りて歸りぬ。此時代におきて、秘本珍書の多く世にあらはれたるは、信名の功又少からずと謂ふべし。保己一の群書類從を編纂する、始終信名を以て校訂の任に當らしめ、その和學講談所を起すも、信名を舉用して教授となす。

その保己一の爲に信せられし事知るべし。天保七年十一月十日病んで歿す。年五十なり。下谷常泰寺に葬る。その辭世の歌に曰く。

酒も飲み浮かれ女も見つ文も見つ家も興しつ世に恨みなしと。以てその平生を知るべし。

信名、資性磊落にして、甚酒を好み、俸祿皆これが資となりき。又或時は、花柳に遊びて職に従はず。然れども林氏の彌縫に依りて、辛うじて官を有する事を得たりとぞ。さればにや。家中一の長物なく、只蠶書數十卷を備ふるのみ。然れども家記系譜等、おのれの著作に付きて有用なるは、餘暇を以て所々の露店を徘徊し、力めてこれを索めたりといふ。その平生著す所の稿本は、大抵故紙を用ふ。故に細字を以て書したる者は、往々讀みがたかりし所あり。僅々二十餘年の間におきて、その著書を完成したる事數十部。故にその著書のみ見る者は、信名を以て長壽の人と思ひたりき。今その著書を擧ぐれば、左の如し。

- 南山考 南巡逸史 庄名考證 風土記概論
- 氏族志料 關城書考 守護地頭考 常陸遺文
- 常陸編年 新編常陸國誌 常陸稽古錄 常陸治亂記
- 常陸沿革圖記 鹿島郡圖 鹿島事跡 鹿島編年記

- 鹿島長曆
- 水滸事跡
- 武家名目抄
- 度量考
- 參州事跡
- 阿兒奈波志
- 墳墓考
- 東極雜記
- 柳洲雜記
- 筆くまで
- 蝦夷島志

村田春門 二四七三六一

春門は、本居宣長翁の門人にして、伊勢國の人村田橋彦の男なり。幕府の旗下小笠原家に任へ、初め名を並樹といひ、後故ありて一柳と改め、晩年復村田を稱す。通稱は九二兵衛、後に蟹守と改め、田鶴廼舎、又樂前、又郁子園と號し、鈴門に於て名聲ありし人なり。古學と詠歌とを唱へて、一家を成し、その道を以て徒に教授せり。後江戸に出て、又浪華に移り、天保七年十一月二十四日、江戸におきて歿す。年二十四なり。男嘉言早世し、春野家を繼ぎ、尙徒を聚めて家學を教授せりといふ。春門年壯にして歿しければ、その著書甚少し。

- 客話小録
- 樂前日記
- 獨話小録
- 源氏新抄
- 田鶴廼舎隨筆
- 蟹守家集

鈴木朗 二四九七六〇

朗は、本居宣長翁の門人にて、通稱常助字は叔清、離屋と號す。尾張國の人なり。家世々儒を以て業とす。朗幼より學を好み、年長して愈これに精研す。人見て以てその成業を期せり。後本居大人の門に入り、和學を研究し、終に一家の見を立て、これより漢籍を解くに、わが皇朝に參考して、その説甚特種なりき。故にその聲譽甚高く、又筆札を能くし、清人錢泳、その文字を賞賛したりといふ。天保八年六月六日歿す。年七十四なり。名古屋城南誓願寺に葬る。その著書は左の如し。

- 雅語譯解
- 活語斷續譜
- 離屋文集
- 少女卷抄注
- 幼學音聲考
- 離屋家訓
- 詞の八衢補遺
- 希雅
- 養生要論
- 言語四種論
- 論語參解
- 大學參解

藤井高尙 二四二四五七

高尙は、本居宣長翁の門人にして、松の屋と號す。備中國吉備津神社の宮司にして、從五位下長門守に叙せらる。鈴門の一巨擘にして、殊によく源氏物語を研究し、最も文詞に堪能

なり。京都の鐸の屋におきて學徒を教授し、文詞の軌範たる書を著して諸生に示す。從學する者甚多かりき。天保十一年八月十五日歿す。年七十七あり。私に謚して三寸鏡靈神といふ。今その文例を左に示さむ。

雪見の詞

松吹く風の聲さむく、いとくらうなれば、あかりさうじをわけて見るに、ゆきかさくられて、ふる楓の園のけしきこそとて、出でたちてゆくままに、やゝふりつみたり。田づらの細道をわくる、いとたゞしくし、杖にたすけられて、辛うじて柴の門にいたる。かぎのわづかりがとり出で、わくるを待つま、外に立てれば、さむくわびし。雪遊びする童のやうにぞ、ふるひわがりける。いりて見るに、けしきいはむかたなし。すびつに火をおこして、よりて見居るは、冬の日はみじかくて、夕暮になりぬ。かきのと山の麓の、松と竹とのけぢめは、おかしう見ゆるものから、いたうつもりたれば、ねぐらもどむるにや、あらむ。うちつれかへり来て、どびまよふからすの、つばさの色、あたりの白きにもてはやされて、いとけさやかなり。庭の木の葉、田の面のおちば、いながらなごの、ちりみだれたるも、みなかくされて、いとさよらかなるに、くれはて、は空晴れて、月くまなく照したるは、いひしらすおもしろさ。もわはれさも、残らぬやうにて、から

人の山陰の友訪はむとて、うかれ出でしもかゝればなりけりと、おもひしらるゝよるのさまになむ。

秋野の花

およびをりかき數ふれば、七種の花とむかし人のいひけむは、さる事にて、秋の野に咲きたる花は、げに七くさぞおかしくはありける。われもかう、りんだうなごは、歌にも咏まぬけにや。ものげなくぞ覺ゆる。その七くさの花の、品々をさだめいはむとす。あるが中に、すぐれたるは萩になむ。枝さしなどもいとえんに、花の色こきもうすきもいとめでたく、葉も小さくてあてなるに、緑の色美しく、かばかりのものやはある。かゝればむかし人も、七くさのはじめに、まづ數へ出で、萩を萩といひはやし、露にさはひて、萩の遊びせむともいへりき。さしつぎには尾花にこそ。この花よ、花かすにもあらぬやうなれど、露をつらぬきとむる玉の緒の、うちなびきたるは、ものよりことにあなおかしと見ゆ。夕風のわはれなる秋のけしきは、これになむあれば、をばながうれを萩といはむと、いひし人も、ひがことせざりけりと思ひしらす。この二くさをおきては、をみなべし。名のなまめきたればにや、あらむ。花のすがたもいひしらすなづかし。

さてはあさがほ、ふぢばかまなでしこ、どりくに見所あり。このあさがほといへるは、さちかうの花ぞ、色はえもいはすめでたき。枝のさまぞこちくしきや。ふぢばがまといふは、さくなるべし。この花もなでしこも、からの種をうつし植ゑたる前栽のは、いとくめでたく、野邊におのづから生ひたるは、こよなくおどれり。されどあてなる花になむ。葛花はさまかはりて、ことぐさの下はふからに、見だてなければ、これも野邊の庵の柴垣にはひかりたるかづらに、かの花のさきたるはおかしう見ゆ。秋の花のさだめよ。まことにはいひえがたくなむ。さるは一もとごとくにわきていへば、かくその品々のけぢめあるやうなれど、わづかなると數多咲きたるとは、いたくことに見え、近く見るにいとよき花もあり、また遠くてなかく見まさりするなど、ひとやうならず、曙夕暮の露のまよひに見渡したらむには、えんにもあはれにもおかしくもおぼえて、いづれの花かはおろかならむ。いづかたによりはつともなく、はてくはかれもこれもみなよしとのみいふは、心ぎたなき花さだめのはかせになむ。

又その著書を擧ぐれば左の如し。

大抜詞後々釋

枕草紙新釋

日本紀御局考

詞の道しるべ

三のし留弊

松の落葉

月草

淺瀬のしるべ

類聚雅俗言

おくれしかり

佐喜軒

消息文例

出雲路日記

ひきもの、定め

松の屋文集

松の屋文合

松の屋文集後集

神の御蔭の日記

屋代弘賢

二四一八五六

弘賢は、堀保己一の門人にして、通稱は太郎、初の名は詮賢、後詮丈、輪池と號す。江戸の人に於て、世々幕府に仕ふ、弘賢和學を嗜む事甚深く、終に堀檢校の門に入りて、これを修む。博識多聞、檢校に類す。後終に一家をなせり。文化中、局を開きて、古今要覽一千卷を著し、僚吏寫書、日夜筆を閉かずといふ。その平生、自脩する所儉素にして、餘あれば、則書を購ふ。晩年に書庫三字を新築す。その所有の典籍、一万卷を踰ゆ。而して多くは考據を資くるものなりとぞ。弘賢又筆札を能くす。入木一道の先達、森尹祥に學び、一家を成し、日下部七之助、青木半藏と並び稱して、森の三筆とよべりと云ふ。終に屋代流を以て世に稱せらる。元御臺所人なりしが、寛政五年六月六日、支配勘定格奥御右筆所手附と成り、その後御勘定格御

右筆所詰に轉じ、文化八年五月朝鮮人來聘の時國王への返翰を認めし事は、最もその規模といふべし。天保十年正月十九日、百俵高に加増せられ、奥御右筆を命せられ、部屋を給はる。これを太郎部屋といふ。その門に入りて教を受け、或は法を傳ふるもの、殆三千人に至りきとなり。天保十二年五月十八日歿す。年八十四なり。白山妙清寺に葬る。その著書は左の如し。

- | | | | |
|-------|---------|-------|----------|
| 古今要覽 | 古今會要 | 加津美考 | 和歌入門相見之記 |
| 栴檀瑞像考 | 參攷伊勢物語 | 鴉之巢 | 有卦無卦 |
| 道之幸 | 高野大師書訣註 | 道成寺考 | 琉球狀 |
| 通覽花檀抄 | 不忍池筆抄 | 武家名目抄 | 古文孝經附錄 |
| 輪池叢考 | 輪池雜錄 | 歸田の意 | |

香川景樹 二四二八五四

景樹は、因州鳥取の人にして、黃中の養子なり。本性は荒井氏、桂園と號し、觀鷺亭、又東鳩亭ともいふ。徳太寺家の家士にして、從五位下肥後守たり。明和五年を以て生れ、幼名を銀之

助といふ。僅三歳にして、書を讀み、書を寫す。父母依りて鍾愛し、乃姨婿奥村氏の養子となし、名を純徳、字を眞十郎と改む。七歳の頃、和歌を清水貞固に就きて學ぶ。又儒を堀南湖に問ふ。十五歳にして、百人一首註釋を撰み、名けて百首異見といふ。十八歳の頃、父母に請ひて京都に行き、一宿紳家に仕へ、勤學練行して、遂に香川黃中の養子となりぬ。寛政八年、從六位下に叙せられ、陸奥介に任せらる。後、又長門介、又は肥後守にも任せらる。景樹屢轉居して、終に岡崎に住し、老いて益健全を加へ、學に就くもの、萬を以て數ふ。

景樹常に弟子に誨へて曰はく、歌は詞を主として斷理を成すべきにあらず。又ある人道を得む法の如何を問ひければ、則答へて曰はく、これ他なし。日夜意を委ね、わが命を以てこれに代ふるのみ。然らざれば安んぞ、大道をうる事を得む。夫既にこれが極所に達す、學ばずして何ぞ義理を曉るを得むと。又曰はく、詠歌は我面の如し。みづから見るべからずと。又曰はく、儒佛の諸書皆裨益あり。譬へば碓の如し。力を脚下に設くれば、則穀おのづから精しと。又曰はく、詠歌を欲して能はざれば、則論語を讀むべしと。景樹、終世人を誨へて倦まざりきといふ。

景樹初め百首意見を著し、其師貞固に視す。貞固卷を終へず、放抛して嘆じて曰はく、懼るべし。懼るべし。われは子の才を懼るにあらず。子の齡僅に成童なり、設令光珠といへども

黄口兒のみ而して大人を蔑如することかくの如し。豈玷瑕ならずや。われ今擲斥せざれば、則他日誰ありてその餘響を聞かむ。これを碎くは、則その終に完からむ事を欲してなりと、景樹後よく教誨を守りて、師の道を遵奉すといふ。其の歌風は、意を古風にとりて、詞を古今後撰等に取りと、なり。近世におきて歌風を一變したるは、實に景樹の力なり。景樹、識高く學博く、近世中の歌學者を以て稱せらる。常に紀貫之の風を尊崇し、古今集の正解を成さむ事を志し、日夜刻苦して古今集正義を著す。その説、契沖の餘材抄、真淵の打聞、宣長の遠鏡を始め、その他、普くこの歌集の註解を涉獵して、誤謬を辨し、自己の見識を張り、大に前人未發の新解を下したり。天保十四年三月二十七日歿す。年七十六なりき。景樹、少年の頃、さすらへて按摩となりける時、

夕く、調べあやしく吹く笛のあなわはれども、聞く人のなきとよめりどぞ。又いと若き頃、國を離れて、五條わたりの伏屋にかくれ住みて、物學びしてありけるを、聞きつけて故郷なる友のもとより、さてあるべきかは、早く歸り來よなといひおこせける時、わびて世に古屋の軒の繩すだれくちはつるまでかゝるべしやはとよめり。これらを誦讀せむには、儒夫も起ちて雄心をやふり起しぬべき。その辭世の歌なりとて人の傳へたるは、

一筋に命まつまの春の日はいよく長きものにぞありけるとなり。今その著書を擧ぐれば左の如し。

- | | | | |
|-------|--------|-------|--------|
| 萬葉集摺解 | 古今集正義 | 百首意見 | 土佐日記創見 |
| 新學異見 | うす水 | 桂の落葉 | 活言考 |
| 桂園集 | 六十四番歌枕 | 中空日記 | 中空日記補遺 |
| 桂園一枝 | 桂園一枝補遺 | またぬ青葉 | 桂園隨筆 |

松岡辰方 二四二七五四

辰方は、堀保己一の門人にして、筑後國久留米の人なり。姓は丹治名は平次郎又清助といひ、字を士辨と稱す。梅軒はその號なり。保己一の門に入りて、有職故實の學を修め、その精を極ひと云ふ。天保十四年五月朔日、年七十七を以て歿す。目黒祐天寺に葬る。其の子行義、博聞廣才、名聲父に超えたり。辰方の著書は左の如し。

- | | | | |
|------|----------|--------|---------|
| 皇統略圖 | 親王諸王考 | 諒闇愚抄 | 續々皇胤紹運錄 |
| 位階便覽 | 盛化門院御送葬抄 | 裝束織文圖會 | 織文圖會女官部 |

- 織文圖會錦織物部 續諸門跡譜 服忌便覽 官位相當圖
- 裝束圖抄 女官裝束織文圖會 武家裝束器具略記 武家當時裝束抄
- 十二單着用圖 小柱着用圖 小素袍考 張着々用圖
- 冠圖 手綱服帶圖式 合式服色圖考 武田小笠原略系圖
- 式飾並化粧略記 貞須豹文書色目考 公家衆參向次第

平田篤胤 二四〇三六五四

篤胤は、本居大人の門人にして、幼名を正吉といひ、通稱は大學、又大壑とも云ふ、姓は平氏なり。伊吹廻舎と號す。父は大和田清兵衛祐胤にして、秋田の藩士なり。安永五年八月廿四日、秋田城下手形谷地下町の自邸に生る。八歳にして、秋田藩の儒臣、中山菁莪といふ人に從ひて、漢籍を學び、十一歳にして叔父柳本老に就きて、醫術を學ぶ。父祐胤常に篤胤に語りて曰はく、孔子この國に生れたらましかば、漢土の事は學ばずして、必この國の事をこそ學ばましか、われいまだ學ばざれども、實はこの國の事こそしらまはしけれ、それに就きて、漢籍の説にはあれど、君子務本々立而道生てふ語、又君子多乎哉不多也といへる語、

又、雖不能備百善之美、必有號也、是故知不務多、必審其所知てふ語、又、誠之者擇善而固執之者也といへる語などは、心中に誦しおきてな忘れそ。又よく成人の學問をなせよと教へられきとなり。

篤胤幼にして俊才あり、長するに及びて博覽強記なり。且、天資精悍剛健にして、百折撓まらず、千挫屈せざるの志氣有り。一日菁莪門下の先輩篤胤が意氣軒昂にして、毎事人に屈せざるを惡み、會談論講の次に、衆論齊しく篤胤を攻む。篤胤神色峻勵、頭髮悉く逆立す。衆生その志氣の猛烈にして、冒すべからざるを知り、遂に恐れて止むといふ。

篤胤年十五にして、元服を加へ、名を胤行と改め、益志を漢籍に委ね、刻苦勉勵、常人に超えたり。この時に當り、昇平日久しく、驕奢風を成し、柔弱俗となり、士氣敗頽して、國政萎靡す。篤胤この文弱偷安の時世に際會すれども、嘗て流俗の汚俗に染まらず、毅然として自づから守る所あり。終日終夜心を經史に潜め、傍武術に意を留め、殆んど寢食を忘るゝに至る。篤胤早く母を喪ひ、繼母の虐遇堪へがたきを以て、十九歳の時、奮然として家を脱せむと欲すれども、囊中空しく一錢の旅費なし。家兄これを憐み、青銅一百文を與ふ。則遺書して家を去り、横手町に至りて、兄多賀主水に金一兩を乞ひ得らる。こゝにおきて江戸の途上につかれき、然れども其費薄を以て、途中屢飢渴の憂に瀕せし事あり。既にして江戸に達

する前數日、一渡津に會す。時に囊中半錢を餘さざりき。故に舟夫敢へて渡船に應ぜず。こゝにみづから衣服を頭上に纏ひ、一躍して泳ぎ去らんとす。舟夫之を見て更に渡さむと云ふ。即一喝して曰はく、奴輩今にしてこの言をなす。既に遅し。何ぞ汝等の力をからむやと。遂にみづから游泳して渡る。江戸に達して後、親戚故舊のよるべきなく、師傳知己の托すべきなし。仍りて大八車夫となり、又消防人足となる。然れども、閑を偷みて書を讀み、專正義博學の師を得て、これに従はむとし、敢へて一日も怠ることなし。或日消防隊徒の一人、その頭取の意に逆ふて拉殺せられむとす。篤胤その慘に感じ、身遂に彼が如きに遇はむ事を慮り、その組を脱し、當時有名の俳優市川團十郎七代目也に依りて、弟子たらしむ事を請ふ。團十郎これを諾して、その落魄を憐み、篤胤の載籍に涉獵せるを以て、これを待遇する事極めて懇篤なり。遂にその兒の訓育を托して、これが師傅たらしむ。依りて屢劇場に入し。演本の誤謬をも訂正し、裨益する所甚多し。仍りて深く淨瑠璃の妙を極む。こゝを以て、異時篤胤の盛名赫々の時に及び、漫りに淨曲の弟子を以て、みづから唱ふる者ありきと云ふ。かくてこの俳優界も猥雜にして、その意に適せざれば、他に轉せむ事を思はる。時に偶々人あり、常盤橋外某店の炊夫とならむ事を勸む。篤胤諾して其店に入る。飯を炊き終れば、他に勤むべき事なきと、夜間常燈の點在あるとを喜び、遂に糊口と學問とのため

に、苦使せられて艱難流離四五年を経過す。

寛政十二年八月、備中國松山城主板倉侯の藩士、平田藤兵衛篤穩の嗣となり、板倉侯に仕へて江戸に住居す。これより先き、板倉侯常盤橋見附の勤番を役す。一日厠に上り、咿唔の聲を聞き、従者をしてこれを探ねしむれば、篤胤の店頭に讀書を成すなり。侯これを奇とし、番頭平田藤兵衛をしてその素姓を糺さしむ。藤兵衛その志を感じ、吾家に寓せしめて、讀書を成さしむ。おのれに子なきを以て、遂に養子となし、その家を繼がしむ。これより、平田氏を稱せらる。時に年二十五なり、藤兵衛は山鹿流の兵學を以て一家を立て、教場を江戸に開きて諸生を教授せり。

篤胤曾て紙屑買より反古數多を買取られしが、その中に古事記の古本ありしを、其の妻女之を見て曰はく、こは皇國の古史なれば、必讀み給ふべしと。依りてこれを熟讀含味し、はじめ皇國の古學を研究すべき志を起せりといふ。かくて板倉侯は小藩にして、平田家の俸祿百俵なれども、渡方時々滞りて、一年これを勘定せしに、代價にして、金百三十兩餘の取不足となれり。然るに大人は、銳意修學に意を用ひて、家計の事なき意に介せざりしかば、遂に二百金程の借財に及び、甚艱難なりし故に、滞祿の渡し方を願ひしに、勘定役のもの申聞せるは、百餘金の事、主人勝手不如意なれば、渡しがたしとなり。こゝにおきて

篤胤の曰はく、滯祿わたし給はずば、金主より公邊に出訴に及ばむ。然る時は主家に濟せ方申付られむは先例あり。さては主君の名譽に關し恐ければ、先以て私に永の暇を賜はるべしと願ひければ、是非なしとて永の暇を賜はりけり。その後、加賀國主前田侯をはじめ、三四の諸侯より召しかへむとの内意ありしかども、俸祿の爲に一身を束縛せられては、進退自由ならず、所詮天下經倫の要たる學事の妨と思ひ、一身を藩士の列におく事を好まず、一處士を以て帷を下し、以て後進の士を誘掖せむと自契はる。

享和元年、篤胤廿六才の秋七月、伊勢の松坂に至り、本居家に名刺を捧げ、以て師弟の約をなさる。然れども、門下の諸子、篤胤の氣勢を忌む者多く、讒間屢行はれて、親しく師の教を受くる事を得ず。荏苒日子を過ぐる間に、宣長翁の歿せらるゝに會す。故に空しく遺憾の涙に沈まれき。この時いまだ皇學、海内に普く行はれず、修身道德の學は、徒に儒佛の支配に屬せり。然るに僧侶は、幽冥を專にして來世の禍福を説けども、顯界の事業を度外におき、儒士は、現世の經倫を主として、修身の常理を談ずれども、神明の境界を虚誕の如く蔑視し、悖道無道にて、わが 天皇の至尊たる謂を知らず。双方相互に缺點多し。吾いかでか古學を起して、神州蒼生たる本分を講せざらむと、憤慨せられき。或時、太宰春臺の著書を見て、大にその悖言を憤り、則一書を著し、名づけて呵妄書といふ。時に年二十八なり。

その後專思志を千古に潜めて、内外の史籍を涉獵し、天地の眞理を發揮して、皇國の元氣を振興し、惟神の大道を宣揚して、忠君の志氣を激勵せられむとして、まづ、古道大意、鬼神新論、西籍概論、出定笑語、伊吹於呂志等の書を著されたり。これより先、家を眞管乃屋と號し、始めて門戸を張り、徒弟を教授す。この時、新著德行式成る。一にこれを五徳説ともいふ。後、毎年書を著さる事なく、文化四年に復醫師となり、名を玄端と改む。五年、神祇伯王白川殿、命令を諸國附屬の神職に下し、古學を教授せしむ。篤胤、これにあづかりて功あり。六年、山下町に移り、弘く古道の講説を始む。尋で儒佛及諸道の大意を講せらる。

文化八年、三十六歳の時、門弟柴崎直古が郷里、駿河國の人人の請ひに従ひ、且かねて感ずる所もありて、直古が邸宅に寓居し、諸子に教授せられたりしが、その年の十月に至りて、諸子に告げて曰はれけるは、年の終の事業もしげく、來春のいとなみ事もあなるべければ、汝等もはら然る方に勤みてよ。予は、箱根山の霜雪を踏分けむも、佗しければ、冬知らぬこの暖國に旅居して、春を迎へぬべし。かくて既くより、汝等の請へる事もあなるに、おのれも背て思ふ事のあれば、何方にまれ、靜なる家の一間をと言はる。よりて直古一間を見立て、參らせぬ。茲に篤胤、古書等數部を取集めて、其の一間にさし籠り、夜の衾を近付けられず、日夜書籍を披きて筆硯を友とし、朝夕の御僕の間も、書冊を左右に置れたりとぞ。

さてその月の五日より十二三日の頃まで、夜は七夜晝は八日の間に、古史徴の稿を成されけり、茲に直古謂へらく、如斯晝夜となく物し給ひなば、身體疲勞し給ふべしとて、今夜より床に入らせ給へど申しければ、最早古史徴の草稿全く成り終へたれば、暫時睡りぬべし、覺めむまでは、なおおろかしそとて、頓て衾引かつぎ、高喚して甘寝せらるゝ、事一日二夜なりき、直古又餘りに長寝し給ふが心もどなさし、竊に覺し參らせければ、起居給ひて、な覺しそといひし物をといはれき、頓て又文机に居寄りて、勤まるゝ、事前の如くなりきと云ふ。

爾後十年間は、古史成文、古史徴開題記、神代系圖、靈能眞柱、古史傳等の著述に勤勉強せられて、更に寸暇もなかりきとなり、かくて學室の戶外に、竪一尺二寸計巾二尺計の、口演一札を張置かれたり、その文に曰はく、

この節、別して著述取急ぎに付き、學用窮理談の外、世俗無用の長談御用捨可被下候、塾生といへども、學事疑問の外呼ぶ事なくば來るべからず、道義論辨の事において、は、終日終夜の長談たりとも、厭ひ無之候事。未五月
となむありけるとなり、

同十三年四月、始めて鹿島宮、香取宮、及息栖神社に詣で、遂に諸社を巡拜して、天の石笛を

得らる、因りて家號を伊吹廼舎と改め、通稱を大壑と稱す、後文政五年東叡山の法親王より命ありて、その著書を徵さる、茲に於て古史成文以下の四種を奉りしかば、八月法親王より賞ありて、白羽二重二匹上下地一具を賜りたり、同六年古史成文等の書を、朝廷に奉らばやと思はれ、豫て神籤を探り、仙風道骨本天成 復遇仙宗爲盟主 指日丹誠謝巖谷 一朝引頸向天行といふを得らる、かくて、

せゝらぎに潜める龍の雲を起し、天に知らるゝ時は來にけりと詠み、その年の七月、京都に上り、同門の藤井高尙が、鐸之舎において教授し、爾たるを訪ひ、箕田水月、六人部節香等に交り、從三位富小路貞直卿の傳奏にて、古史成文、古史徴、開題記、神代系圖、靈能眞柱、古史傳抄録、其の他數部の書を、仙洞御所に奉り、又節香の子是香後篇風翁の門人となるの周旋にて、禁裡御所にも献上したりしかば、天覽叙威の四字の印章を、著書の卷頭に相用ふべき勅許を蒙り、その他金銀彩色の短冊二百枚と、外種々賜物ありき。

又吉田家より、同家附屬の神職に、古學の本旨を教授せらるべき旨、囑托せられたり、全年九月、紀伊國和歌山に往き、本居大人の義子、太平翁に面會せらる、その時贈答の和歌あり、
武藏野にくき落ちてあれど今更に寄り來し子をば憐ども見よと言ひ送られければ、太平翁より、人の頬かまむばかりに物いひし今日相見れば、憎くしもあらずと答へ送

られけり。太平翁特に喜びて、宣長翁の手づから作りおかれし、みづからの御靈代の櫻木の笏并に、翁の存生中、門人等が竊に寫しとれりし肖像に、自讃せられし一軸を授與せられ、道統繼承の印とせられけり。その十月に伊勢に赴き、神宮を拜し、又山室山に大人の墳墓を拜して、

東の間も忘れずあれば、今日殊に偲びまをさむ言の葉もなしと詠まれ、松坂に至りて春庭を訪はれけり。春庭翁大に歡びて、宣長翁のいまだ考へ得られざりし考案は、尙考へつぎてよなきといひて、翁の平生用ひられし筆墨などを贈られたり。

かくて江戸に歸り、著述に暇なかりしが、天保七年、扶桑國考の稿成りたり。やがて東叡山の法親王より、家臣豊田正親を以て、その書献上あるべきよしの沙汰あり。殊に其の一部をば、法親王の御思召を以て、時の關白鷹司殿の手を経て、禁裡并に仙洞御所にも奉獻せられきとぞ。則翌年正月十八日、御用人進藤周防守隆明より、法親王の命をぞ達せられたる。その略に曰はく、先達て平田篤胤献上の扶桑國考の事、關白殿下に申遣したる所、その返事に右の書篇と披見いたしたるに、古來の事跡委しく考て、心得に相成るべき事少からず。甚大慶に存じ候。この書仙洞御所へ御進獻候は、御感おはし候はむと申し越したり。となり。二月六日に至り、又上意を傳へられて曰はく、扶桑國考の事、關白殿下熟覽あり

て、甚感心なり。皇國の事、かくまで厚く盡力いたしたる事、奇特なり。就いては、仙洞御所へ御進獻の事は、申すまでもなし。禁裡御所へも、早く御進獻なさるべく、必敬感あらせらるべく候。尙又准后殿下よりも所望あり。別に一部相添へ遣すべき旨、關白殿下より申し越したり。となり。五月に至り、法親王より、白銀十枚を以て、その功を賞せらる。

又、尾張水戸田安等の諸侯より、徵招の命ありつれども、應せられず。唯その望みに任せて、著書をのみぞ獻せられ、仍りて、諸家より、扶持米金銀等の助成あり。薩摩の島津侯よりは、侯が自筆の顯幽無敵道の軸物等を贈られ、京都二條家よりは、古學宗匠の號を賜り、神祇伯白川資敬王よりは、改めて神祇道の學頭として、白川家學師職の事を囑托せられ、神祇等を厚く教授いたすべき旨、依頼せられたり。資敬王より、帝道唯一と自書せられたる絹地を賜はる。篤胤六十三の時、出羽國秋田の藩主佐竹侯、その名聲の甚高きを聞き、禮を厚くして、頻りに歸藩を望まれ、舊氏大和田を稱するに及ばず、平田氏を唱へて可なりとありしかば、郷國の藩主の寵命を辭するに忍びずとて、終に秋田に歸藩せらる。

さて皇道の氣焰天下に瀾臺するに従ひ、大義名分の説、遂に徳川幕府の忌憚する所となり、遂に群小の奸策に陥れられたり。その所爲は、幕府の儒臣林家の一族等、日に月に古學の説、盛に唱道せられて、儒道の排撃せらるゝを惡み、遂に扶桑國考の絶版を命せらるゝ

に至れり。又天朝無窮曆の著たる頗る司天臺の説に違へりしかば、こゝに幕府の閣老等が、大人の身分履歷等を糺す事とは成れり、依りて秋田藩よりは、左の如く上申したり。平田大憲義は國元出生の者にて、大和田清兵衛の四男にこれあり、若年の頃より國學修業として江戸に出で、追々出精に付き、先年家人に召し立て、高百石宛行ひ、學館へ入れおき、國學方申付けおき候と答へられ、又大人みづからも上申書を差出されき。これに就て、年頃尾張侯より學資にとて、扶持米を賜りしも止められたり。その時に、

今は朝三つの實もなし老猿の土をはみてや神ならはなむ

朝三つの實さへめされつ今日よりは子等は土はめ道教へてむ

三つの實は皆めさるともわれ死なむ新具蘇姫のまさむ限りは

どなむ詠まれける。又思ふ旨ありて、根岸の里に家を移さるゝ時、水戸侯へ暇申しにとて行き給へりしをり、

今の世に引人もなき陸奥のあつたら眞弓張らずもあらなむとぞ詠まれける。

さてその年の十二月晦日、閣老太田侯より、佐竹侯の留守居役を呼出し、書面を以て、平田大憲早々國許へ差遣さるべく候事と有りたり。これに依りて、翌年則大人六十六才にして、將に江戸を發せむとす。その時、肥後の國主細川侯、又薩摩の島津侯の如きは、争ひて大

人を聘せむとせしかども、更に應せられず。遂に袖を拂ひて出羽の秋田へぞ赴かれける。その途に就かれけるとき、

青蠅の空を飛ぶ世に耻づる身の面を照せ玉銚の道と又同じ時

武藏野に棄てられぬとも久延彦の又秋の田に立榮えましなむ詠まれたり。斯くて舊家大和田盛胤の邸に着かる。藩士等篤胤の歸郷せるを聞きて、來訪するもの甚多かりしが、その人と語るに、江戸の菊花の佳麗なるを以てするのみにて、遂に餘事に及ぶことなかりきとぞ。おはれ英邁學識の士、その胸中にはすなはち別乾坤のあるありて、浮世の榮枯盛衰に相關せざる事斯の如し。時に年既に耳順を越えられつれども、鏗鏘として壯士の如く、和氣藹然として満面笑を含み、絶えて憔悴の色なかりきとなり。

大人曾て若狭國の人伴信友と水魚の好を結び、兄弟の盟をぞせられしが、後故ありて絶交し、吳越の觀ありしに、信友の門下に高橋某といふものありて、秋田藩の近臣たりしを以て、信友これをして篤胤を中傷せしむ。而して藩主の識量、大人の俊傑有爲の才たるを測る事なし。依りて慨嘆して、

張る弓を放ちもあへず秋の田に又立つ足もなきをほづかなと詠まれ、喟然として蒼蠅のはらひがたきを嘆じ、頗る歸藩の事を悔いて、更に細川島津の二侯を撰び、これが

聘に應せむとせられ、匆卒に旅装を理めむとし給ふ。こゝに諸人深く篤胤の不遇を悲み、これを留めむと欲すれども、藩主猶豫して決せず。近臣介川東馬をして、その學識を試みさせけり。こゝに東馬、篤胤と漢史を談じて徹夜す。東馬深くその才學曠遠にして、古今獨歩の技倆あるに服し、翌日主侯に謁して、その由を告げまゐらす。よりに更に俸祿を増與して近臣とせられけり。

天保十三年、東叡山の法親王の執奏により、天朝無究曆を朝廷に上りけるに、叡威特に淺からず思召され、金三千匹と白縮緬二匹とを賜はる。全十四年七月より病にかゝり、日に篤くして終に立つべからざるを知り、九月十九日の事にやありけむ。

思ふ事一つも神に勤め終へず今日やまかるかあたらこの世をど辭世を咏まれ、全閏九月十一日遂に歿せられたり。時に六十八才なり。遺骸は、秋田城北の廣澤山に葬る。後弘化二年三月、白川神祇伯王殿より、その學業を追賞せられ、神靈能桂大人といふ諡號を賜り、而して文久二年正月、改めて靈社の號を贈らる。明治昭代に當りて、羽倉岡部本居の三大人と共に、正四位の贈位にぞあづからせ給ひける。

大人に二男一女ありけるが、男は共に天逝しける故に、武藏國の人碧川鐵胤を、數多の門下中より擧げて一女に配し、以て家を繼がしめらる。その人と爲り、廣額隆準、眼大にして

額骨高く、頬頰鋭尖、鳶戸にして瘦軀、顔色凜然として、冒すべからざる威あり。その人を見るに、肺肝を透して秋毫を貫くが如き明鑑あり。平生人に接する時は、兒童もその徳になれ、その變に遇へば、猛虎も爲に震慄せむばかりの氣象あり。且博覽強記にして、一切經を三度まで閲藏せられきとなり。大人曾て門下より俊才のもの八人を撰び、各その長ずる所に從ひて學術の一部を授けらる。則生田國秀には易道を以てし、鐵胤には曆道を以てす。その他、川崎重恭、松浦道輔、宮負定雄等の如き、各その長ずる所によりて、豫め授くる所を定められき而してみづからこれを斷じて曰はく、この入士を混じて一團となさば、又一の篤胤なきを憂へずと、その古學は以て名聲を一世に轟し、生涯の著書一百餘部、束修の門弟五百人餘、普通入門の者二千人に餘れり。其の勤勉なりしを語り、或は博識なりしを云ふは、なかゝ思なりと云つべし。

皇政維新の戦亂に際し、奥羽の諸藩相合議して、徳川幕府を助けむとし、皆白石に會盟せり。秋田藩も亦その列に加はる。然るに同藩は、早く大人の陶冶しおかれたる古道の學流を汲めるものありて、勤王の正氣あるが故に、澤爲量卿錦旗を捧げて來り、義兵を募集せらるゝにあたり、諸藩多くは佐幕の爲に開戦せむとす。爰に當時の盟主仙臺藩より、使節を秋田に遣して、白石の盟約を履行せむ事を迫る。こゝにおきて藩論沸騰し、物情胸々、危

々一髪の勢なりしが、古道の學流を汲める天忠組の諸士が大義名分を明にせむが爲に、一大斷行を加へて仙臺の使節を屠戮し、義兵を募集して澤卿を援助し、遂に勤王の正義を樹立する事を得たりと云ふ。是實に大人が豫め陶冶せられし力にして、古道學の餘光豈烟々たりしにあらざるや。

維新以後明治廿四年に至るまで、毎年の新嘗祭には、赤坂離宮御構内なる、田園にて作らせ給ひし稻を以て、その神饌を調進せしめ給ひしが、その翌廿五年よりは、各府縣の人民に初穂を獻納せしめ、以て神饌を調進せしめ給ふ事となりて、地方官より人民に諭達ありき。是に依りて諸府縣より獻納の初穂は、聖上大躬親から御點檢あらせらるゝを以て、何れの縣も實におろそかあらねど、特にきはやかなりしは、秋田縣の獻納にて、白玉の如き一粒撰の初穂米を、清らかなる桐の箱に入れ、初穂米何升何何千何何百何何十粒と明記せる、獻納書をさへ添へたるなど、その殷懃丁寧なる敬神の厚志をば、敬感斜ならざりし由なるが、これに就て土方宮内大臣は、これ全く平田篤胤が布き施しおける古道學の餘光なりとて、いたく賞嘆せられきとなり、これ等一二の遺事を聞くに付けても、大人の精神金鐵の如く固く、敬神尊王の餘烈歿後にも尙凜然たることを知るべきなり、今その著書を擧ぐれば左の如し。

古史傳	古史成文	古史徵	古史徵開題記
古史本辭經	三神山考	參考神名式	俗神道大意
神字日文傳	鶴字篇	玉手櫛	天說辨々
大道或問	志都能石屋	靈能真柱	古今妖魅考
古今乞盜考	三五本國考	扶桑國考	伊勢物語梓弓
皇典文集	歌道大意	天柱五嶽考	大同本紀逸文
赤縣太古傳	六家要指論	三大考辨々	古道大意
每朝神拜詞記	天津祝詞考	童蒙入學門	大祓詞再釋
入學問答	鬼神新論	終古冬至格	皇國度制考
赤縣度制考	孔子聖說考	春秋命曆序考	古今星運考
幹支字原考	弘仁曆運紀考	春秋曆本術編	古今日契曆
古今交他圖範	古史年曆編	玄學得門編	象易編
神仙服藥編	神仙導引編	神仙採補編	神仙方術篇
神仙教化編	神仙行氣編	葛遷翁文粹	老子集語
太一遁甲古義	欽命錄	太昊古易傳	三易由來記

五嶽真形圖說	古學諄辭集	夏殷周年表	三曆由來記
老子經集解	天朝無窮曆	三統曆譜考文	古曆月步式
弘仁曆運紀考	太昊古曆傳	古道太元圖說	前漢曆史辨
家相九說辨	三統曆譜集解	三統曆譜辨	天象實義
醫道大意	牛頭天王曆神辨	醫宗脈言	玄學月令編
醫宗仲景考	徵古歲時記	關學用意	傷寒雜病論集解
印度藏志	金匱玉函經考文	出定笑語	名醫方函類編
悟道辨	仙境異聞	呵妄書	密法修事部類
武學本論	家禮徵古編	巫學談弊	西籍概論
再生紀聞	しもとのまに	千島白波	稻生物怪錄
尻口物語	萬聲大統譜	師長論	伊吹廼舍筆叢
伊吹廼舍文集	伊吹廼舍歌集	雜稿拾遺	

城戸千楯

二四三八五二
二五〇五五二

千楯は、本居大人の門人にして、京都の書肆なり。通稱は蛭子屋範次、益堂又紙魚室と號し、鐸の屋におきて徒に教授す。その徒甚多し。千楯歌學を善くし、和歌ふるの山ふみを著し、今に歌學者間に賞用せられ、初學の徒を裨益する事少からず。弘化二年九月廿一日歿す。年六十八なり。洛の黒谷山上に葬る。その著書は甚少し。

和歌ふるの山ふみ

雅言通載抄

勅撰和歌初句類聚

紙魚室雜記

岸本由豆流

二四四九五一
二五〇六六一

由豆流は、村田春海の門人にして、江戸の人なり。もと朝田大隅と稱し、拵園又楳棠園又尙古考證園など號す。伊勢國の生なり。故ありて幕府の御弓弦師、岸本家を繼ぎ、神仙巨勝子園の賣藥をもなせり。由豆流、幼より讀書を好みければ、織錦翁の門に入りて、和學を修め、家の業を長子某に譲りて、向島白鬚神社の下に退隱せり。本姓の朝田をも立て、ひとて、次男弓槻を連れて、淺草福井町に別宅を作り、朝田權之進と呼ばれ、やがてその業を弓槻に傳へ、頭髮を削り、聖天町に轉居し、著述にのみ力を盡したり。その最も長じたる所のものは、考證の學にして、その著多くはこの範圍にかゝれる者なり。暇を得れば、春は向島の花

を眺め、秋は隅田川に月を弄びて、浮世をいとも静にぞ送りける。狩谷掖齋と意氣相投じ、殊に姻戚の好みあればいと美はしく、互に古器を鬪はし、奇書を代へなとして打興せらる。その藏書は三万巻に及び、儲藏志十巻に及ぶといふ。その富以て思ふべし。弘化三年五月十七日、病に罹りて歿す。年五十八なり。淺草誓願寺中林宗院に葬る。其著書は左の如し。

- 徒然草考證 十六夜日記考證 土佐日記考證 多武峰中將物語考證
- 鳴門中將物語考證 新とりかへばや物語考證 江談抄考證
- 古事談考證 續和歌集考證 漢故事和歌集考證 契沖雜記考證
- 契沖雜々記考證 會丹集考證 堀河院百首考證 草山和歌集考證
- 契沖俳諧歌考書 永久四年百首考證 諸國土産考 古今集序考
- 棊棠園雜考 讀書爲宗 和泉式部家集標注 題書類纂
- 皇朝風土記鈎沈 八代集増註 日本紀覽宴和歌標註 拵園類纂
- 拵園儲藏志

伴信友 二四〇三五一

信友ハ、本居大人の門人にして、若狹國小濱の人なり。本姓は山岸洲五郎、立入と號し、江戸に住す。信友博覽強記にして、最も史籍に通ず。本居大人の學風を慕ひ、門人たらむと欲し、その門下村田春門を紹介として、入門せむ事を乞ふ。春門やがて書を松坂に贈りて、その志を告ぐ。しかしてその書いまだ達せざるに、大人歿せられけれども、嗣子太平、その篤志を感じて、名簿を靈前に奉り、門下の列に加へたり。後屢書を通じて大人の遺説を問ひ、以て業を修めたりといふ。

信友はじめ平田篤胤と親しかりしが、後故ありてこれと義絶し、只管古學を研究して怠らず。古書數種を校正し、考證家を以て世に稱せらる。信友弟子を教ふるを好まず、常に一室に籠りて、筆硯に従事しければ、その著書の多き事百有餘部に及べり。又茶を好みければ、暇を得れば、直に茶を煎す。然れども人を勞するを好まず、みづからこれを調じたり。といふ。弘化三年十月、年七十四を以て歿す。若狹國發心寺に葬る。明治昭代に當りて、正四位を贈られたり。其著書を擧ぐれば左の如し。

- 高橋氏文考 若狹舊事考 上野三碑考 和氣系圖付考
- 獸肉監湯考 神樂催馬樂歌音考 眞卷弓韌考 加佐々伎考
- 神社私考 八所御靈考 八幡神考 大刀契考